

含まれるが、緻密である。焼成は良好であり、色調は暗赤褐色を呈する。18, 22は19と同一個体であり、24は器壁の薄い土器で、斜格子目文が描出される。21, 23は同一個体であり、19より細い沈線で斜格子目文が描出される。いずれも暗赤褐色を呈し、21, 23は白色粒子が目立つ。25は口縁部に太沈線が1条巡り、以下細沈線による斜格子目文が描出される。暗赤褐色を呈し、白色粒子が目立つ。26は半截竹管の内面による平行沈線で斜格子目文が描出されるもので、赤褐色を呈する。

第6類（第92図27）

平行沈線により波状文が描出されるものである。27は、半截竹管状施文具内面による併行沈線で波状文が描出されるもので、角頭状を呈する口唇部に同一施文具による結節状の刻目が施される。胎土は細砂粒を多く含み、白色粒子が目立つが緻密であり、色調は暗赤褐色を呈する。

第7類（第92図28）

無文土器である。28はヘラ状工具による器面整形が浅くて太い沈線状を呈するが、沈線とは区別される。口唇は若干外削状を呈する。胎土は小礫、白色粒子が目立つが緻密であり、暗赤褐色を呈する。

第8類（第92図29, 30）

底部を一括する。2片しか出土していないが、29は器壁の厚い底部であり、先端は極小さな平底状を呈する。器面は削り状の調整がみられ、胎土は緻密であるが白色粒子が目立つ。30も器面に削り状の調整がみられ、小礫、砂粒が目立つ。29, 30は赤褐色を呈する。

第9類（第94図13, 14）

隆帯文と沈線文が描出されるものである。13は細い隆帯が水平に配され、細かい刻みが施される。胎土に白色粒子が目立つが緻密な土器であり、橙褐色を呈する。14は細目の隆帯と細沈線が水平に施文されるものである。胎土は白色粒子が目立ち緻密であり、焼成も良好である。隆帯には部分的に縦状の貼付文がみられる。13, 14とも堅密な土器であり、器面はよく研磨されている。器壁が薄く、繊維は含まれない土器で、第Ⅲ類の末葉に位置付けられるものである。

第Ⅳ群土器（第92図7, 第93図1～20）

貝殻腹縁文により各種のモチーフを描出するものを一括する。モチーフ、施文手法によって類別される。

第1類（第93図1, 2）

貝殻腹縁を押し引きながら連続刺突状に施文する帶状文を呈し、帶状文がモチーフを描くものである。1は口縁と併行に貝殻腹縁帶状文が4段施文されるもので、口唇部に絡条体圧痕文が押捺される。口縁は器壁がやや薄くなり若干外反し、口唇部が角頭状を呈する。胎土は繊維を含まず、砂粒、小礫が多く含まれ、白色粒子が目立つ。焼成不良で、器面がざらつく。色調は灰褐色を呈する。2も1と同様貝殻腹縁帶状文が3段施文されるものであり、胎土に小礫と白色粒子が目立つ。色調は橙褐色を呈する。

第2類（第92図7, 第93図6～9）

貝殻腹縁文が縦位に施文されるものである。6は角頭状の口唇部を呈し、面取りされた口唇上に貝殻腹縁の圧痕がみられる。口唇下から長さ2.5cm位まで縦位の貝殻腹縁文が密に施文されている。

胎土は緻密であり、繊維を若干含む。堅緻な土器であり、裏面に擦痕がみられる。色調は赤褐色を呈する。7～9は貝殻腹縁文がやや間隔を開けて縦位に施文されるものである。7, 8は繊維を含まず、9は若干繊維を含む。7, 8が灰白色を呈し、9は赤褐色を呈する。第92図7は貝殻腹縁文が縦位に浅く施文されるもので、斜位に浅い沈線がみられる。色調は灰白色を呈し、繊維を含まず、白色粒子が目立つ。比較的軟質な土器である。

第3類（第93図3～5, 10）

貝殻腹縁文が斜位に施文されるものである。3は角頭状を呈する口唇部に貝殻腹縁の圧痕が施され、口唇下にやや間隔を開けて貝殻腹縁が斜位に施文されている。貝殻腹縁の内側を、器面對してやや斜めに傾けて強く押捺すため、腹縁文は弧状を呈する。繊維を少量含み、表裏面に条痕が施文される。色調は赤褐色を呈する。4は口唇部が先細りとなり、貝殻腹縁による刻目が施される。5は口唇部が角頭状を呈するが、刻目は施されない。4, 5, 10の貝殻腹縁文は3と同じ施文法であり、胎土、色調も類似する。表裏面に条痕が施文されている。10の色調は灰白色を呈する。

第4類（第93図11, 12）

貝殻腹縁を縦位に置き、水平に押し引く様に移動させることによって、刺突列が施文されるものである。11, 12は口唇部が角頭状を呈し、貝殻腹縁が押捺される。11は口唇下から浅くて薄い貝殻腹縁文が施文され、12は強く押し引く貝殻腹縁が施文されている。胎土は両者とも砂粒が目立ち、12には若干繊維が含まれる。焼成は良好ではなく、器面がざらつく。色調は11が暗褐色、12が橙褐色を呈する。

第5類（第93図13～20）

口唇部に貝殻腹縁による刻目が施されるものである。いずれも器壁が薄目であり、口唇部は角頭状を呈する。13, 16, 20は表裏面に条痕が施文されるもので、貝殻腹縁による刻目は13が浅く、16, 20が深く施文されている。14, 15, 17, 18, 19は表裏面に擦痕が施文される。17, 18は貝殻腹縁の刻目が浅く、14, 15, 19は深く刻み込まれる。14の刻目は、押し引いて施文されたものである。いずれも繊維を若干含むもので、20は多目に含まれる。13, 14, 16, 18は胎土が緻密であり、堅緻な土器である。13, 14, 18が赤褐色、16が灰褐色を呈する。15, 17, 19, 20は砂粒を多く含み、器面がざらついている。15, 19, 20は灰褐色を呈し、17は赤褐色を呈する。

第V群土器（第93図21～31, 第94図, 第95図, 第96図, 第97図, 第98図, 第99図3～15）

沈線文系土器群以降から条痕文系土器群前半までの土器を一括するわけであるが、当然、第IV群土器と前後するものも含まれる。ここでは説明の都合上第IV群と第V群に分けた。また、条痕文のみ施文される土器群は第IV群土器と明瞭に識別されるものではなく、第V群と類別した中に含まれている可能性もある。

第1類（第93図21～31）

角錐状施文具による押し引き状刺突列が施文されるものを一括する。

第1種（21, 22, 25, 26）

刺突列が縦位、斜位、鋸齒状に施文されるものである。刺突列は单一施文具により描出されるものであり、何本かを固定する施文手法はみられない。21, 25は斜位の刺突列が施文されるもので、

21の口唇部は角頭状を呈する。22は角頭状を呈する口唇下に鋸齒状の刺突列が施文される。口唇上に刻目は認められない。26は刺突列が縱位に施文されるものである。いずれも胎土は若干繊維が含まれ、白色粒子が目立つものであり、色調は灰褐色を呈する。条痕の施文は認められず、擦痕がみられる。

第2種 (23, 24, 27, 29~31)

刺突列が何段かに亘って水平施文されるものである。23, 24は角頭状の口唇部を呈し、23は同一施文具による刻目が施される。刺突列の間隔を詰めて施文すると、第IV群第4類と類似し、施文具の置換とも捉えられる。24, 27, 30, 31は刺突が深く、23, 30は浅く施文されている。31は押し引き状結節沈線状になっている。いずれも繊維を若干含み、白色粒子が目立つ。色調は23, 29が橙褐色を呈し、24, 27, 30, 31は暗赤褐色を呈する。条痕は施文されない。

第3種 (28)

口唇上に角棒状施文具による刺突が施文されるものである。28は胴部に文様が抽出されず、やや外削状の口唇に刺突がみられるものである。胎土に繊維を少量含み、表裏面とも擦痕がみられる。色調は橙褐色を呈する。

第2類 (94図1~12)

縦条体圧痕文が施文されるものを一括する。

第1種 (1~4, 6~8)

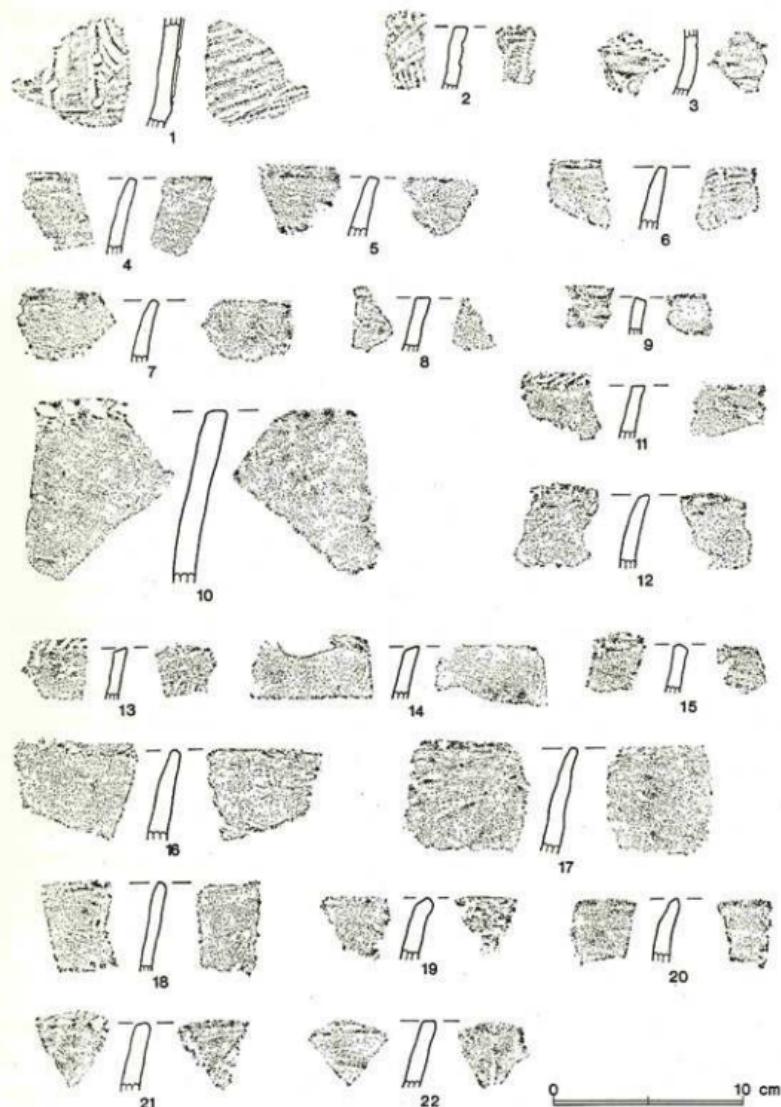
口唇下に縦条体圧痕文が斜位に施文されるものである。縦条体圧痕文は口縁部に帯状施文され、施文幅は狭い。1~4, 6は口唇部が角頭状を呈し、縦条体圧痕が施文される。7は口縁が先細りとなるが、口唇部に縦条体圧痕がみられる。この種の縦条体圧痕は、半截竹管に巻き付けられた原体の内側を押捺することによって施文されるものであり、1~3, 6は軸まで圧痕されている。いずれも繊維を若干含むが、薄身で堅緻な土器である。1, 4, 6は暗褐色を呈し、2は灰白色、3は橙褐色を呈する。いずれも条痕は施文されず、擦痕が観察される。7は表面に僅かに条痕が施文され、裏面は擦痕である。8は繊維を多く含み、器面が荒れている。この種に含められるかどうかは疑問であり、条痕文系土器群後半に位置付けられる可能性もある。

第2種 (5)

口縁部文様帶が沈線状の整形によって区画され、縦条体圧痕文が縱位に施文されるものである。5は口唇部が角頭状を呈し、上面に縦条体圧痕が施される。口縁部文様帶は器面がやや脹らみを呈し、押し潰す様に縦条体圧痕文が施文されている。原体は第1種と同様竹管の内側部が使用されており、軸の痕跡がみられる。繊維を若干含み、灰白色を呈する。

第3種 (9, 10)

口縁に隆帯が1本巡り、隆帯上と口唇部に縦条体圧痕が施される。9は断面がカマボコ状の隆帯が巡り、10は隆帯が剥落したものである。口唇部は両者とも丸頭状を呈し、縦条体圧痕文が施される。原体はかなり軟質なものを軸にしており、9では末端部分の圧痕がみられる。末端の圧痕に擦りのかかった繊維痕が微かに認められるため、軸に繩が使用されているものと思われる。繊維が少量含まれ、9は赤褐色、10は黒褐色を呈する。条痕は施文されず、器面は磨かれている。



第95図 グリッド出土土器(9)第V群

第4種（11、12）

口唇部のみ縦条体压痕が施されるものである。11は口縁が外反し、口唇上に縦条体が压痕される。繊維を少量含み、表裏に条痕が施文される。色調は灰白色を呈す。12は角頭状を呈する口唇部に縦条体压痕が施される。条痕は施文されず、擦痕がみられる。繊維を少量含み橙褐色を呈する。この種の縦条体は丸軸に巻き付けられたものが使用され、押捺面が丸く窪む。

第3類（第94図15～29）

野島式土器を一括する。

第1種（15～17）

太沈線区画に細沈線が充填されるものである。15、16は波状口縁を呈し、口唇部に刻目が施される。太沈線は回線状を呈す。口縁に沿って太沈線区画がみられ、口縁部の文様帯が区画されているものかもしれない。繊維を少量含み、橙褐色を呈する。15は補修孔がみられる。両者とも表裏面に条痕が施文される。17は太沈線が併行して垂下され、区画内に縱横の細沈線が施文される。胎土は繊維を若干含み、砂粒、小礫が多く含まれる。灰白色を呈し、条痕が施文される。

第2種（18）

細沈線区画内に太沈線が充填されるものである。胎土に繊維を含み、条痕が施文される。色調は赤褐色を呈する。

第3種（19～29）

同一の施文具によりモチーが描出されるものである。19は太沈線で矢羽状文が施文されるもので、角頭状を呈する口唇部に刻目が施される。繊維を少量含み、橙褐色を呈する。表裏面とも条痕が施文される。20は太沈線で水平に区画され、同種の沈線が矢羽状に施文されるもので、口唇部が角頭状を呈し、刻目が施される。繊維を少量含み、条痕が施文され、灰褐色を呈する。21は波状口縁であり、内削状の口唇部に刻目が施される。口縁下に水平の沈線が4条施文され、無文帯が区画される。表裏面とも縦位の条痕が施文され、胎土に繊維を少量含む。色調は赤褐色を呈する。22～27は器壁の薄い小形の土器で、21、27は同一個体と思われる。22は小波状口縁を呈し、同種の沈線が分割、区画、充填文に使用されている。24、25も同様であり、24の口唇部には刻目が施される。26は併行沈線で区画され、同種の沈線が充填される。いずれも繊維を含み、条痕が施文される。色調は灰褐色を呈する。23、27は薄い土器であり、口唇に刻目はみられない。繊維を若干含み、橙褐色を呈す。条痕は施文されない。

第4類（第95図1～3）

鶴ガ島式土器を一括する。

第1種（1）

細隆起線で文様帯が分割、区画され、沈線が充填されるものである。1は胸部の屈曲部破片であり、併行細隆起線が垂下されて文様帯が分割され、同様の細隆起線で区画される。区画内は太い沈線が充填される。垂下する細隆起線上には、丸棒状施文具を横に押捺する刻みが施される。表裏とも条痕が施文され、表面は磨消しされる。胎土は少量繊維を含むが緻密であり、赤褐色を呈する。2、3は併行沈線で区画され、結節沈線が充填される。繊維を少量含み、条痕が施文される。色調

は橙褐色を呈する。

第5類（第99図3～7）

貝殻背圧痕文が施文されるものを一括した。

第1種（3）

貝殻背圧痕が口縁下に1列施文されるものである。3の1点のみ出土した。3は口唇部が丸頭状を呈し、刻目は施されない。口唇下約1cmに貝殻背圧痕が施文され、等間隔に器面を1周するものと思われる。繊維を少量含み、条痕文は施文されない。胎土は緻密であり、色調は灰白色を呈する。

第2種（4～7）

口唇部に貝殻背圧痕が施文されるものである。4は角頭状を呈する口唇部に貝殻背圧痕が浅く施文される。表裏に浅い条痕が施文され、胎土に少量の繊維を含む。色調は灰白色を呈する。5は器壁の薄い土器で、角頭状を呈する口唇部に浅く貝殻背圧痕文が施文される。条痕は表面で斜位に、裏面で縱位に施文される。繊維を若干含み、橙褐色を呈する。7, 8は同一個体と思われ、口唇部は貝殻背圧痕文が施文されることにより、小波状を呈する。表裏とも縱位の条痕文が施文され、灰褐色を呈する。

第6類（第95図4～22、第96図、第97図、第98図）

文様の施文されない無文土器を一括する。条痕文の有無、施文法の相違により類別される。

第1種（第95図4～22、第98図6～16）

条痕が施文されない無文土器を一括する。概ね器面はヘラ状工具による器面調整痕である擦痕が観察される。胎土は繊維を少量含むが、砂粒等あまり目立たず緻密である。色調は灰白色系から暗褐色系を呈するものが多い。

a…口唇部が角頭状を呈し、刻目が施されないものである。4～7は口唇部がやや薄くなり、上端が面取りされるものである。8, 9は体部の厚身のまま角頭状を呈する。4, 7, 9は若干外削状の口唇部を呈する。いずれも繊維を若干含み、表裏面に擦痕が認められる。5, 7, 9が灰褐色を呈し、4, 6, 8が橙褐色を呈する。

b…口唇部が角頭状を呈し、刻目が施されるものである。10は器壁の厚いもので、口唇部に角棒状施文具による刺突状の刻目が施される。表裏面に擦痕がみられ、胎土に少量繊維が含まれる。色調は橙褐色を呈する。11, 13, 14は細い切る様な刻目が施されており、12は押捺状の浅い刻目が施される。いずれも繊維を少量含み、14は堅緻な土器である。色調は11が灰褐色、12～14が暗褐色を呈する。

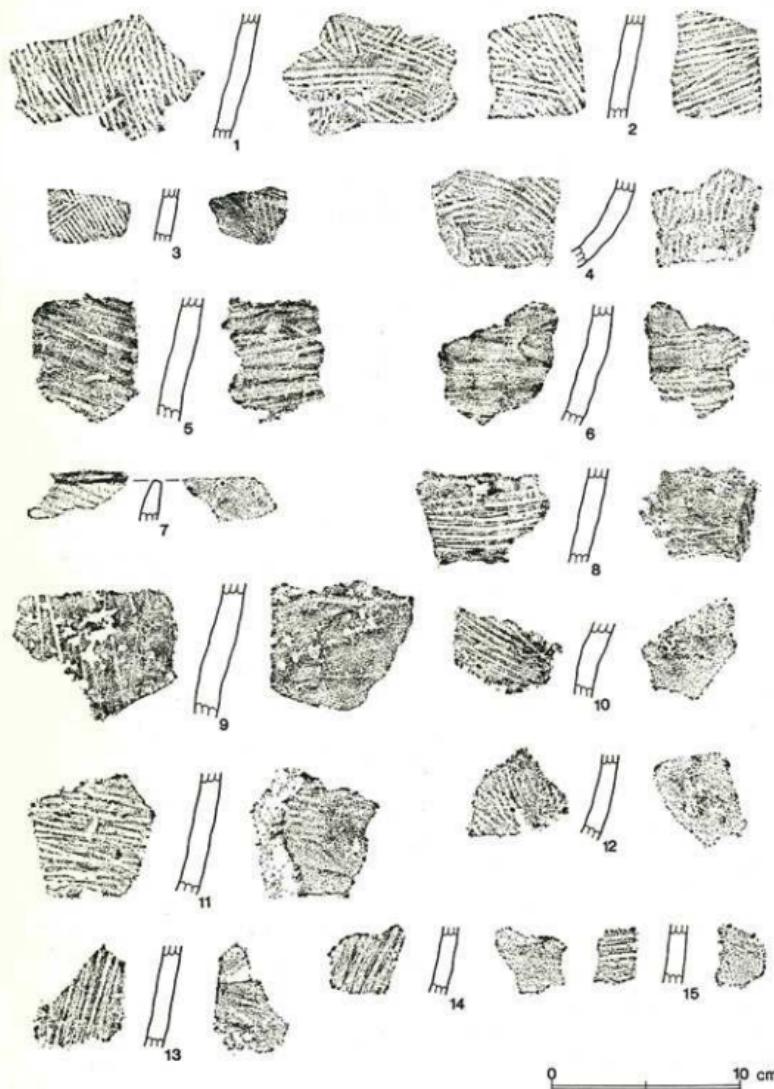
c…口唇部が丸頭状を呈し、刻目が施されないものである。16, 17は口縁部が先細りの丸頭状を呈し、19, 20は口唇部が若干外傾する。18, 20は小形の土器である。いずれも繊維を少量含み、擦痕がみられる。16, 20が橙褐色、17, 18, 20が暗赤褐色を呈する。

d…波状口縁を呈するものである。口唇部はやや丸味を帯びるものであり、刻目は施されない。繊維を少量含み、擦痕が認められる。21が暗赤褐色、22が灰白色を呈する。

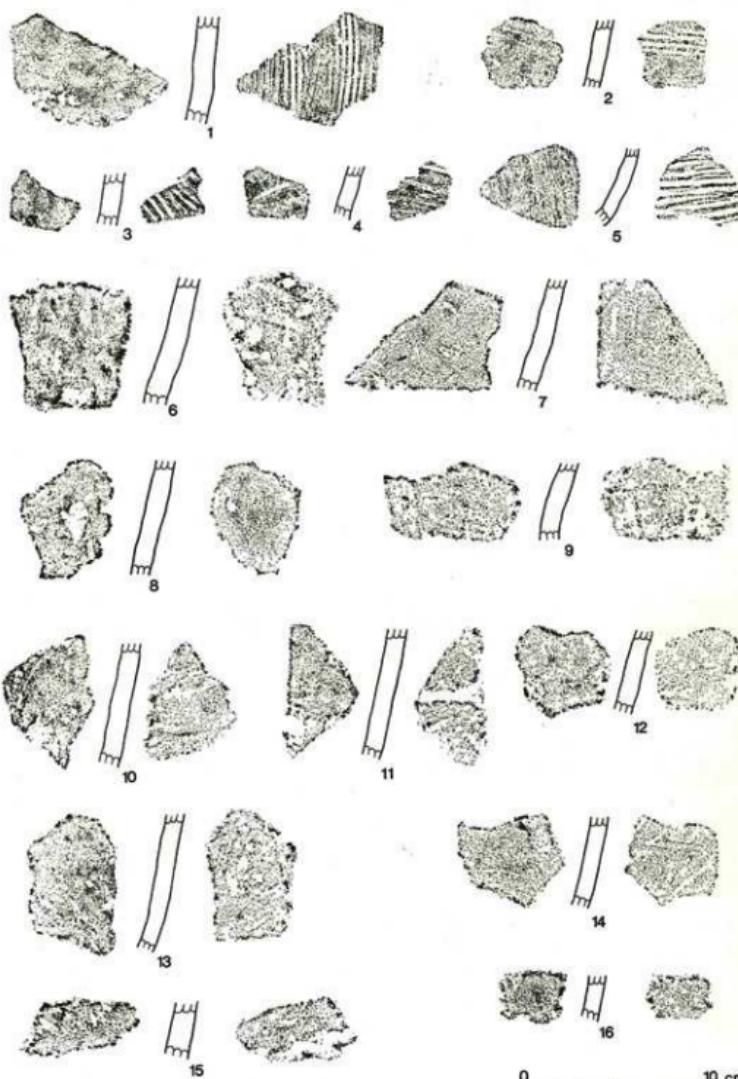
e…胴部破片で無文土器を一括する。第98図6～16はいずれも繊維を含み緻密な土器で、白色粒



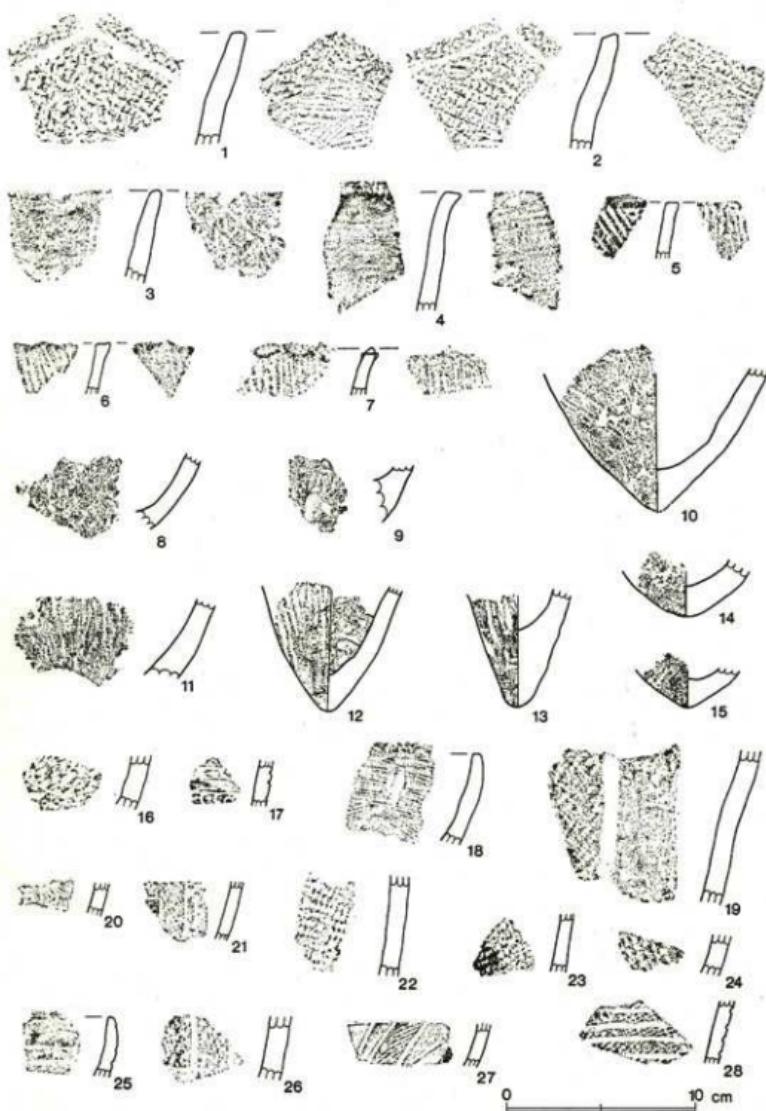
第96図 グリッド出土土器00第V群



第97図 グリッド出土土器の第V群



第98図 グリッド出土土器等第V群



第99図 グリッド出土土器第V群～第X群

子が目立つ。焼成があまり良好ではないため、裏面の剥落が著しいものも存在する。表面には擦痕が観察される。色調は橙褐色系、灰褐色系のものが多い。

第2種（第96図1～25、第97図1～6）

表裏面に条痕が施文されるものを一括する。

a …口唇部が角頭状を呈し、刻目が施されないものである。1, 2はやや外削状の口唇部を呈し、丁寧な面取りが施される。3～10は口唇部が角頭状を呈するものである。条痕は表裏とも横位に施文されるものが多く、1は斜位に施文される。胎土は第1種と類似し、繊維を少量含む。色調は灰褐色系、橙褐色系が多い。

b …口唇部が角頭状を呈し、刻目が施されるものである。11～14は押捺状の刻目が施され、15～18は切り込む様な刻目が施される。19, 20は浅い刻目が、21は口唇上に条痕が施文されている。条痕は表裏とも横位に施文され、繊維を少量含む。17, 18は同一個体であり繊維を多く含む。色調は橙褐色系のものが多い。

c …口唇部が丸頭状を呈し、刻目が施されないものである。22, 23とも器壁が薄く小形の土器であり、条痕が斜位に施文される。繊維を少量含み、橙褐色を呈する。

d …表裏面に条痕が施文される胸部破片である。24, 25, 第97図1～4は深くてくっきりとした条痕が施文されるものである。5, 6は貝殻以外の施文具による条痕が施文されるものである。いずれも繊維を含むが、緻密な土器であり、色調は橙褐色系が多い。

第3種（第97図7～15）

表面に条痕が施文され、裏面に擦痕がみられるものである。

a …口唇部が角頭状を呈し、刻目の施されないものである。7の1点のみ出土した。やや先細りする口唇部は角頭状を呈するが、強い面取り状ではない。条痕は横位に施文され、胎土は繊維を少量含むが緻密である。色調は暗赤褐色を呈する。

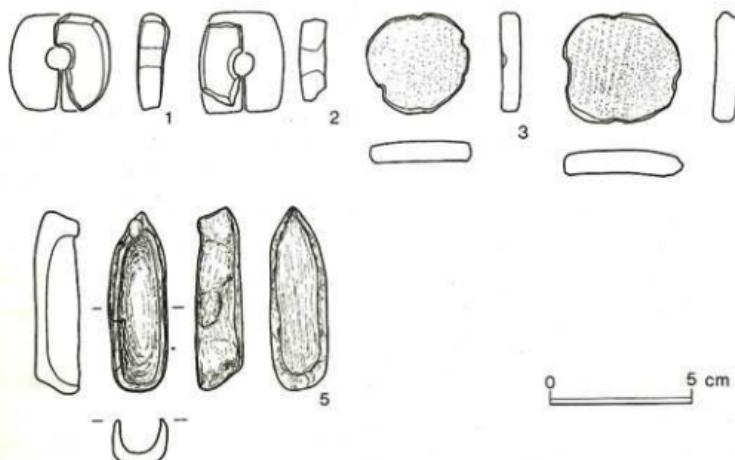
b …胸部破片であり、8, 11, 15は横位に、10, 12は斜位に、9, 13, 14は縦位に条痕が施文されている。裏面はいずれも擦痕が認められる。胎土に繊維を含み、色調は橙褐色系、赤褐色系が多い。

第4種（第98図1～5）

表面に擦痕が観察され、裏面に条痕が施文されるものである。1は裏面に縦位の条痕が、2～5は横位の条痕が施文される。表面はいずれも擦痕が認められる。胎土に繊維を含み、橙褐色系、赤褐色系の色調を呈する。

第5種（第98図8～15）

底部を一括する。13は底部が厚く、鋭角な尖底を呈するもので、繊維は含まれず、条痕状の擦痕が施文される。12はやや鋭角な尖底を呈し、先端部が突出する。繊維を少量含み条痕が施文される。色調は橙褐色を呈する。10は乳房状の尖底を呈し、先端部が突出する。繊維を少量含み条痕が施文される。14, 15は10の先端部を取り除いた様な、尖底というよりも丸底状を呈し、条痕が施文される。繊維を含み、橙褐色を呈する。8, 9, 11は底部付近の破片であり、9に擦痕、8, 11に条痕が施文される。いずれも繊維を含み、色調は赤褐色を呈する。



第100図 土製品実測図

第7類（第99図1, 2）

条痕縄文系の土器である。2点のみ出土し、1, 2は同一個体と思われる。波状口縁を呈し、口縁部、口唇部、口縁裏側に縄文RLが施文される。また、口縁裏面の縄文帯下は、縄文帯を縁取る様に条痕が施文されている。胎土は纖維を多く含み、小礫、白色粒子が目立つ。色調は橙褐色を呈する。

第VII群土器（第99図16）

1点のみ出土した。黒浜式土器であり、縄文RLが施文される。胎土に纖維を多く含み、色調は赤褐色を呈する。

第VIII群土器（第99図17, 18）

2点出土した。17は半截竹管状施文具による併行沈線間に、同一施文具による爪形文が施される諸磯b式に比定される。18は櫛歯施文具による集合細沈線が器面一面に施文されるもので、色調は黒褐色を呈する。諸磯c式に比定されよう。

第IX群土器（第99図19～24）

中期の土器を一括する。19は磨消懸垂文が施され、縄文RLが施される。加曾利E式に比定される。20, 21は懸垂文のみられるもので、縄文LRが施文される。22～24は縄文のみ施文されるもので、23, 24が縄文LR, 24が複節RLRが施される。

第X群土器（第99図25～28）

後期の土器を一括する。25は口縁が若干内彎し、口縁部に併行沈線が施され、併行沈線間は刻みが施される。掘ノ内I式と思われる。26は縄文LRが施文された上に、沈線が2条垂下している。

27は磨消繩文により、モチーフが描出されている。28は細かな繩文LRが施文され、併行沈線が4条巡る。加曾利B式に比定されよう。

土製品

土製抉状耳飾り（第100図1, 2）

造構外から出土したものであり、2点とも完形品ではなく一部が現存するものである。1, 2とも胎土は第I群土器と酷似する。中央部よりやや上に8mm前後の孔が開き、外形は面取りが行なわれる。

土鍤（第100図3, 4）

3, 4は第I群土器片が再利用されており、撫糸Rが施文されている。3, 4とも上下左右に抉り込みがみられる。

舟形土製品（第100図5）

一部を欠損するが、ほぼ完形品である。第1号炉穴から出土した。形態はカヌー状を呈し、舟首と舟尾が造り分けられており、舟底も丁寧に造り出されている。胎土は纖維を含まず、緻密であり、堅硬な土器である。色調は橙褐色を呈する。

(6) 石 器

本遺跡から出土した石器類は総数50余点を数える。以下、分類に従って説明を加えたい。

A類…石鏃（第101図1～5）

1, 4は比較的整った二等辺三角形を呈し、1は薄身に成形され、4はやや厚身で小形の石鏃である。2, 3はやや不整形であり、造りも粗い。5は未製品である。石材は全てチャートである。

B類…削器（第101図6）

6は先土器時代のナイフ形石器に類似するが、造りは稚であり、刃部は調整剥離によって造り出される。石材は頁岩である。

C類…磨製石斧（第101図7～10, 12, 13、第102図1, 2）

部分的に磨製を施す局部磨製石斧と、器面全体を磨製するものとに二大別出来る。

第1種（7～10）

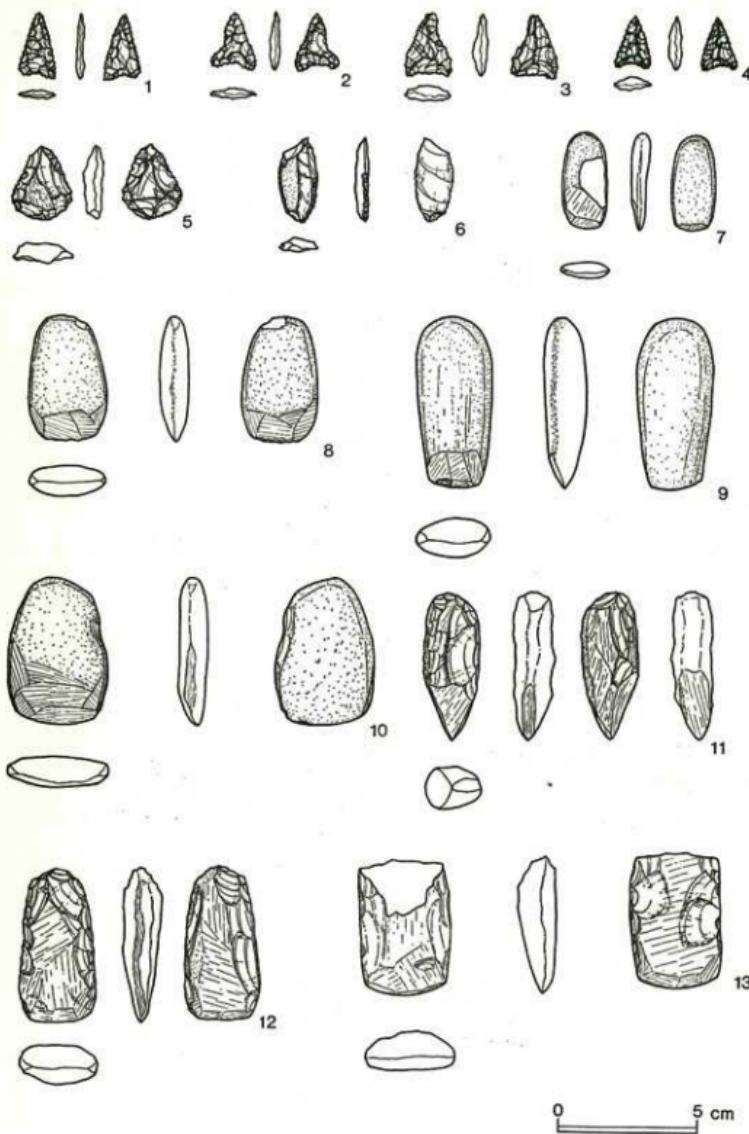
局部磨製石斧であり、扁平で薄身の礫を素材とし、刃部とその周辺にのみ磨きを施すものである。7, 8, 10は薄身で長楕円形の小礫をそのまま使用しており、刃部と側縁の一部が磨きによつて成形される。刃部はほぼ片刃状に造り出されるが、裏面にも若干磨きが施される。9は礫の幅の狭い端部に刃部が造り出され、片刃状を呈する。

第2種（第101図12、第102図1、第102図1, 2）

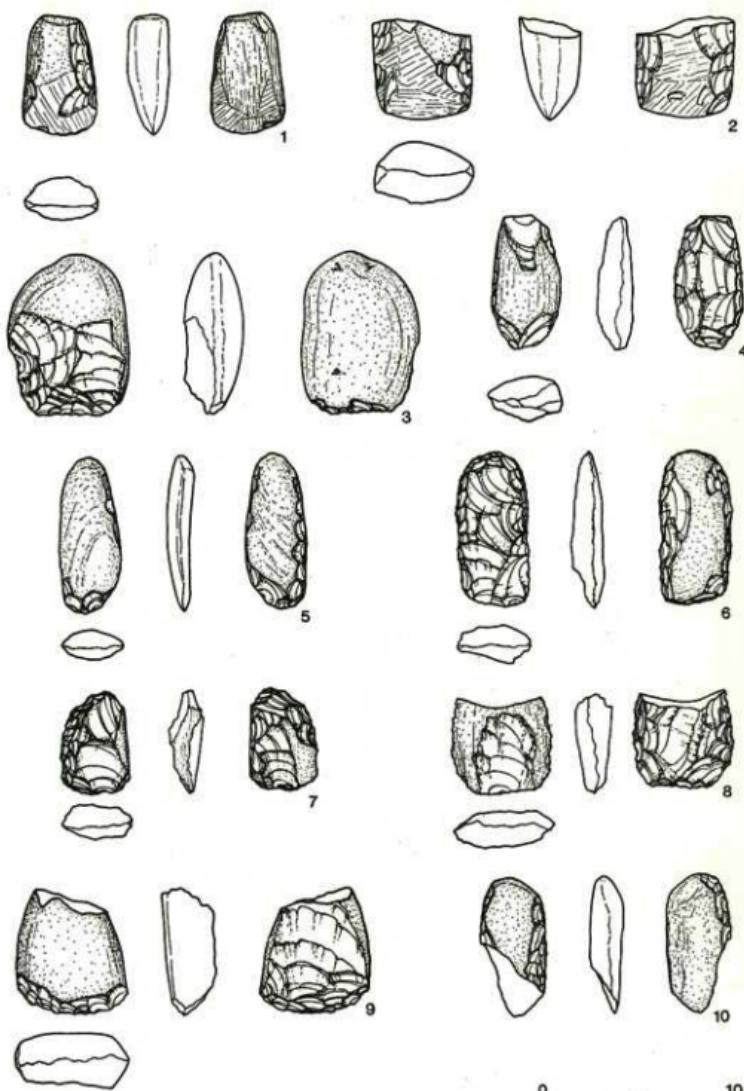
第101図12、第102図1は撥形を呈するもので、第101図13、第102図2は短冊形を呈する。いずれも器面を敲打して成形した後に、磨きを施しているものである。

D類…打製石斧（第102図4～10、第103図1, 2）

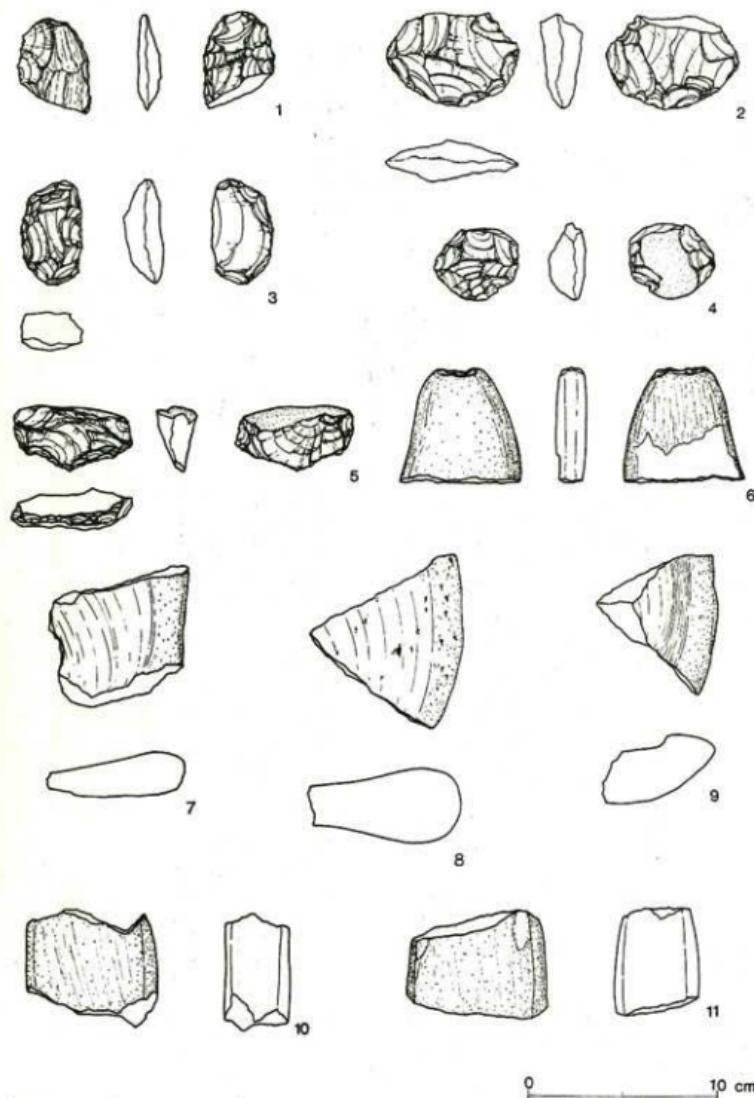
片面に礫表を残す割合が多く、5, 7, 9, 10は礫そのものを素材とし、他は剥片を使用している。造りはいずれも粗く、片面に礫表を大きく残し、刃部が片刃状に造り出されるのが特徴である。



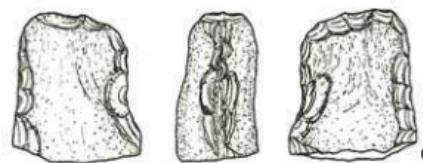
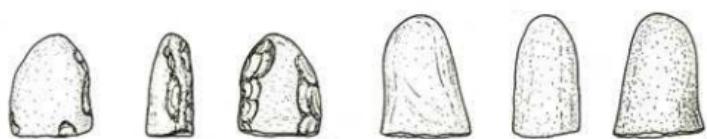
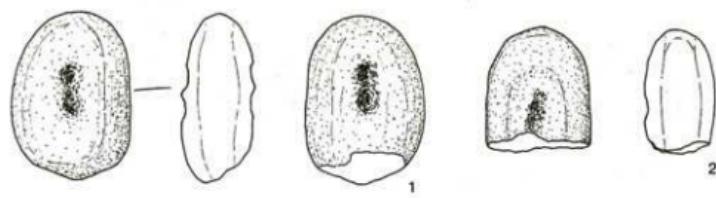
第101図 石 器 (1)



第102図 石 器 (2)

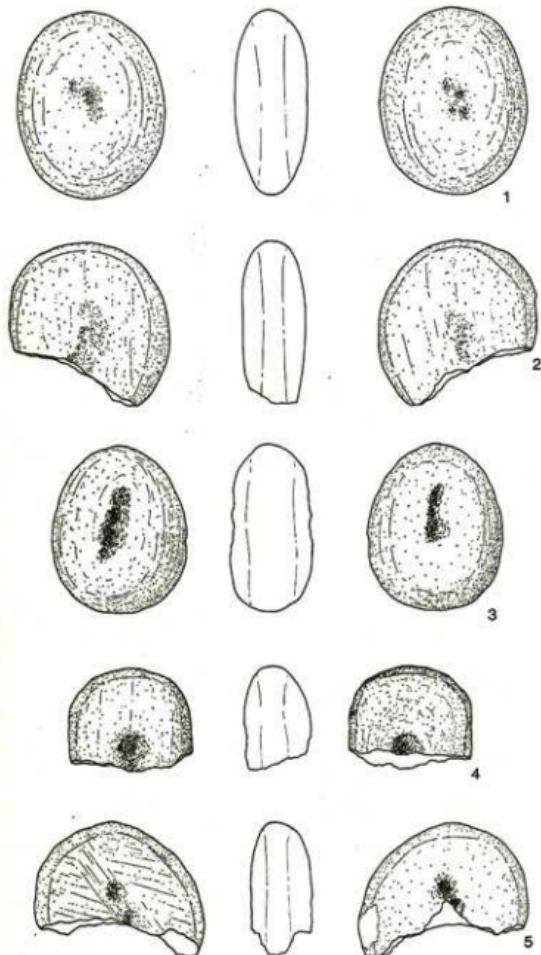


第103圖 石 器 (3)



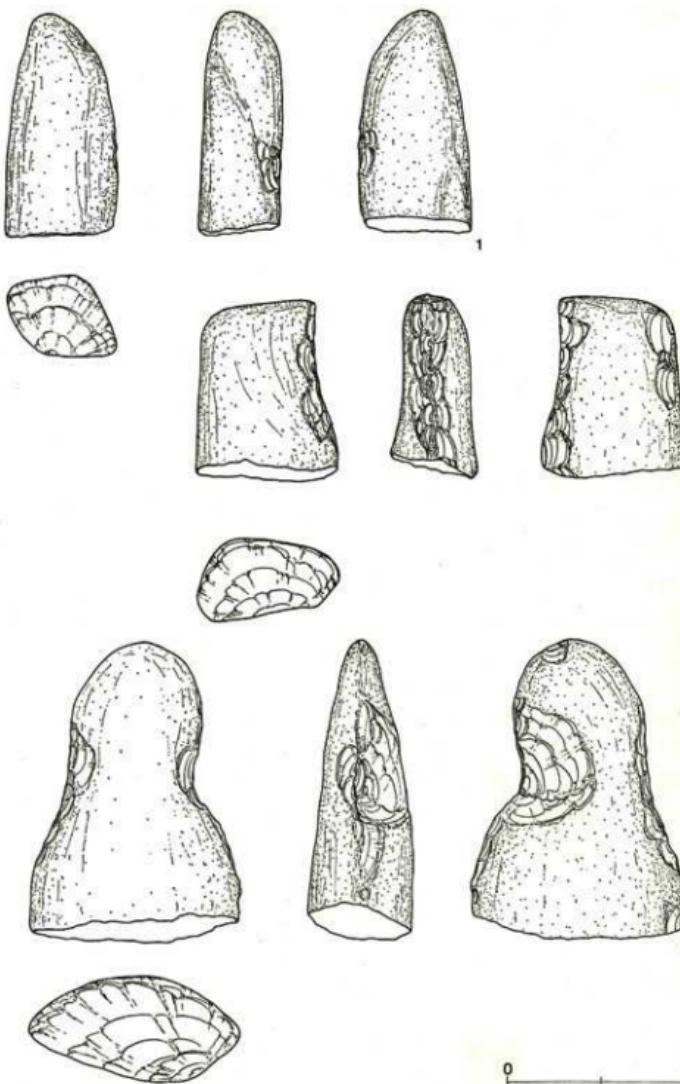
0 10 cm

第104図 石 器 (4)



0 10 cm

第105図 石器 (5)



第106圖 石 器 (6)

明花向B

る。9は縁辺に調整剝離を施しただけの石斧である。5, 10は刃部の厚い石斧で、造りが粗い。第103図1, 2は縁表を残さず剥ぎ取る石斧で、2は分銅形石斧である。両者とも欠損品である。

E類…礫器（第103図3）

3は手中に納まる位の扁平な梢円形を呈する礫が使用されている。刃部と側辺に片側から大形の剝離が行なわれ、チョッパー状を呈する。片刃の礫斧である。

F類…搔器（第103図3～5）

3はサイドスクレイバー状を呈する。裏面は主要剝離面がそのまま残されており、周縁部に細かな調整剝離が施される。刃線はやや彎曲する。

4はラウンドスクレイバー状を呈するもので、風化が激しく、剝離度は不明瞭である。

5は楔状を呈する側片が使用され、縁表が帯状に残るものである。刃部は片側からだけの調整剝離によって造り出され、2箇所がノッチ状に彎曲する。

G類…磨製錐状石器（第101図11）

形容の仕難い形状を呈するが、側辺は敲打により成形される。刃部は四角錐状になり、四面とも磨製によって造り出される。突き錐の様に使用されたものと思われる。

H類…石皿（第103図7～9）

7は窪みの浅い石皿であり、一部が現存する。8は表裏面が皿状に窪むものであり、9は窪み面が段状に造り出されるもので、新しい感じを受ける石皿である。

I類…磨石（第103図6, 10, 11）

敲打痕がみられないもので、梢円形を呈し、四面が磨られているものを磨石として一括した。いずれも握れる大きさであり、10, 11は欠損品である。断面形態は隅丸長方形を呈する。6は扁平な礫の片面が磨られており、頭部に敲打痕がみられる。この類に含まれない可能性がある。

J類…敲石・窪石（第104図1～5、第105図1, 2）

梢円形でやや扁平な礫が使用され、表裏面に敲打痕、または窪穴が存在するものである。1, 2は僅かな敲打痕が認められ、器形は面取り等施されていない。4及び第105図2は面取りが施され、磨石と同様な形状を呈す。3～5、第105図1, 2は比較的深い窪みが認められる。

K類…スタンプ形石器（第105図3～6、第106図1～3）

スタンプ形石器といつても様々な形状を呈するものであり、ここでは底面と思われる部分が、折れではなく、平坦に形成されるものをスタンプ形石器として一括した。

3, 4は小形であり、底面が何度かの加撃により平坦に造り出されているものである。3は握りの部分に調整剝離が施され、4は縁表のままである。5, 6は一度の加撃で底面が形成されたものであり、片側の側辺が彎曲する。握りの部分に調整剝離が施される。

第106図1は四角柱状の細長い礫が折断された形を呈するもので、周縁部の調整剝離は殆ど行なわれない。2は一度の加撃で底面が折断されるものであり、片側の側辺が若干彎曲し、調整剝離が施される。3は大形のスタンプ形石器であり、一度の加撃で底面が折断されている。両側辺が彎曲し、彎曲部を中心にして調整剝離が行なわれている。

（金子 直行）

3. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第2号住居跡（S I-2）（第107~110図）

I-13-3グリッドを中心に位置する。西壁を後世の搅乱層によって失うが、全体はきれいな小判形（四辺の強く張る隅丸長方形）を呈している。長軸6.5m、短軸4.7mを測り、面積は約27m²となる。主軸方向はおよそN-37°-Wを指す。

覆土は37層に分かれるが、このうち第17層は貼床、第18~25層は主柱穴、第26~30層は貯蔵穴、第31~37層はP_s・P_e各々の覆土である。

第1層 黒褐色土 しまりは良いがきめやや粗くボソつく。焼土粒を含む他炭化物粒を若干含む。

第2層 明黒褐色土 第1層に酷似するがしまり良く硬い。焼土粒は減る。

第3層 明黒褐色土 しまりは良いがきめやや粗くボソつく。ローム粒・焼土・炭化物粒含有。

第4層 暗茶褐色土 きめやや粗くしまりも弱い。若干のローム粒・焼土粒を含む。

第5層 暗黄茶褐色土 きめ粗くしまりも弱い。ロームをよく溶混しバサつく。

第6層 暗茶褐色土 きめ細かいがしまり弱くバサつく。若干のローム粒を含む。

第7層 黄色土 ほとんどローム。

第8層 暗黄色土 ロームの影響が強い。褐色土ブロックをよく含み、汚れた斑文となる。

第9層 茶褐色土 ローム粒を全体的に含み、若干の焼土粒を含むが、概ね単一的である。

第10層 暗茶褐色土 ややきめ粗くボソつく。焼土粒・ローム粒をよく含む。

第11層 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含む。黄色味が強く床面の溶軟化層か。

第12層 黒褐色土 焼土粒は少なく、ロームを薄く全体に溶混する。

第13層 黒褐色土 焼土粒を多量に含む他、加熱されたロームブロックを多含。炭化物粒を含む。

第14層 暗黄褐色土 しまりやや悪く、ロームを全体的に溶混する。

第15層 暗黒褐色土 しまりは良いがきめ粗い。焼土粒・ローム粒を多含し、他層との境界は明瞭

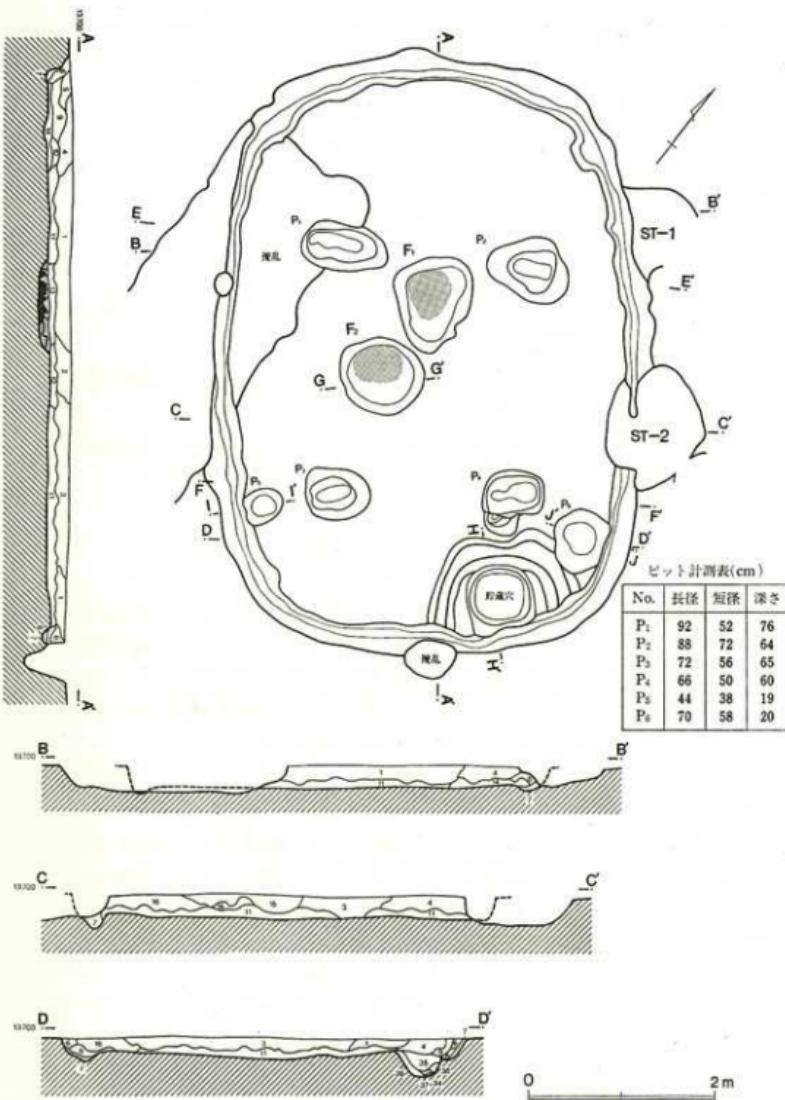
第16層 暗褐色土 しまりは良いがきめ粗い。ロームは少ない。褐色土ブロックを含み斑文となる。

壁は西側ではぼ失われているものの、最も高い南壁で約28cm、平均では約25cmが認められる。立ち上がりはいずれも傾斜を有しており、北壁は特に緩やかなものとなっている。

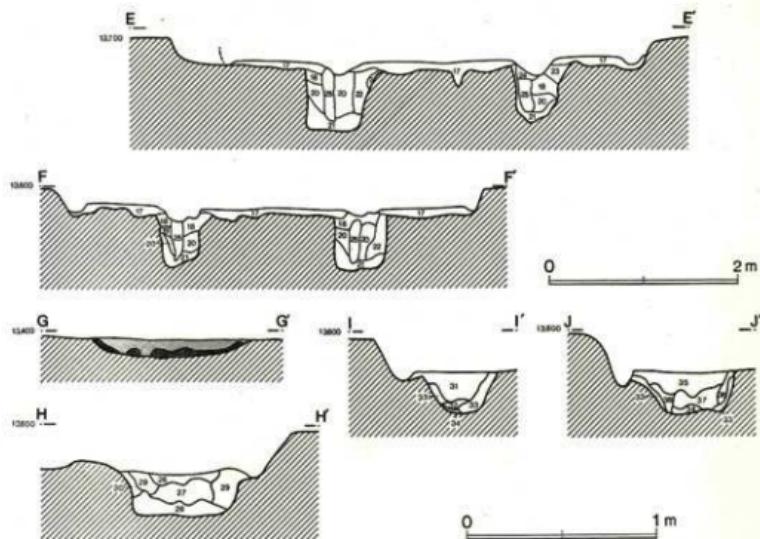
床は貼床式であり、ロームと黒色土の混合したものを約10cmの厚さに貼付している。床面はやや軟質であるが良く踏み固められており、なかでも炉跡（F1）の周囲はかなり硬くしまった状態となっている。床面はまた概ね平坦であるが、主軸へ向って東西両側からわずかに傾斜している。

第17層 黄黒褐色土 貼床。床面部に比べ黒色土が多くしまりは弱い。荒掘り面との境界は不明瞭。

壁溝は全周しており、北側で浅く（約5cm）南側へ次第に深く（約25cm）なる。幅は12~20cmとほぼ一定しているが、北東コーナ付近で箱形に約10cm広がる部分が見られる。尚、溝底に貼床が施



第107図 第2号住居跡 (S I - 2) (i)



第108図 第2号住居跡(2)

された形跡は認められず、壁溝は床の貼付と同時に形成されたものと考えられる。

検出されたピットのうちP₁～P₄は主柱穴であり、ともに主軸に対して直交する梢円形を呈している。その掘り込みはほぼ垂直となり、底面もP₁とP₄は平坦となっている。覆土は以下の8層に分かれるが、柱底と思しき第25層以外はすべてロームを主体とした充填土である。全体はかなり強く固められており、その上面を貼床が覆っている。（第108図）

第18層 黄茶褐色土 しまりは大変良いがきめ粗い。ローム粒を多く含む。

第19層 暗黄茶褐色土 全体的にローム質で粒性強い。

第20層 暗黄茶褐色土 きめやや粗いがしまり粒性とも強い。ローム粒を少量含むが单一的となる。

第21層 褐色土 色調暗く、一見後堆積様だが充填土である。壁部に若干ロームブロックを含む。

第22層 黄褐色土 非常に硬くしまり、ロームブロックを良く含む。

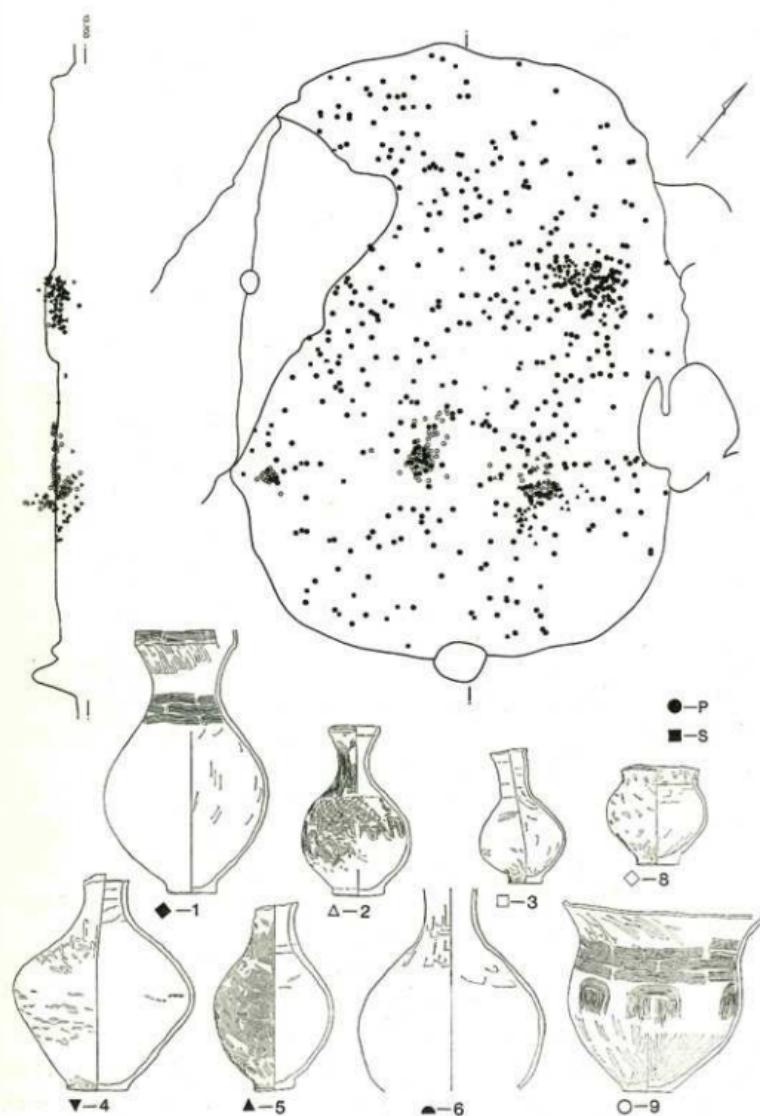
第23層 暗褐色土 きめ粗いが極めてしまり良い。ほとんどローム質化している。

第24層 暗黄褐色土 きめ粗くローム粒を多く含有する。充填土としては軟らかい。

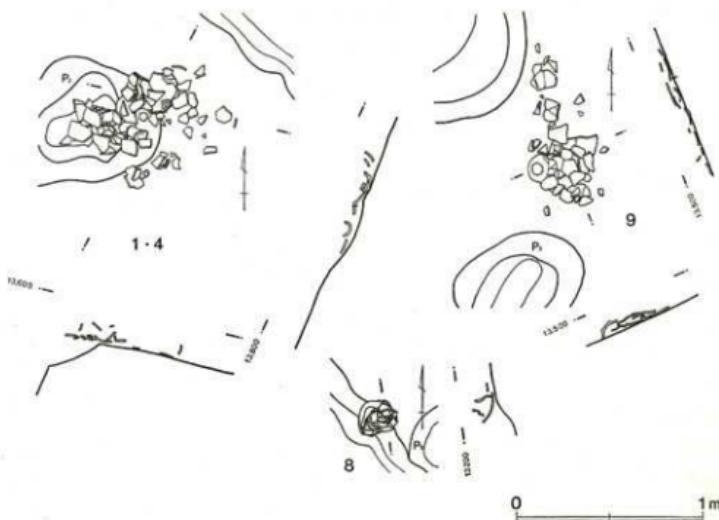
第25層 暗黄褐色土 しまり弱くバサつく。柱痕と思われるが木質部は存在しない。

P₅・P₆は主柱穴に比して規模が小さく、平面もほぼ円形となる。覆土は自然堆積と思われる黒色土を主体としており、固めたり上に床を貼ったりした様子は見られない。このことから住居使用時には両者が「空間」を有し、柱穴以外の施設（あるいは貯蔵穴）として營まれたことが窺える。

第31層 明黒褐色土 きめやや粗いがしまりは良い。ややザラつく。



第109図 第2号住居跡遺物分布状態



第110図 第2号住居跡遺物出土状態

- 第32層 黄黒褐色土 きめ細かいがしまり悪くバサつく。ロームブロックを多量に含む。
- 第33層 暗黒褐色土 第31層に似るがローム粒少なくしまり良い。
- 第34層 黄色土 ほとんどローム。硬くしまり、当層上面で実際の床か。
- 第35層 暗黄褐色土 きめやや粗いがしまり大変良い。ローム粒を全体に含む。
- 第36層 暗茶褐色土 きめ細かくしまり、粘性良い。若干のローム粒を含むが概ね単一的となる。
- 第37層 暗褐色土 きめやや粗いがしまり良い。ローム粒を多く含む他、若干の焼土粒が見られる。
- 炉跡は2基検出されたが、位置関係から見て主軸上のF₁が古く、中央部やや西寄りのF₂は新しいものと思われる。2基はともに橢円形の地炉床で、F₁は106×80×12cm、F₂は92×84×10cmを測る。炉床は良く赤焼しており、F₁がより顕著でバリバリとなっている。尚、炉床に貼床は見られない。

貯蔵穴は突堤を備えており、南壁の東寄りに設けられる。突堤はロームを荒掘り面に貼り付けたもので、幅約38cm、高さ約5cmを有している。これが貯蔵穴の周囲を台形状に巡り、両端は壁溝を取り付いている。貯蔵穴は東西76cm、南北72cmの方形状を呈し、床面からの深さは24cm程度である。底面はほぼ平坦で硬くしまり、壁の立ち上がりは急である。覆土は以下の5層に分かれる。

- 第26層 暗褐色土 きめ細かいがややしまり弱い。多量のローム粒を含む。
- 第27層 黄茶褐色土 ローム粒を多量に含み、焼土粒が多く見られる。

- 第28層 暗黄茶褐色土 ローム粒はあまり目立たず炭化物をよく含む。焼土粒も若干見られる。
- 第29層 茶褐色土 きめ細かくしまり大変良い。ロームは部分的にブロックが見られる。
- 第30層 黄色土 ほとんどローム。壁の溶軟化層。

以上の各施設観察より見て、本跡の構築過程はおよそ次の手順によるものと考えられる。

- ① 住居全体の荒掘り
- ② 柱穴・貯蔵穴等の掘り込み。
- ③ 主柱の埋設・貯蔵穴突堤の貼付。
- ④ 床の貼付と整溝の形成

※ 但し炉跡については不明。

遺物は復元可能な個体が多く、その大半は個体単位で床面に密着していた。まず、P₂に落ち込むように壺形土器が2個体、P₄脇には同じく3個体、またP₅脇に広口の壺形土器、P₃と炉跡間に壺形土器がそれぞれ出土している(第109・110図)。これらの土器は住居使用時の状態をほぼ保っているものと思われ、主柱やピットの脇に検出されたことは興味深い。

出土遺物(第111~113図)

1は頭部以上を1/3程欠くがほぼ完形である。器高39.8cm、口径15.7cm、頭最小径10.4cm、胴最大径は中位にあり25.6cm、底径7.7cmをそれぞれ測る。胴部はほぼ球形を呈し、肩部から頭部へ緩やかに外反する。口縁部は直立てて受口状となり、繩文LRが施される口唇部は平坦となっている。胎土中には砂粒を含み、にぶい橙色を基調として焼成も良好である。器表面はきれいに撫で(ヘラ状工具)られており、頭部上半は細かく磨き上げられている。裏面は横方向にヘラ撫でされ、平滑となっている。文様帶は口縁部と肩部にあり、ともに擬流水文である。施文は櫛齒状工具(5本歯)で断続する併行沈線を引き、その両端部を棒状工具で括っている。これが口縁部では6単位1段、肩部は4単位3段で器体を巡っている。

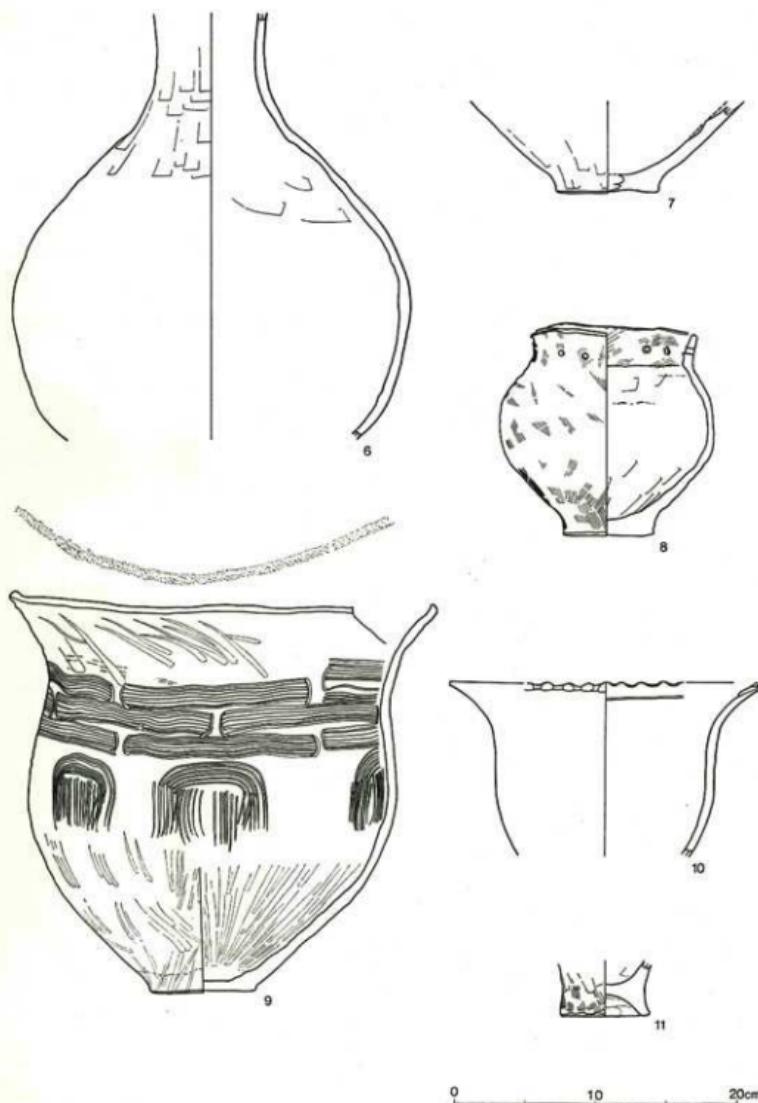
2は胴部下半1/4程を欠損する。器高25.8cm、口径8.0cm、頭最小径4.7cm、胴最大径16.8cm、底径8.0cmを測る。胴部はきれいな球形であり、安定感の高い器体となっている。輪積み成形による頭部から口縁部は緩やかに外反しており、口縁部の裏面には幅約1.5cmの粘土紐を接合している。器表面には櫛齒状工具によると思われる条線が残るが、胴下半は粗く横方向に磨かれている。文様帶は胴部にある。その施文順位はまず上半部に棒状工具による格子文を描き、その右端より波状の沈線文(3本歯)3条が累線状に器体を巡る。格子文の対位置はその後擦り消され、再度格子文が施される。胎土中には粗い砂粒を多く含み、焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。尚、底部には木葉痕が見られる。

3は胴部約1/3程を欠損する下ぶくれの小形壺形土器である。器高20.4cm、口径5.7cm、頭径4.5cm、胴部最大径は下位にあり13.4cm、底径5.2cmを測る。全体はややゆがんでいるが、フラスコ状の器体で底部には木葉痕がよく残る。頭部は輪積みで筒状に成形され、ほぼ直立している。口唇部はわずかに外反しており、尖銳な感じとなっている。

4はほぼ完形で、1とともに検出されている。本来の口縁部は失なわれるが、現在部を二次口縁としたものと思われる。器高32.8cm、現口径6.9cm、頭最小径6.6cm、胴最大径は上位にあり28.0cm



第111図 第2号住居跡出土遺物(1)



第112圖 第2号住居跡出土遺物(2)

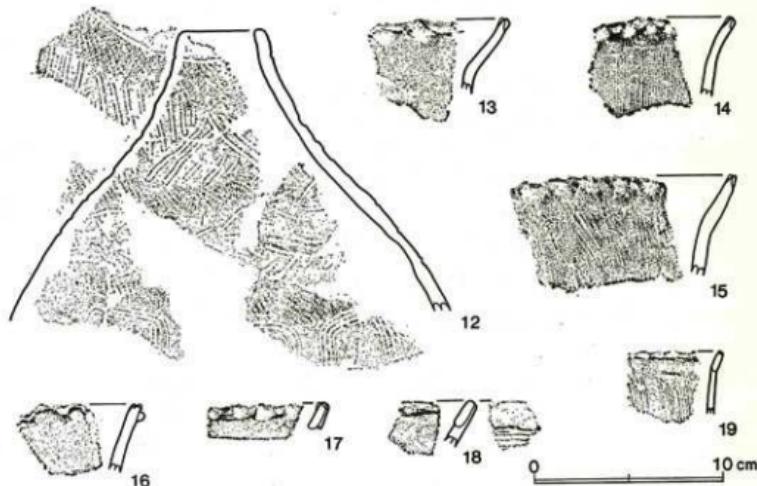
底径 9.3cm を各々測る。胴部はやや算盤玉状となるが、底部が広いため安定感の強いものとなっている。頭部は下半が巻き上げ、上半が輪積み成形となっている。器表面には刷毛目が残り、この上より粗い磨きが施される。胎土中にはやや粗い砂粒を多く含み、焼成は良く灰黄色を呈する。

5 はほぼ完形で胴下半の一部を欠損するに止どまっている。4と同様に二次口縁をなしており、器高27.8cm、現口径6.6cm、頭最小径6.3cm、胴最大径18.3cm、底径 6.3cm を測る。底部はやや丸味を帯びており、このためかなり安定が悪くなっている。器壁のカーブは緩やかであり、頭部のくびれも弱い。器表面は全体が斜方向の粗い刷毛目で覆われるが、裏面は剥落のため不明瞭である。砂粒はあまり含まれておらず、焼成は普通で明赤褐色を呈する。

6 は胴部 1/3 程の破片を図上復元したものである。現高30.6cm、頭最小径 7.8cm、胴最大径 28.8 cm が測れる。胴部は概ね球形を呈すると思われ、頭部はほぼ直立する。器表面は縱方向にヘラ撫でされ、裏面ではわずかに横方向に施されたことが窺える。胎土中には砂粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色で焼成は普通である。

7 は底部の破片で、現高6.6cm、推定される底径は約7.5cm である。器表面は縱方向にヘラ撫でされ、胎土中には細砂粒を良く含む。焼成は普通で赤褐色を呈する。

8 は広口の壺形土器であり、口縁部には二孔一対の棒状工具刺突による穿孔が見られる。Ps 脇に置かれるように出土しており、ほぼ完形である。器高15.0cm、口径12.1cm、胴最大径15.5cm、底径 6.6cm を各々測る。器表面及び口縁部裏面は刷毛目で覆われ、裏面胴部は丁寧なヘラ撫でが施される。胴部はややつぶれたような球形を呈し、口縁部は「く」字状に外反する。胎土中には細砂粒をよく含み、焼成は良好でにぶい黄橙色を基調としている。



第113図 第2号住居跡出土遺物(3)

9は大口径の変形土器で、口縁部を2/3以上失うが、ほぼ使用時の姿を保つものと思われ、器高27.8cm、口径31.0cm、頸最小径24.8cm、胴最大径26.6cm、底径7.7cmを測る。器壁は緩やかなS字を描き、口唇部は斜めに形成される。ここに縄文RLが施文されるが、撲りが弱く不明瞭である。文様帶は頸部に擬流水文、胴部にコの字文が施される。いずれも同一の櫛齒状工具（6本歯）を用い、擬流水文は5単位3段、コの字文はその中を埋めながら7単位がそれぞれ器体を囲繞している。器種こそちがえ、その文様や器質は1とほぼ同様であり、両者はかなり近密な関係を有するものと考えられる。尚、器表面は煤の付着が顕著である。

10・11はおそらく同一個体で、台付の変形土器と思われる。10は1/4程の程片であるが、復元で口径22.5cmを測る。口縁を二重とし、これに指頭による交互押捺が加えられる。器壁は緩やかな屈曲を描き、器表面はきれいに撫で調整されている。11は現高4.0cm、台底径6.5cmを測り、変部底面までは約2.3cmである。いずれも細砂粒を良く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

12は壺形土器の破片で、文様帶は現口縁（二次）より胴部に見られる。LRの楕文帯3段を施文し、これに平行沈線文、複線鋸歯文、交互横位の羽状文が棒状工具で描かれる。さらに下部にはコの字文が櫛齒状工具で表出されている。胎土中には砂粒を良く含み、焼成は普通で橙色を呈する。

13～19は変形土器の口縁部で、17・18は裏面に粘土帶を貼付している。19はこれが口唇部を形成しており、やや肥厚した感じとなる。また、19は刺突状の刻みとなるが、他は指頭による押捺が加えられる。

第3号住居跡（S I-3）（第114～116・118図）

G-13-23グリッドを中心に位置する。南西に大きくS I-4が重複しているが、全体はやや南側がすぼむ隅丸長方形を呈する。長軸は6.3m、短軸は5.0mで、面積は約31.7m²を測る。主軸方向はほぼN-Sを指す。

覆土はS I-4を含めて層位番号を付してあるが、うち第1～9層がS I-4、第10～13層がS I-3、第14～21層がS I-4主柱穴、第22～27層がS I-3主柱穴、第28～31層がS I-3貯蔵穴、第32～39層がS I-4貯蔵穴、それぞれの覆土である。

第10層 暗茶褐色土 燃土粒及びローム粒を若干含む。きめ粗く粘性劣る。

第11層 暗茶褐色土 第10層よりもロームの含有量が多い。しまり・粘性に優れる。

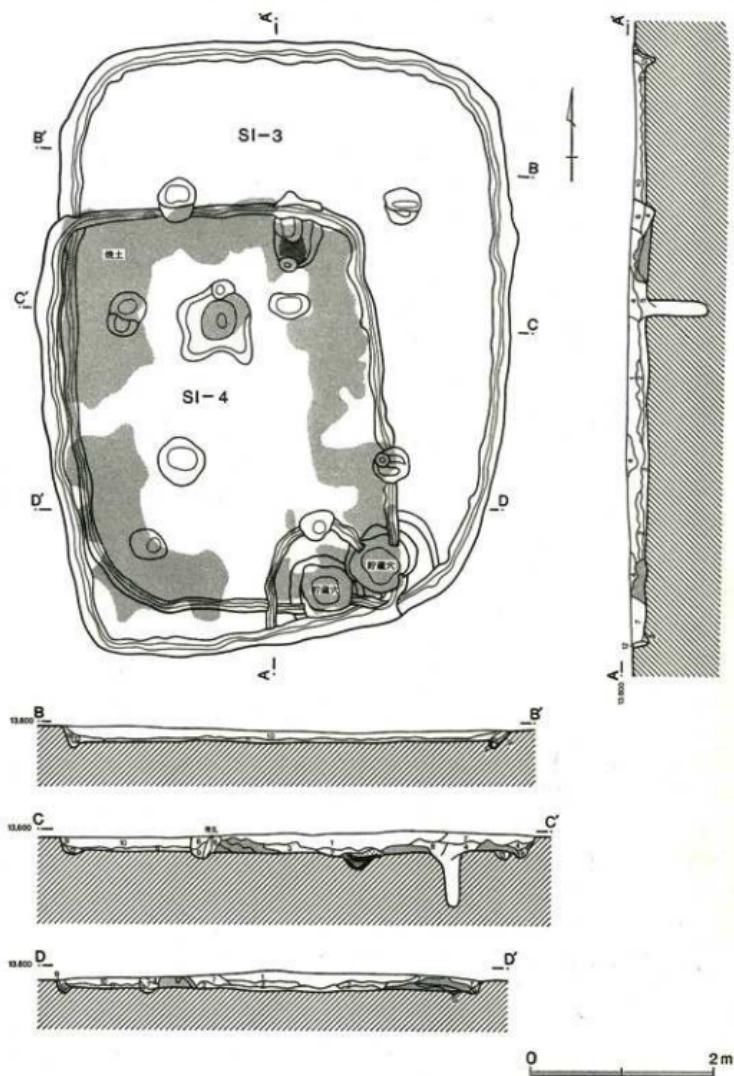
第12層 暗黄褐色土 ローム中に黒色土粒の含有が多く、色もやや暗い。

第13層 暗黄褐色土 第9層に似るが人為的にロームをつめる。

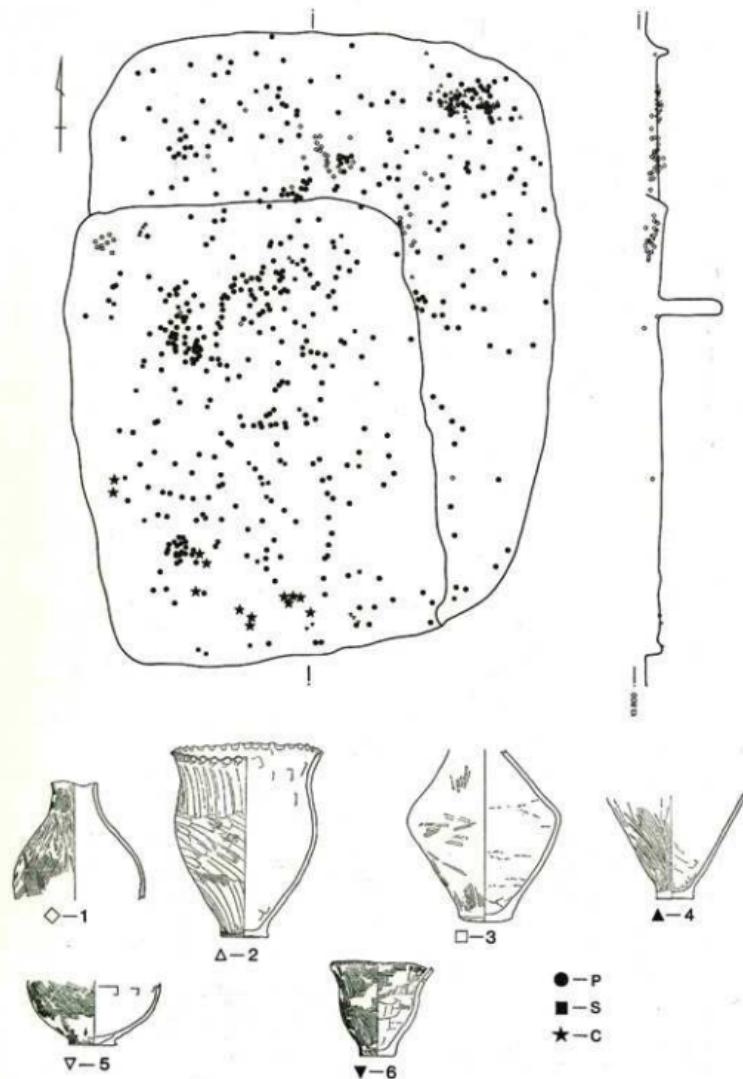
壁はS I-4により南及び西側の大部分を失うが、最も深い東側でも16cm、平均では約14cmと浅いものである。立ち上がりはやや傾斜を有し、北壁ではこれが緩やかとなる。

床は直床式でローム層に掘り込まれており、かなり良く踏み固められている。全体は概ね平坦な面となっているが、わずかに西から東へ傾斜をなしている。

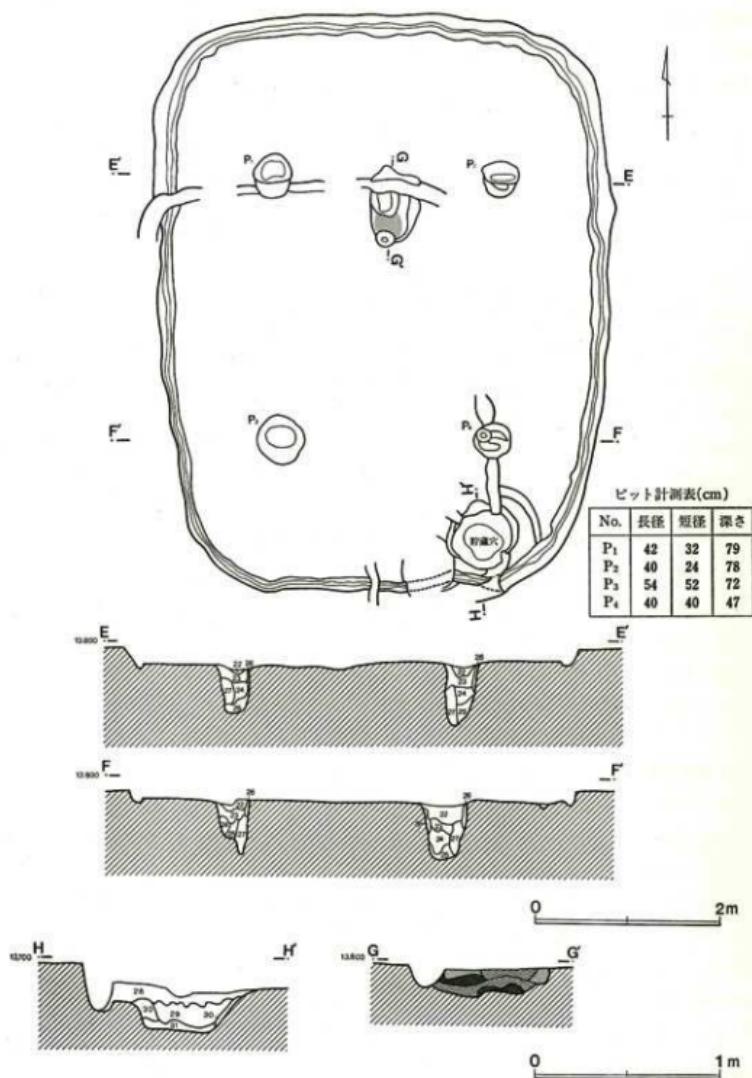
壁溝はほぼ全周しており、このうちS I-4の床面部分では硬くロームが詰められていた。幅9～15cm、深さ6～8cmとほぼ一定している。



第114図 第3・4号住居跡 (SI-3・4)



第115図 第3・4号住跡遺物分布状態



第116図 第3号住居跡 (S I-3)

ピットは4個が検出された。いずれも主柱穴であり、円形乃至梢円形を呈する。ロームを主とする充填土は強く固められており、部分的に柱痕が確認できる。尚、S I - 4の床面にあたるP₁上面は特に強く踏み固められていた。充填土と柱痕は以下の6層に分けられる。

第22層 黒褐色土 しまりは良いがややきめ粗くローム粒を多く含み、焼土粒が若干見られる。

第23層 暗黄褐色土 きめ細かく、ロームを溶混するため、粘性は良い。若干の焼土を含む。

第24層 暗茶褐色土 きめ細かく、しまり・粘性とも強い。単一的でほとんどローム。

第25層 褐色土 きめ細かく、しまり・粘性とも強い。単一的でほとんどローム。

第26層 暗黄色土 ほとんどローム。壁の溶軟化層か。

第27層 茶褐色土 きめ粗く、しまり弱い。柱痕である。

炉跡は主軸上のP₁とP₂の中間に當まれるが、一部をS I - 4の壁溝に切断され、また床面にあたる部分では強く踏み固められている。平面は86×54cmの梢円形を呈し、深さは17cmを測る。炉床は2枚が認められ、それぞれガリガリに赤焼した焼土ブロックで構成される。この2枚の中間には焼土粒を多量に含むザラザラした灰褐色土層（灰層）が見られる。

貯蔵穴は南東コーナー部に設けられ、半円状の突堤を備える。突堤は幅約32cm、高さ約4cmに、ロームを割り出して成形されるが、西側はS I - 4の床面にあたるために削平されている。このうちに径約66cm、深さ約22cmを測る円形の貯蔵穴が穿たれる。覆土は以下の4層であるが第1層はロームで構成されており、S I - 4床面構築に際して貼付したものと考えられる。

第28層 黄褐色土 ロームブロックが非常に硬く詰められている。

第29層 暗黄褐色土 きめ細かく突き固められている。焼土粒を若干含む。

第30層 黄色土 きめ細かく突き固められている。単一的で若干のローム粒を含む。

第31層 暗黄色土 底部の溶軟化層と思われ。良くしまる面を形成している。

遺物は北東コーナー部において、破碎した変形土器1個体が床面密着状態（第118図）で出土している。他はすべて覆土中位からの出土であり、その大半は小破片である。

第4号住居跡（S I - 4）（第114・115・117・118図）

H-13-22グリッドを中心に位置する。S I - 3を切断するが、ほぼ同一方向に重複している。

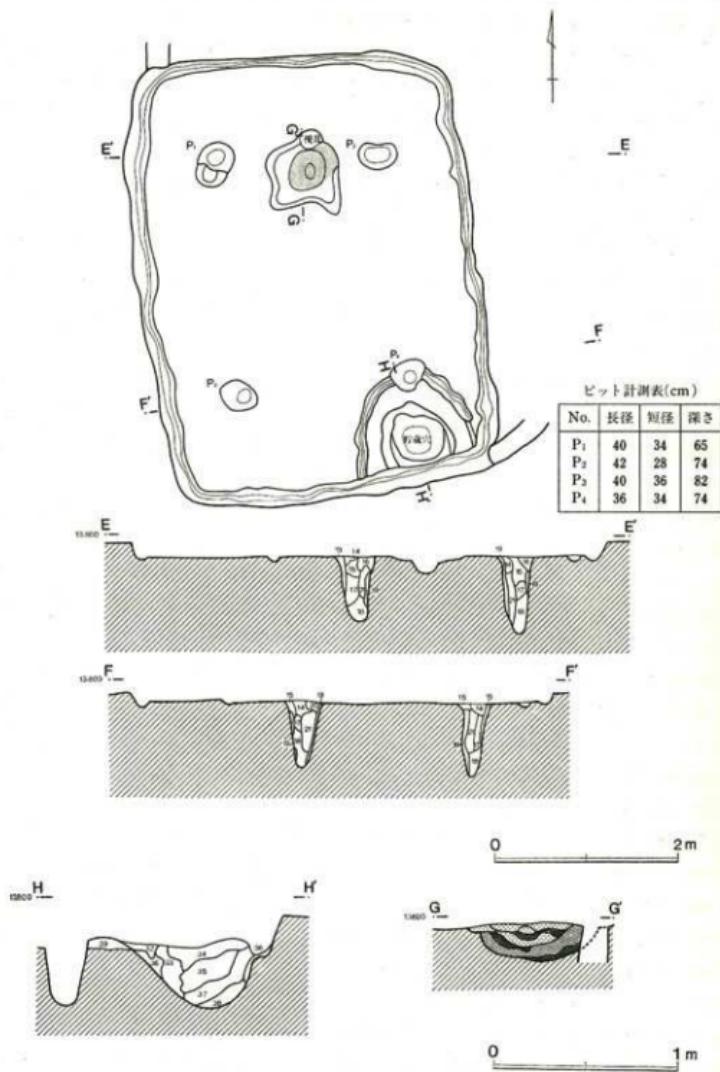
覆土は本跡に比してS I - 3のそれがかなり硬くしまっており、両者の識別は容易である。これはS I - 4の構築に際し、S I - 3を埋めもどしたことによるものと思われる。この他にもS I - 3は貯蔵穴の突堤を削られ、壁溝とともにロームを充填されていること、炉跡及びP₁が強く踏み固められていることなど多くの処置が施されたことが窺える。

平面プランは長方形を呈するが、隅部と四辺はわずかに張っている。また、東辺は西辺に比してやや短く、全体はやや台形様とも見える。長軸49m、短軸3.7mを測り、面積は約16.8m²、主軸方向はN-8°-Wを指す。

覆土は以下の9層である。

第1層 明黒褐色土 ローム粒及び焼土粒を全面に含む。きめが粗くしまりも若干劣る。

第2層 明黒褐色土 焼土粒は大きく、量も増す。炭化物を若干含み、粘性は強い。



第117図 第4号住居跡 (S 1-4)

- 第3層 黒褐色土 第2層とほぼ同質だがロームが多量に含有。焼土粒の径も大きめである。
- 第4層 黒褐色土 焼土粒を多く含むために赤色味を良く帯びる。
- 第5層 暗茶褐色土 焼土粒及び加熱されたローム粒を全面に含有。粘性が強くきめが細かい。
- 第6層 暗茶褐色土 黒色土層の中にロームがしみ状に混入している。焼土粒の含有も多い。
- 第7層 黄黒色土 黒色土層にローム粒を多量に含む。きめは非常に細かい
- 第8層 黑褐色土 少量のローム粒を含有。きめは非常に細かい。
- 第9層 黄褐色土 ほとんどロームで構成されるが若干の黑色土粒を含む。粘性極めて強い。

この覆土とは別に、壁に添って幅40cm～100cm、厚さ約16cmの焼土帯が巡っている。この焼土帯は床に直接に乗るが、床面及び壁面はまったく焼けていない。焼土はきれいな赤色を呈し、わずかに炭化物を含んでいる。概ねサラサラした焼土粒で構成されており、焼土ブロック（塊）としては認められなかった。以上のことから、この焼土帯は火災によるものではなく、あるいは住居廃絶に伴う人為的所産かもしれない。

壁は南及び西が直接ロームを掘り込むのに対し、北と東の壁はS I-3を埋めもどした後に構築されている。先述のように、埋めもどした黒色土は強く踏み固められているが、壁の補強という意味での処置は何ら施されていない。しかし、土層断面における壁は垂直であり、かなりの強度を有したことが窺える。尚、四壁の高さは平均で約18cmを測る。

壁溝は幅約17cmで全周しており、深さも約6cmで一定している。

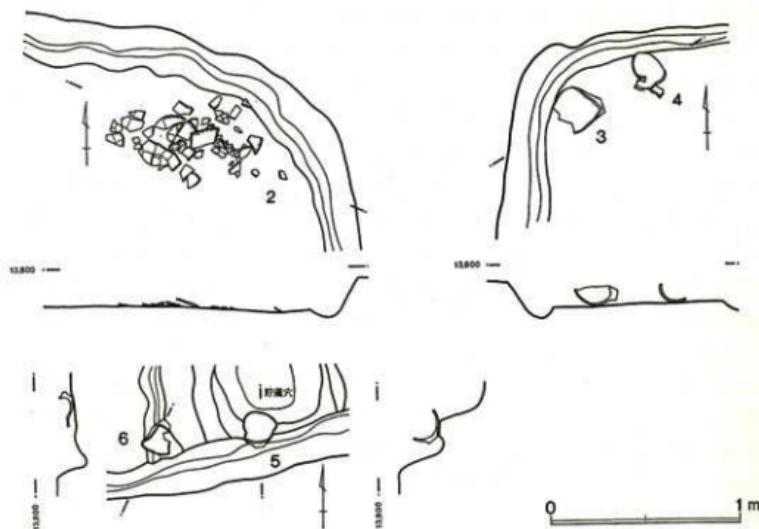
床は直床式であり、非常に硬く踏み固められている。覆土及び焼土帯は剥がすように除去でき、移植ごてを当てるときめきが剥がれ落ちる。S I-3の床面とほぼ同一レベルにあり、当面をそのまま使用したものと考えられる。これは本跡床面にかかるS I-3の壁溝が完全に埋められており、その検出が困難であったことからも窺えよう。

検出された4本の主柱穴のうちP₁のみは重複しているが、柱痕はその北側のものに認められた。また、P₃は貯蔵穴の突堤周溝中央に設けられている。いずれも稍円形で、充填土は硬く踏みしめられている。

覆土はロームを中心とした以下の8層であるが、このうち第21層は柱痕と認められる。

- 第14層 黒褐色土 きめやや粗く、パサつく、若干の焼土を含む。
- 第15層 黑褐色土 全体的にローム質化しており、微量の焼土を含む。
- 第16層 黄茶褐色土 上部では特に硬いロームブロックとなる。若干の焼土粒を含む。
- 第17層 暗黄褐色土 きめ細かく、しまりも良い。ローム自体の溶軟化的で単一である。
- 第18層 暗褐色土 きめ細かく、しまり・粘性とも優れる。ほとんどローム質。
- 第19層 暗黄色土 ほとんどローム。壁の溶軟化層。
- 第20層 暗黄色土 ロームブロックで構成され、硬くしまる。床面。
- 第21層 茶褐色土 きめ細かくしまりなくボロボロ。柱痕と思われる。

炉跡は主軸上のP₁・P₂間に営まれ、80×76cmを測る。基本的には円形であるが、上部は浅く拡張され不整形となっている。深さは21cm程度で3枚の炉床が重っている。3枚ともガリガリの焼土ブロック層となり、中間には灰層あるいは焼土粒を多量に含む土層が堆積している。



第118図 第3・4号住居跡遺物出土状態

貯蔵穴は南東コーナー部から西側へ設けられ、 $56 \times 50\text{cm}$ の方形状を呈している。深さは約32cmを測り、底面は強く丸味を帯びている。これを幅約28cm、高さ約7cmの突堤が、さらにその外側を幅約12cm深さ約3cmの周溝が半楕円形に巡っている。突堤はS I-3の床面にロームを貼ったもので、両端部は壁溝に取り付いている。

- 覆土は以下の8層であり、第39層としたものは突堤を構築する貼付ロームである。
- 第32層 黄黒褐色土 焼土粒及びローム粒を若干含有。細かく粘性強い。
 - 第33層 茶褐色土 焼土粒及びローム粒を多く含有する。炭化物を若干含有。
 - 第34層 赤黒褐色土 大部分が焼土により構成される。きめは粗く、しまり・粘性とも乏しい。
 - 第35層 明黒褐色土 黒色土の中に焼土を多量に含む。きめ細かく、しまりも強い。
 - 第36層 暗黄褐色土 ほとんどロームで構成されている。粘性強い。
 - 第37層 茶褐色土 黒色土粒の含有が多く、焼土粒の量も多い。
 - 第38層 暗茶褐色土 焼土を良く含み粘性に優れる。
 - 第39層 黄褐色土 硬くしまったロームブロックで構成される貯蔵穴の突堤。

遺物は少量であるが、北西コーナー部の焼土帶中より火熱を受けた壺形土器が2個体、貯蔵穴に接して壺と小形の壺形土器が各1個体出土している(第118図)。この他に覆土中位から、信州系と思われる壺形土器を検出している。

出土遺物（第119～121図）

1・2・8～10はS I-3、他はS I-4出土の土器である。

1は頭部から胸部にかけての1/3程が接合した。図上復元で現高17.9cm、口径（二次口縁）6.8cm、胴最大径20.0cmを測る。器表面は粗い刷毛目が残るが、肩部では撫で状になっている。胎土中には細砂粒を含み、焼成は普通で黒褐色を呈する。

2は住居跡北東部の床面より検出された壺形土器である。かなり細かく破碎していたが、ほぼ完形に復元された。器高29.5cm、口径23.5cm、頭最小径20.2cm、胴最大径22.0cm、底径7.3cmを各々測る。器壁は緩やかなS字状を呈し、口唇部は斜めとなる。ここに指頭による交互押捺が加えられ、波状を描いている。底部はやや上げ底となり、外端は強く張り出したような感じである。器表面は刷毛目をわずかに残すが、全体は概ねヘラ撫で状となる。また、胸部中位は煤の付着が顕著である。砂粒はあまり含まれず、多孔質な印象を受ける。色調は暗褐色で、焼成は普通である。

3は焼土中より検出されたが、火熱を強く受けている。口縁部及び胸部を約1/2程欠き、現高26.1cm、胴最大頭は上位にあり23.6cm、底径8.3cmを測る。底部は丸味を帯びており、非常に安定の悪い器体となっている。器壁の立ち上がりは直線的で、胴最大頭部を頂点に「く」字状に強く屈曲する。器表面はわずかに磨き痕が認められ、裏面では巻き上げ及び輪積みを併用したことが良く窺える。胎土中にはかなり細かい砂粒を含み、火熱のためか明赤褐色を呈する。器体は焼きなまされた状態となり、軟質で脆弱となっている。

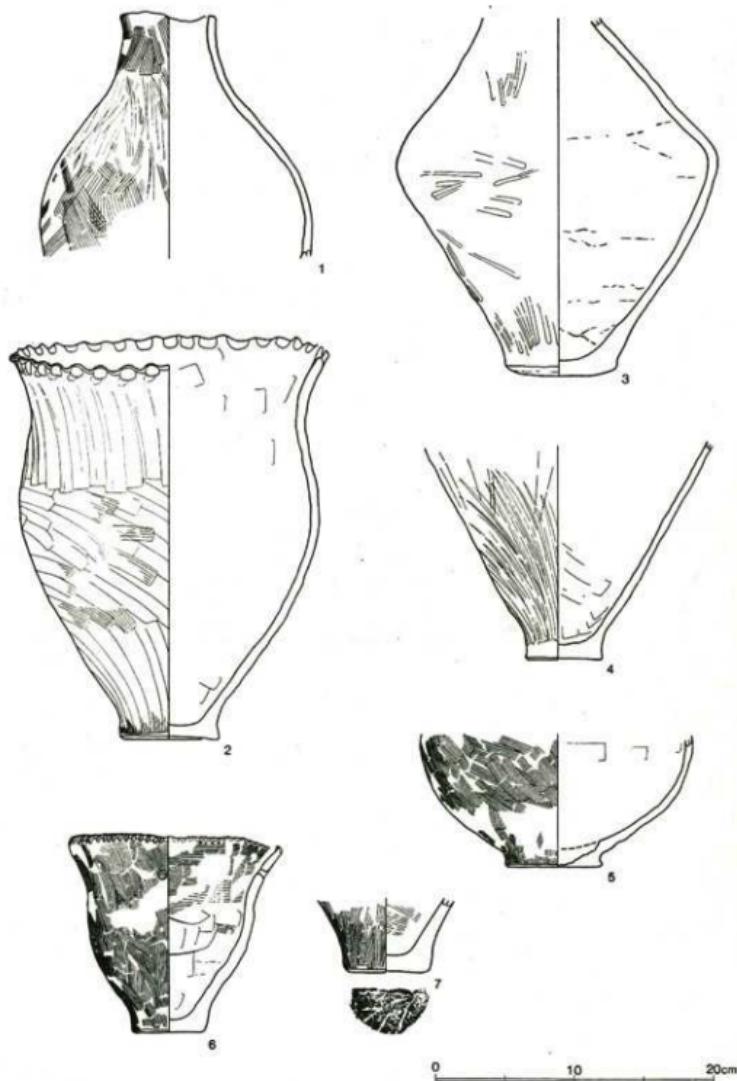
4も3とともに検出された壺形土器で、上半を大きく失う。現高15.6cm、底径5.7cmを測り、底部はやや上げ底状となる。器壁はこれより直線的に広がり、胴最大径はかなり上位にあるものと思われる。器表面は細かく磨かれるが、上半ではごく粗いものとなる。裏面はヘラ撫で痕が認められる。砂粒の含有はあまり見られず、全体は暗褐色を呈する。これも火熱を受けたためか、器体は軟弱となっている。

5は貯藏穴と壁溝の境部分より出土し、現高9.7cm、底径7.1cmを測る壺形土器の下半部である。器壁は強く内弯して立ち上がり、胴は球形を呈するものと思われる。器表面は刷毛目で覆われるが、裏面はヘラ撫でとなる。両面ともに剥落が激しく、特に底部はそれが著しい。胎土中には細砂粒を良く含み、色調はにぶい黄橙となる。焼成はあまり良好でなく、やや軟弱となっている。

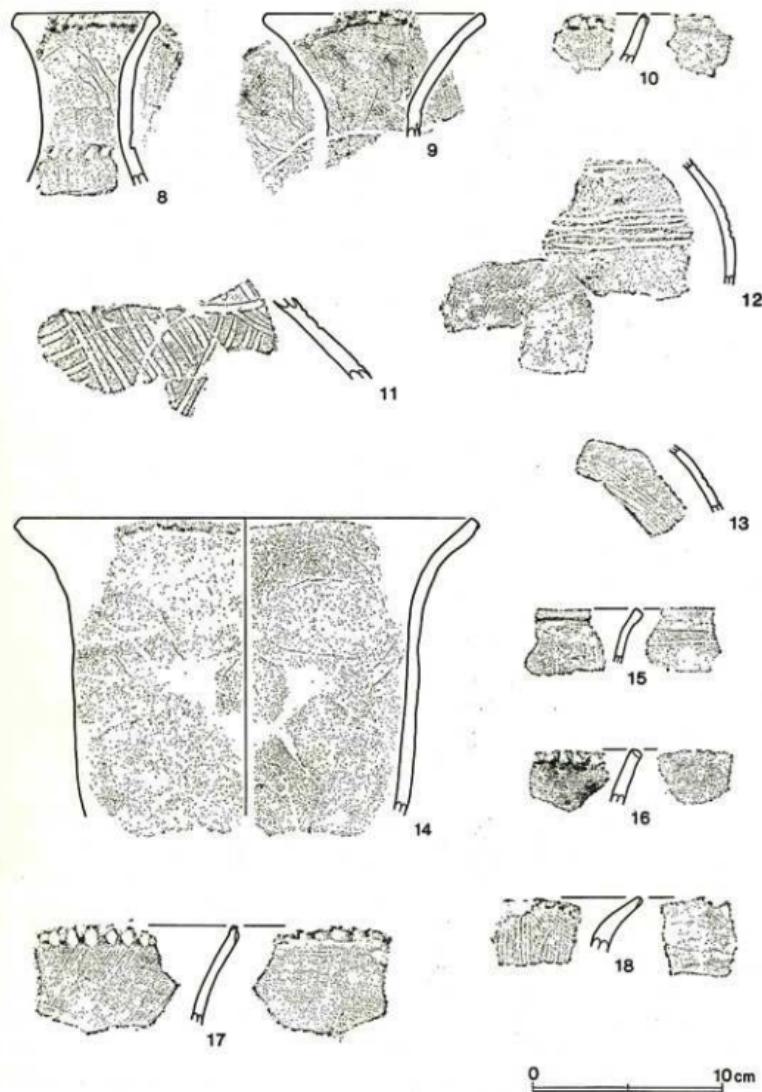
6は貯藏穴実堤上より出土した小形の壺形土器で、1/2程を欠損する。器高14.5cm、推定される口径15.7cm、胴最大径11.7cm、底径5.5cmを測り、器内は厚く0.8cm程となる。器壁はわずかにS字状となるが、その屈曲はあまり強くない。口唇部はやや尖锐的で、器表面は丸味を帯びている。ここに棒状工具による細かい押捺が施され、口縁部には補修孔が穿たれている。器表面は縱方向の刷毛目が良く残るが、裏面の下半ではヘラ撫でとなっている。砂粒はあまり含まれず、焼成は良好で褐色を呈する。尚、胸部は煤の付着が見られる。

7は壺形土器の底部で、現高5.4cm、底径6.2cmを測る。器表面は細かい刷毛目が覆っており、裏面はこれがやや粗くなる。細砂粒を含み、焼成は良好で暗赤褐色を呈する。底部はわずかに上げ底状となり、木葉痕を残している。

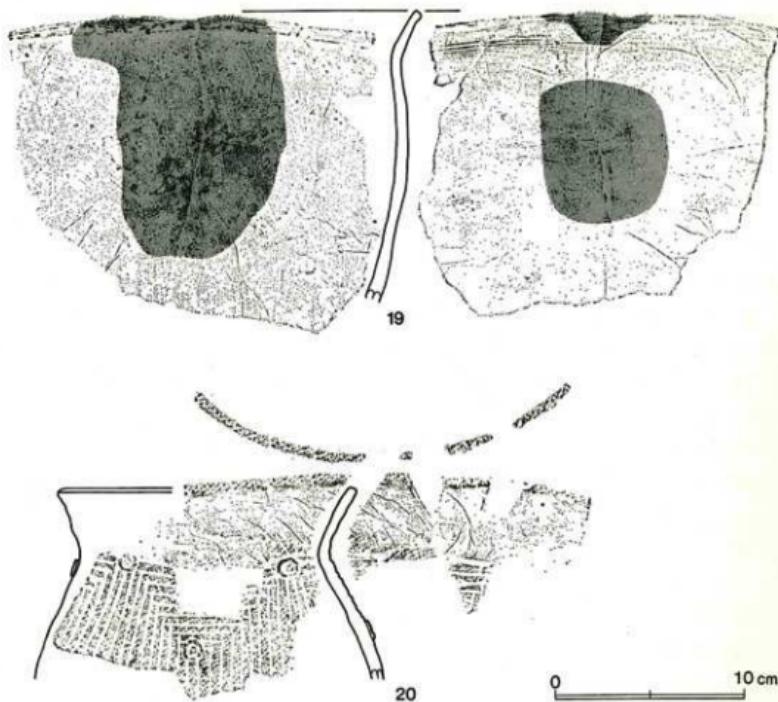
8・9・10は口縁部破片であり、8は直立する頭部と丸棒状の口唇、9はラッパ状の口縁となっ



第119圖 第3·4號住居跡出土遺物(1)



第120圖 3・4號住居跡出土遺物(3)



第121図 第3・4号住居跡出土遺物(3)

ている。頭部には8が角棒状工具による刺突列点文、9は縄文帯（？）を区画する平行沈線文が各々施される。色調は8がぶい橙色、9が黒褐色となる。10は口唇部に指頭押捺が加えられる変形土器の口縁部破片である。

11～13は壺形土器の胸部破片で、11は棒状工具による複線鋸歯文。12・13は縄文LR施工後に併行沈線文が加わる。

14～20は変形土器の口縁部～胸部の破片である。14は推定で口径約33cmを測り、器壁はほぼ直立し口縁部は強く外反する。口唇部は斜めで、ここにごく浅い刻み目が施される。15～19も概ね口唇部は斜めとなり、15・19のみは刷毛目、他は刻み目となっている。19は器面の表裏がよく煤けており、特に表面には炭化物状の付着が著しい。あるいは火皿的に二次使用されたものかもしれない。

20は現高10.3cm、図上復元で口径約16.2cmを測る。頭部は「く」字状に強くくびれており、口縁部は直線的に外反する。口唇部はやや丸みを帯びており、頂部には縄文LRが施される。頭部以下

にもこれが施文され、この上より棒状工具による所謂コの字重ね文が加えられる。これが4単位に器体を区画するものと思われ、各単位及びコの字内側にはボタン状の貼付文が認められる。沈線は頭部より横、その両端より縦の繰り返しが行われ、最後は横線の中央に縦1本で締めくくられる。口縁部表面は繩文を磨り消されており、さらに裏面とともに丁寧にヘラ磨きが施される。胎土中に砂粒を多く含んでおり、色調はぶい褐色を呈する。焼成は良好でかなり硬質となっている。

第5号住居跡（S I-5）（第122～125図）

H-13-10グリッドを中心に位置し、近世溝によって南側の壁及び壁溝の一部を失う。平面は隅丸長方形を呈するが、南辺は他の三辺に比してかなり強く張っている。長軸6.9m、短軸6.2m、面積約38m²を測り、主軸方向はN-23°-Wを指す。

覆土は以下の14層に分けられるが、概ね第1・2・4・5層が基本となっている。

- 第1層 茶褐色土 きめ細かいがしまり・粘性弱い。多量のローム粒及び微量の焼土を含む。
- 第2層 黒褐色土 しまりは大変良いが、きめ粗くボソつく。少量のローム粒・焼土粒を含む。
- 第3層 黑褐色土 第2層に準ずるがしまりは弱くバサつく。ローム粒を多く含む。
- 第4層 暗茶褐色土 ロームブロックを多含し、斑文を呈する。少量の焼土・炭化物を含有。
- 第5層 茶褐色土 きめやや粗く、しまり・粘性とも良い。微量の焼土を含み炭化物を多く含有。
- 第6層 黄茶褐色土 しまり弱くバサつく。ローム粒を含む他、微量の焼土粒・炭化物粒を含む。
- 第7層 黄茶褐色土 しまり弱くローム粒を少量含む。焼土粒・炭化物粒が減る。
- 第8層 褐色土 きめ細かくしまりも良い。ローム粒・焼土粒・炭化物粒を良く含む。
- 第9層 褐色土 きめやや粗いがしまりは良い。ロームを全体に溶混し、黄色味を帯びる。
- 第10層 暗黄色土 ほとんどローム。壁及び底の溶軟化層。
- 第11層 黑褐色土 炉跡上であるため焼土粒が多く、炭化物粒も見られる。
- 第12層 暗茶褐色土 炉跡上であるため焼土粒が多く、炭化物粒も良く見られる。
- 第13層 暗茶褐色土 しまり弱く、ローム粒を多含する。微量の焼土・炭化物粒を含む。
- 第14層 茶褐色土 しまり良くバサつく。ローム粒・炭化物粒を多含し若干の焼土粒もみられる。

壁は高さ20～22cmとほぼ一定しており、いずれも傾斜する立ち上がりとなっている。

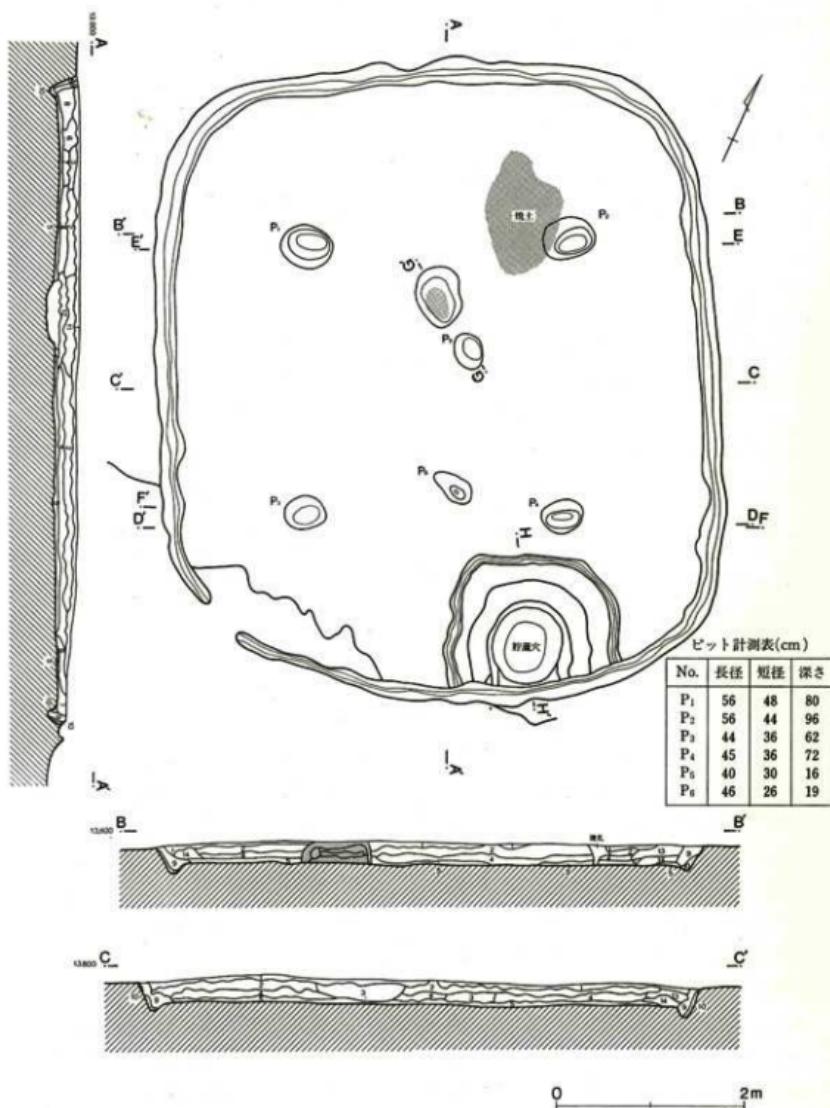
床は直床式でハードローム層に掘り込まれ、硬く踏みしめられてはいるが軟質な印象を受ける。

床面は概ね平坦であるが、北側と東側がわずかに膨らんでいる。また、壁に沿って細かい炭化物が散布している。

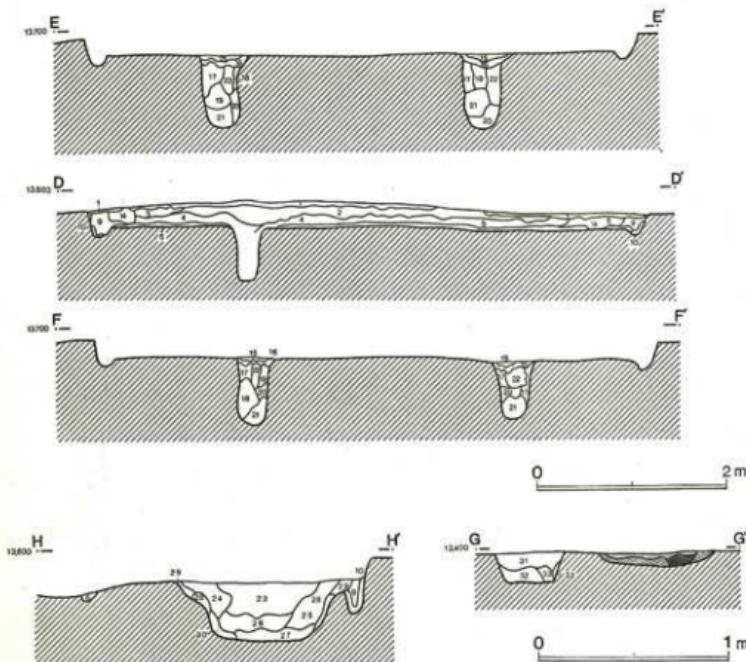
壁溝は南西で一部切断されているが、幅約13cmで全周するものと思われる。深さは6～12cm、平均で10cm程度である。

ピットは6個が検出され、うちP₁～P₄は充填土を主にロームで構成する主柱穴である。全体は強くしまっており、部分的に柱痕が認められる。

- 第15層 黒色土 少量のローム粒及び焼土粒をわずかに含有する。
- 第16層 灰褐色土 黒色土ブロックとロームブロックが混入している。焼土粒が含まれる。
- 第17層 暗黄色土 ロームブロックが溶混した土層。粘性が強く少量の炭化物粒を含有。

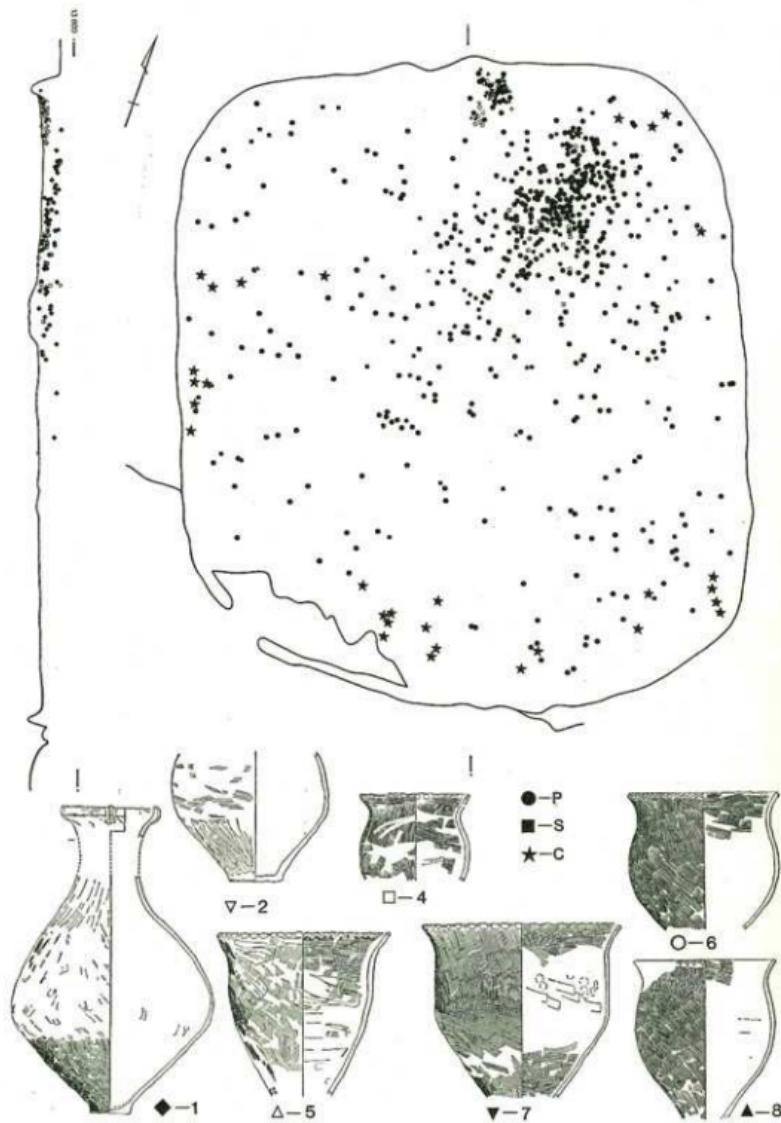


第122図 第5号住居跡 (S I-5) (1)

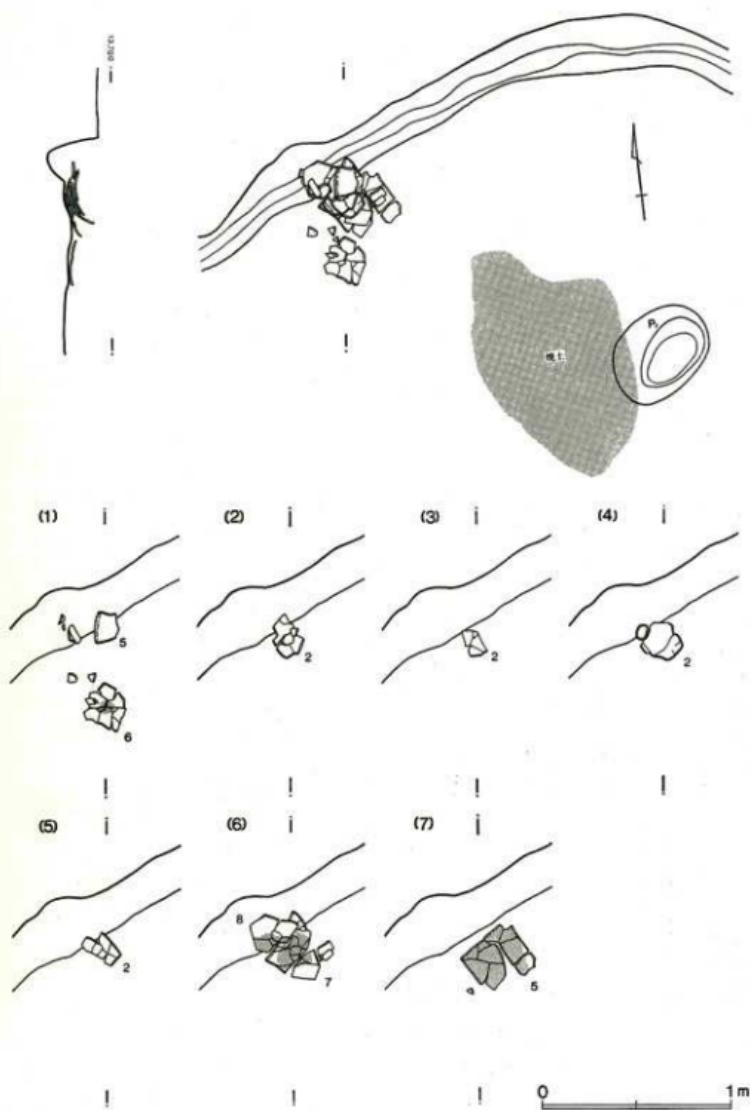


第123図 第5号住居跡(2)

- 第18層 黄褐色土 ローム溶混が強い單一的土層である。しまり・粘性とも強い。
- 第19層 暗黄色土 ロームブロックはほとんど含まず、粘性も弱くきめが粗くなる。
- 第20層 暗黄色土 ロームブロックを多含し、きめ粗くボソボソしている。
- 第21層 暗茶褐色土 きめ粗く粘性も弱い。ボソボソしている。
- 第22層 暗茶褐色土 黒色土ブロックを少量含む。少量の炭化物含有（柱痕）。
- これに対して P_1 と P_2 は規模が小さく、覆土も黒色土でしまりの劣るものとなっている。
- 第31層 暗黄茶褐色土 きめ細かくしまり・粘性良い。ロームブロックを良く含む。
- 第32層 暗黄色土 ほとんどロームで構成され、しまり・粘性強い。
- 第33層 茶黄色土 きめ細かくしまり・粘性に優れる。ロームを多含し、概ね單一的となる。
- 炉跡は主軸上、 P_1 と P_2 の中間やや南寄りに営まれている。68×46cmの楕円形を呈し、深さ約8cmを測る地床炉である。覆土上層は焼土粒と黒色土粒からなるしまりの弱い層で、下層は焼土ブロック及び灰褐色土からなるボロボロの層である。炉床は良く赤焼しているが、その範囲は狭いものとなっている。



第124圖 第5号住居跡遺物分布状態



第 125 図 第 5 号住居跡遺物出土状態

貯蔵穴は主軸線を境として、これより東側の南壁際に設けられている。80×76cmの梢円形で深さは約26cmを測る。底面はほぼ平坦であり、硬くしまっている。幅約58cmの突堤が方形状に囲っており、さらにその外側には幅約10cm、深さ3cmの周溝が巡っている。覆土は以下の8層であるが、全体にしまりが強い。

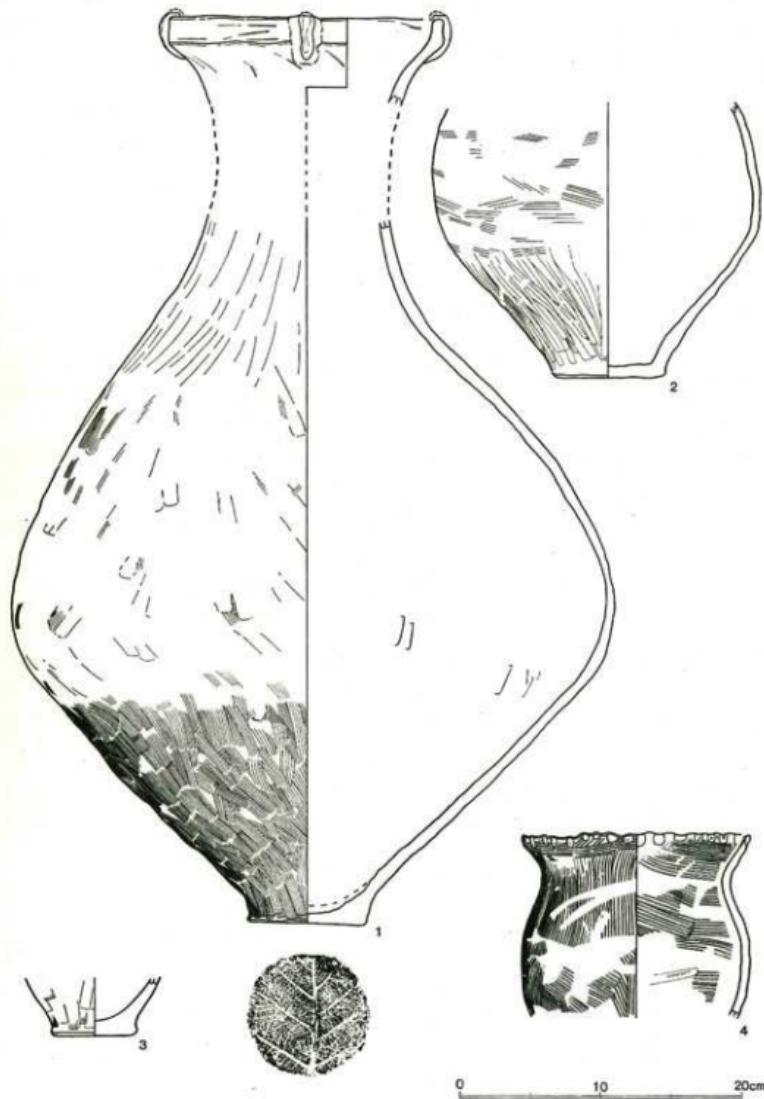
- 第23層 暗褐色土 しまりは良いが、きめやや粗いローム粒・焼土粒炭化物粒を含む。
- 第24層 茶褐色土 しまりは良いがきめ粗い。ローム粒を含む他微量の焼土・炭化物粒を含む。
- 第25層 暗茶褐色土 しまりは弱くきめ粗い。ローム粒を多含し、炭化物がよく認められる。
- 第26層 黒褐色土 しまり良いがきめやや粗い。少量のローム焼・土粒と多量の炭化物を含む。
- 第27層 暗茶褐色土 炭化物少なく、ローム溶混が多くなる。汚れた感じの土層。
- 第28層 暗黄色土 ほとんどローム。壁の溶軟化層と思われる。
- 第28層 黄茶褐色土 しまりなくバサバサ。ローム粒で構成される。
- 第29層 暗褐色土 第28層に準ずるが、しまり強くローム粒は少ない。炭化物を良く含む。

この他上記の各施設とは異なり、P₂の西脇には径134×84cm、厚さ約24cmを測る焼土の集中が存在する（第125図）。限定された範囲内にこんもりと盛られた土饅頭様であり、周囲の黒色土（住居跡覆土）との境界は土質的に明瞭である。全体がしまりに優れており、崩壊した様子も見られない。さらに、床面には直接乗るが、その当該面はまったく焼けていない。以上のようにその形状や硬くしまった状態等から見て、この焼土饅頭は人間の手で形成されたものと判断される。焼土は4層に分化できるが、上層から次第に黒色土の混有が少くなり、最下層ではきれいな完全焼土となっている。4層ともきめ細かくサラサラした焼土粒で構成され、焼土ブロックは認められない。

遺物はこの焼土饅頭中に大形の壺形土器及び壺形土器各1個体が出土しているが、両者はともに火熱を受けており、またその分布もこの中にはば限られている。この焼土饅頭より約1.5cmを隔てた北壁際には、壺形土器1個体と壺形土器4個体が出土している。いずれも半身の状態であり、壺形土器はすべて底部を欠損する。この5個体が床面から皿状に重なって7枚、そのすぐ南側に1枚が、やはり床面に密着して検出された。第125図では上から順次取り外した状態を(i)～(v)に図示したが、特に最下部の2枚は黒く煤の付着が認められ、火皿的な使用がなされたものと思われる。このような出土状態は明らかに土器の二次的使用によるもので、先述の焼土饅頭とは「火」を通じた関連性を持つものではないかと思われる。

出土遺物（第126～128図）

1は焼土中に細かく破碎していたもので、頭部及び胴部の1/2程を欠損する。推定される器高65.5cm、口径20cm、胴最大径45cm、底径8.7cmを測る。器壁は木葉度を有する底部より直線的に広がり、胴部中位で大きく内彎する。頭部はわずかに外反すると思われ、口縁部は直立して受口状となる。口唇部は平坦で、これより耳朶状の突起が貼付される。器表面下位には良く刷毛目を残すが、中位以上はヘラ撫で状となっている。胎土中に砂粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈している。破片は火熱を受けたものが多いが、硬質である。



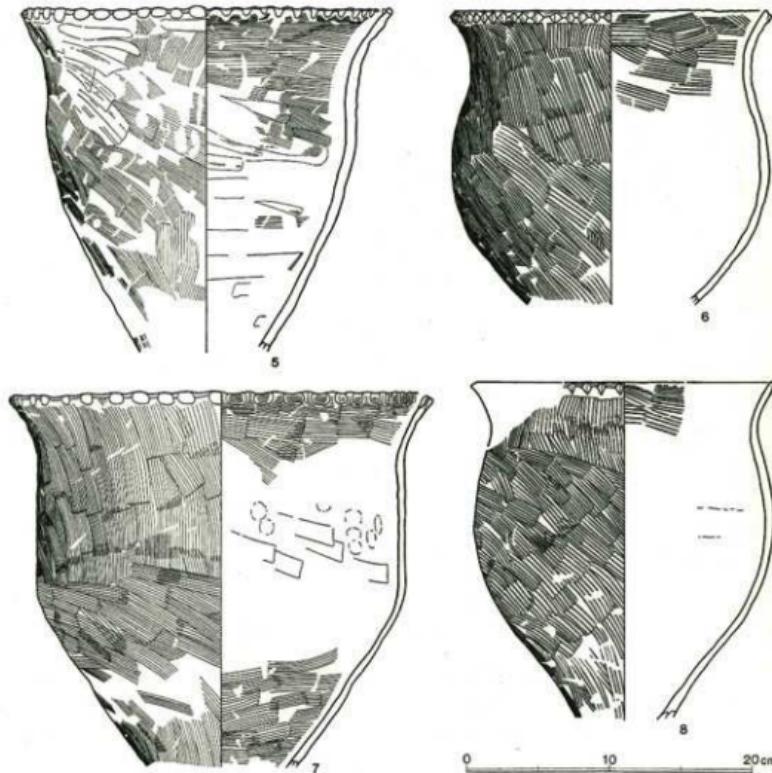
第126図 第5号住居跡出土遺物(1)

2は頸部以上を欠く壺形土器である。北壁際より4枚の火皿として検出されており、現高20cm、胴最大径24.5cm、底径8cmを測る。器表面には粗い刷毛目がわずかに残り、底部から上方へは細かく磨かれている。細砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色となる。

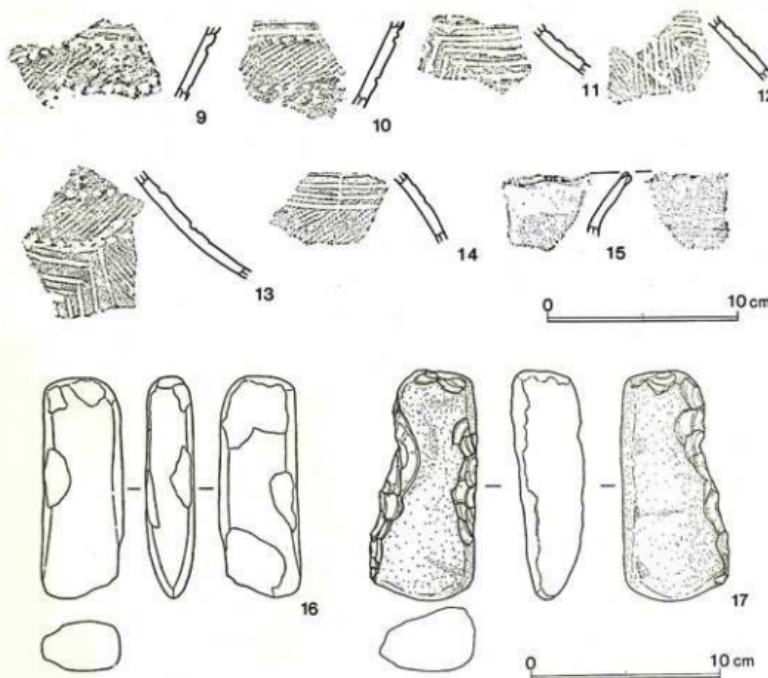
3は底部1/3程の破片である。推定で底径6.2cmを測り、底部には木葉痕が認められる。器表面は概ねヘラ撫で状となり、裏面もきれいに撫でられている。砂粒はあまり含まず、焼成は普通である。

4は1とともに焼土中より検出され、同じく火熱を受けている。現高13.3cm、口径16.7cm、頭最小径13.8cm、胴最大径16.7cmを測る。頸部は強くくびれており、口縁部は緩く内弯する。口唇部はやや尖锐的で、指頭による交互押捺が加えられる。器表面は条痕状の粗い刷毛目で覆われる。砂粒はあまり含まれず、色調は明赤褐色でやや軟質な器体となる。

5～8は2と同じく火皿として使用された変形土器で、いずれも1/2程の破片となり、その中央



第127図 第5号住居跡出土遺物(2)



第128図 第5号住居跡出土遺物(3)

部は黒く焼けている。以下図上復元より、5は現高24.3cm、口径26.7cmを測り、器壁の描く曲線は緩い。口縁部は内彎しており、口唇部には指頭押捺されている。器面は刷毛目が粗く施され、部分的に撫で状となる。細砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。6は現高21cm、口径23.1cm、頭最小径20cm、胴最大径22.8cmを測り、頸部のくびれは強い。器表面には条状の粗い刷毛目が良く残り、口唇部は深くて密な刻み目が入れられる。砂粒を良く含み、にぶい黄橙色を呈する。7は現高26.7cm、口径30cm、胴最大径26.2cmを測る。胴上半部は直立しており、口縁部は緩やかに外反する。口唇部はやや肥厚し、強く指頭押捺が加えられる。器面は粗い刷毛目で覆われるが、裏面中位はヘラ撫でと指頭痕となっている。細砂粒を含み橙色を呈する。8は現高24cm、口径22cmを測り、器壁は緩やかなS字を描く。口縁部は強く外反し、口唇部には刷毛目と同様工具による刻み目が施される。器表面は条状の粗い刷毛目が良く残り、胎土中に砂粒を多く含む。色調は明褐色を呈する。

9～14は同一個体と思われ、口縁部及び肩部の文様帶破片である。棒状工具による併行沈線文、刺突列点文、コの字重ね文が施され、これがLR・RLの範文帯を区画している。

16は磨製の始刃石斧で、長さ11.9cm、幅4.2cm、厚さ2.6cm、重さ250gを測る。17は両端に敲打

痕を有する刃器状の石器である。長さ12.4cm、幅5.6cm、厚さ3.7cm、重さ345gを測る。

第6号住居跡（S I-6）（第129・130図）

H-14-8グリッドを中心に位置する。北側をゴミ穴、両側を近世土壤によって切断される。推定では四辺の張る隅丸長方形を呈すると思われる。長軸5.7m、短軸4.4mを測り、面積は21.5m²程度（推定）になる。主軸方向はN-38°-Wを指し、やや西への偏角が大きい。本跡では壁溝の他に主柱穴をつなぐようにしてもう一条の周溝が巡っており、これを境として中央の床面は一段低くなっている。尚、貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は以下の12層である。しかし本跡周辺で削平面の降下が急激となるため、東側はその大半が失われている。

第1層 暗茶褐色土 しまりは良いが、きめや粗くパサつく。ローム粒を多含し黄色味を帯びる。

第2層 黒褐色土 ロームの影響が少なく、若干の炭化物を含む。

第3層 暗褐色土 しまり・粘性とも優れ、炭化物粒はあまり見られない。

第4層 黑褐色土 しまり・粘性に優れ、炭化物粒はあまり見られない。

第5層 暗褐色土 きめ細かくしまり弱い。ローム粒を多含しパサつく。

第6層 暗茶褐色土 しまり強く粘性に優れるが、ややブロック状となる。底の溶軟化層。

第7層 茶褐色土 少量のローム粒を含み、下部では黄色味が強い。微量の焼土、炭化物を含む。

第8層 茶褐色土 ローム粒少なく、微量の焼土を含む。

第9層 茶褐色土 しまり・粘性とも優れる。全体にロームを溶混し、微量のスコリア粒を含む。

第10層 暗黄褐色 ほとんどローム。壁及び底の溶軟化層。

第11層 黑褐色土 きめや粗いがしまり・粘性優れる。概ね單一的であるが焼土粒を良く含む。

第12層 暗茶褐色土 第11層に似るが、ローム粒が多く焼土粒は少ない。

壁は削平及び攪乱により多くを失い、西側の最も残存する部分で約12cmとなっている。

床は直床式であり、ハードローム層に掘り込まれている。主柱穴を結ぶ周溝を境として内側は一段（約3cm）低くなっている。その外側が良く踏み固められているのに対して、内側はかなり軟質である。

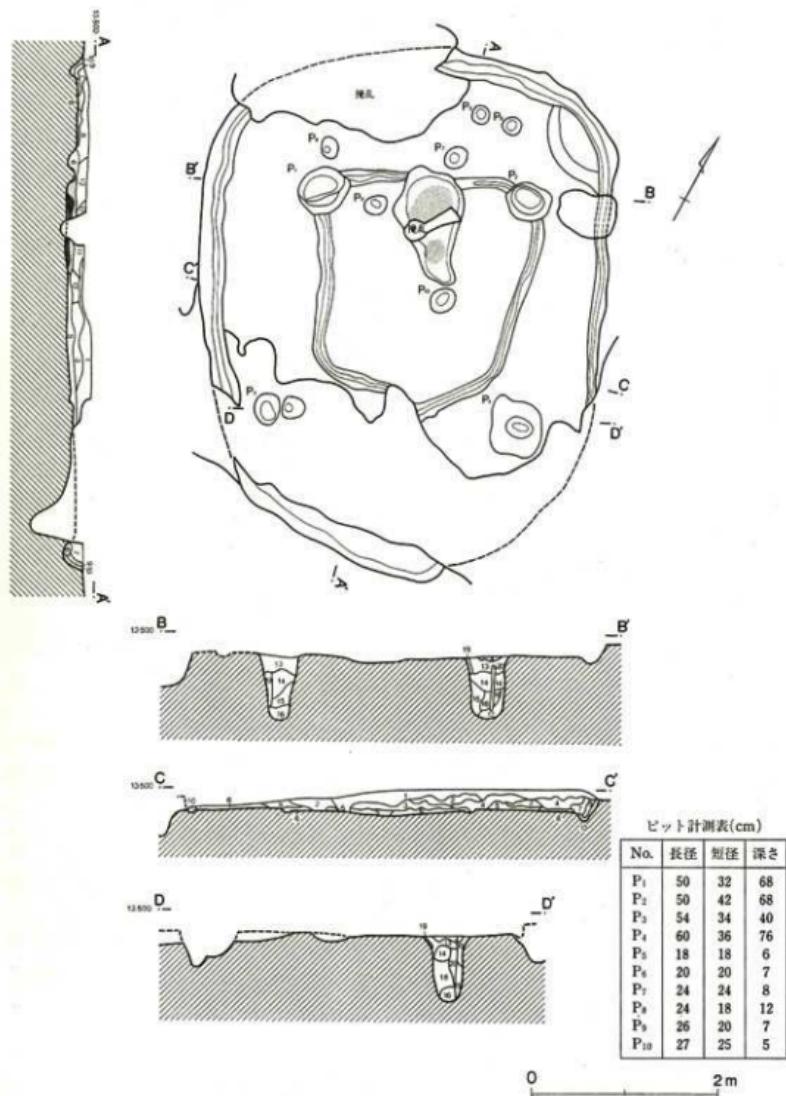
壁溝は寸断されているので明確ではないが、恐らくは全周するものと思われる。幅約21cm、深さは平均で12cm程度である。また、床面を分ける周溝はP₁とP₂を結ぶ線を底辺とする将棋の駒状を呈し、幅約14cm、深さ約4cmとほぼ一定している。このうち北辺は炉跡に取り付いている。

主柱穴はP₁～P₄であるが、P₃は他に比してその形状と規模が異っている。P₁のみは重複しているが、柱痕は北側のものに認められた。P₅～P₁₀は小規模でいずれも浅く、住居跡の北側部分に集中している。P₁～P₄の充填土は以下の8層に分かれ。第20層（柱痕）以外は主にロームで構成されており、非常に強くしまっている。

第13層 暗黄茶褐色土 きめ細かいが、ややパサつく。ローム粒を多含し若干の炭化物粒を含む。

第14層 褐色土 きめや粗いがしまり良い。概ね單一的である。

第15層 茶褐色土 第14層に準ずるが、ローム粒・ブロックを含みボロボロする。



第129図 第6号住居跡(S I - 6)

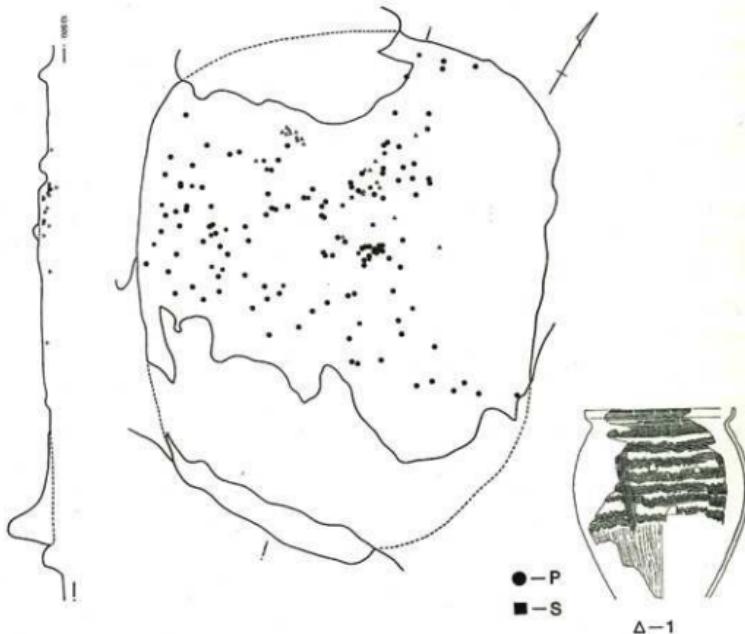
- 第16層 暗褐色土 きめやや粗く、しまりは良い。概ね单一的であるが若干のローム粒を含む。
- 第17層 暗褐色土 第16層に準ずるがしまり・粘性ともに優れ、良く固まっている。
- 第18層 暗褐色土 きめやや粗いが、しまり・粘性ともに優れる。少量のローム粒を含む。
- 第19層 暗黄色土 ほとんどローム。壁の溶軟化層。
- 第20層 暗黄茶褐色土 しまり悪くボソボソ。ローム粒を良く含む。（柱痕）

炉跡は P_1 ・ P_2 間の主軸線上に設営されている。132×74cm の瓜形を呈しており、深さ約 5cm を測る。上層は焼土粒を多量に含む他若干の炭化物が見られ、しまり弱くややバサつく。下層は焼土ブロックからなり、ボロボロとなっている。炉床も赤焼が著しく、硬くガリガリである。

遺物は少量で図示できるものはわずか一点にすぎない。櫛描文を有する受口状の妻形土器であり、炉跡焼土中及び P_1 脇の床面直上から出土している。

出土遺物（第131図）

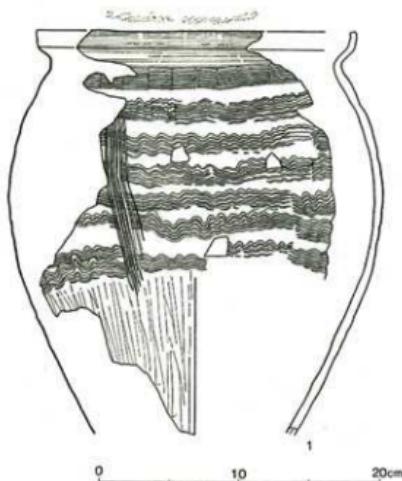
1 は胸部 $\frac{1}{4}$ 程の破片にすぎないが、皿状となったものを床面及び炉跡上にふせた状態で検出された。図上復元より、現高 29.2cm、口径 23.3cm、頭 21.1cm、胴最大径 27.1cm を各々測れる。輪積み成形で、器壁は 0.6cm と薄いものである。その器壁は緩やかに内凹しており、頭部で「く」字状に強



第130図 第6号住居跡遺物分布状態

明花向B

くくびれる。外反した口縁部はさらに内屈し、直立して受口状となっている。口唇部は平坦に成形され、ここに無節LRの綱文が施される。器面は刷毛調整の後、文様帶を除いて丁寧に研磨されている。施文は櫛齒状工具（7本歯）により、頸部に簾状文、以下6～7段の波状文を描く。さらに波状文を切断するように縱方向の併行沈線が引かれ、文様帶を区画しているようである。簾状文はかなり整然としているのに対し、波状文はやや雑然としており、同一部分で施文中継が行われている。胎土中に砂粒はあまり目立たず、焼成は良好で堅緻な印象を受ける。器表面はにほい黄褐色を呈するが、胴下半は煤の付着で黒変し、裏面は褐色となっている。



第131図 第6号住居跡出土遺物

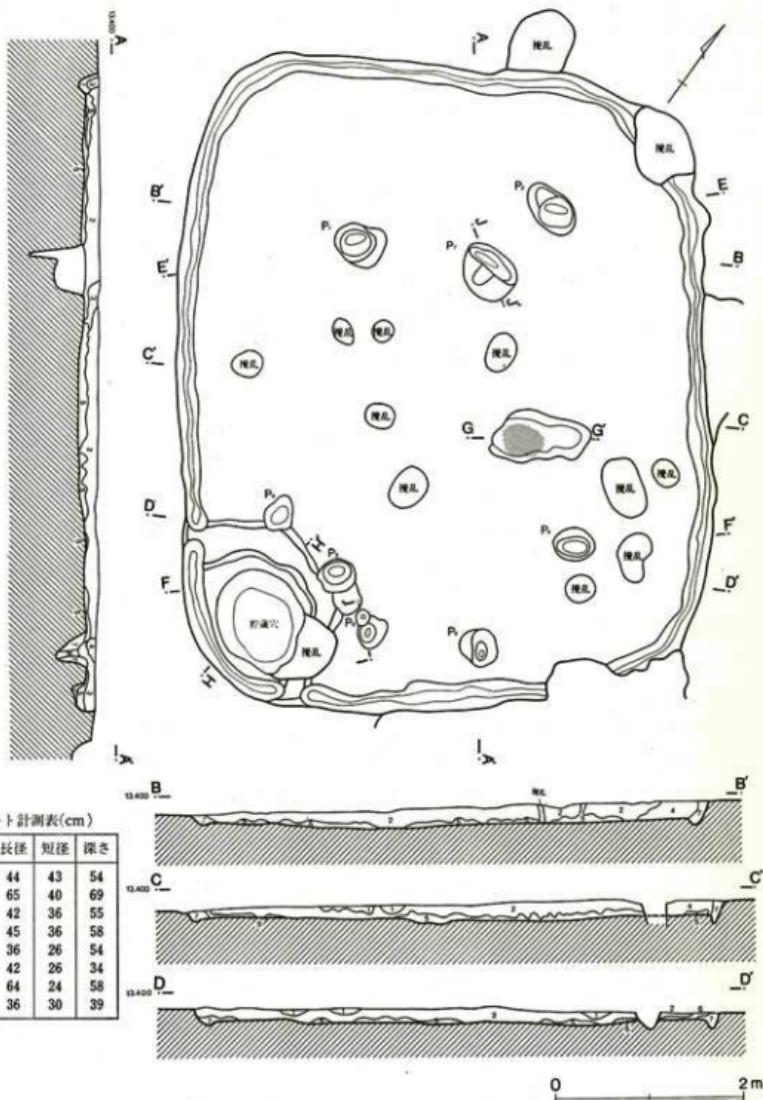
第7号住居跡（S I-7）（第132～134図）

G-14-24グリッドを中心位置し、一部を近世土壤に切断されている。平面プランはほぼ隅丸長方形を呈しているが、東辺が短かくやや合形状となっている。四本の主柱穴に炉跡、及び貯蔵穴を備える点では他の住居跡と同様であるが、その配置は異質で不整然な感じである。このため調査時には住居の拡張、あるいは2軒の重複などが考えられたが、精査の結果、その痕跡はまったく認められなかった。6.9×5.7m、面積約36.6m²を測り、主軸方向はN-37°-Wを指す。

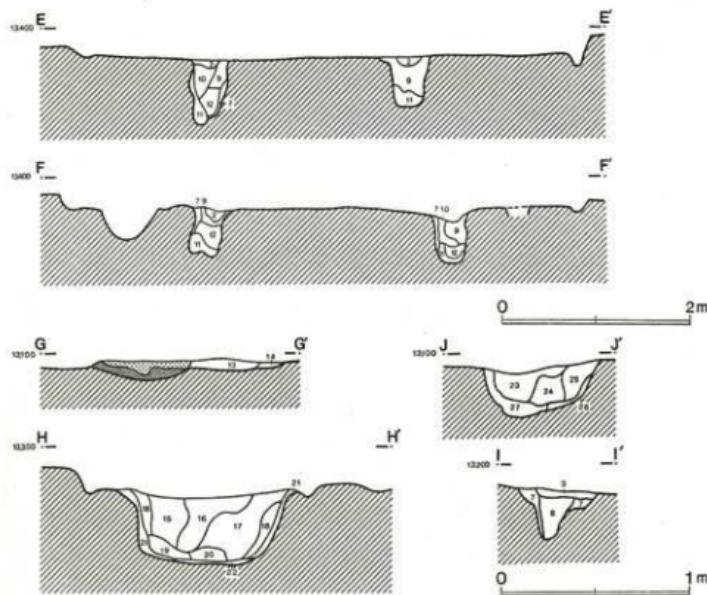
- 覆土は以下の7層である。全体は木根が多く入り込むためにしまりの弱いものとなっている。
- 第1層 表土 黒褐色土にローム粒を多量に含む。しまり・粘性は弱い。
 - 第2層 黒褐色土 ローム粒をよく含有する。しまりは強いが、バサバサする。
 - 第3層 黒褐色土 ローム粒を全体的に含むため色調は明るく、しまりは若干強い。
 - 第4層 茶褐色土 ローム粒を多く含むため、色調は黄色味が強い。
 - 第5層 茶褐色土 ローム粒と黒褐色土粒がまだらにまじる土層。粘性・しまりは良い。
 - 第6層 茶褐色土 第5層よりもローム粒の含有が少なく色調は暗味を帯びる。しまりは強い。
 - 第7層 暗黄色土 ほとんどローム。壁・底の溶軟化層。

壁は削平のため高さ10～16cmを測るにすぎない。南壁はほぼ垂直に近いが、他の立ち上がりはいずれも傾斜している。

床は直床式でローム層に掘り込まれており、強く踏み固められている。床面は内側へ向けてやや



第132図 第7号住居跡 (S I-7) (1)



第133図 第7号住居跡(S 1-7)(2)

傾斜し、中央部がわずかに窪んだ状態となる。

壁溝は幅14~34cm、深さ6~16cmで四周を巡り、貯蔵穴の突堤部でわずかに途切れる。

主穴は $P_1 \sim P_4$ であるが、覆土には主としてロームが充填されており、硬くしまっている。

第9層 暗黄褐色土 きめやや粗いがしまりは良い。ほとんどロームで黄色味が強い。

第10層 暗褐色土 ローム粒を良く含む他、ブロック溶混して汚れた感じとなる。

第11層 褐色土 きめ細かく、しまり・粘性優れる。単一的でローム質。

第12層 暗茶褐色土 きめ細かく、しまり・粘性も強い。

この他に $P_5 \sim P_8$ が見られ、うち P_5 と P_6 は南壁に添って並び規模及び覆土が良く似ている。あるいは入口に關係するものであろうか。

第8圖 茶褐色土 黒色土とロームが同様に溶潤し、粘性・しまりとも良い。

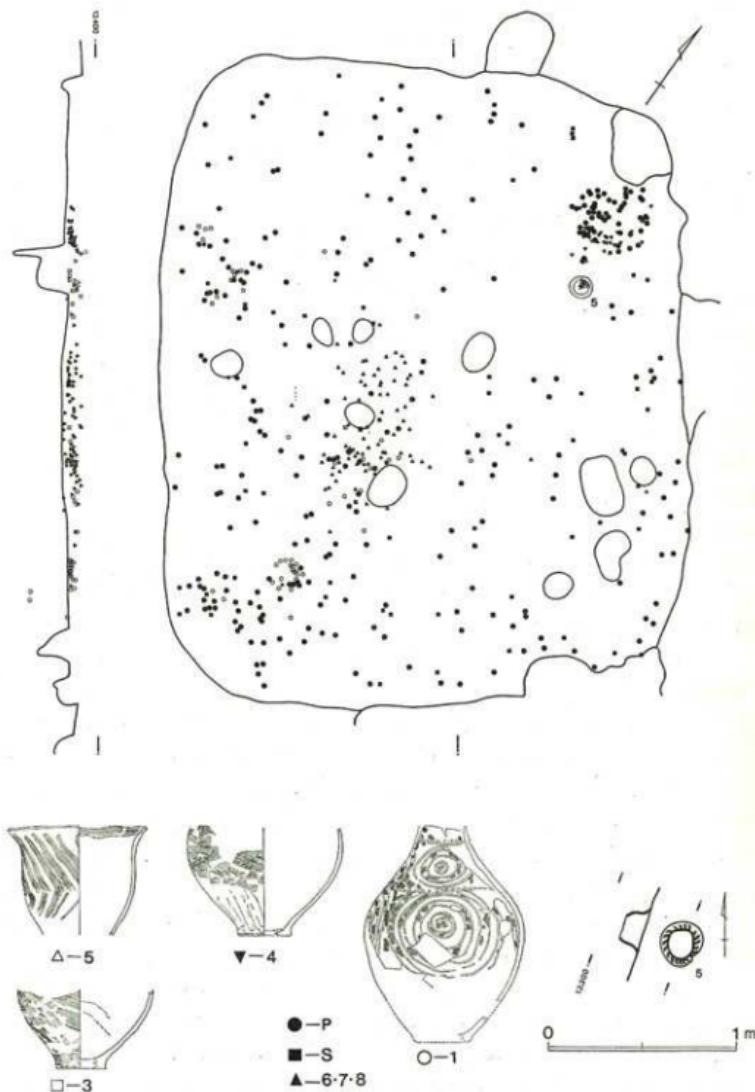
第23圖 明茶褐色土 ローム粒を多量に含む。きめはやや粗くしまりも弱い。

第24題 暗黃褐色土 ロームが多量に混在している。きめは細かいが、しまりに欠ける。

第25題 暗茶褐色土 ロームを多く含有し全体に角鈍が顯る。粘性は強い。

第26題 黄褐色土 ほととどコートにより構成される。粘性は極めて強い。

第27層 暗紫褐色土 ロームに黒角土紋が点在する。粘性は強い。



第 134 図 第 7 号住居跡遺物分布・出土状態

炉跡はP₂とP₄を結ぶ線上の南寄りに営まれる。106×48cmの楕円形を呈し、深さは約18cmを測る。上層は焼土粒を多量に含む黒色土で、下層は灰褐色で焼土をあまり含まない灰層がある。炉床の赤焼する度合いも低く、やや軟質でその範囲も狭い。

第13層 黒褐色土 少量の焼土粒を含むが、しまりは弱くバサつく。

第14層 黄褐色土 火熱は受けけておらず、底の溶軟化層と思われる。

貯蔵穴は南西のコーナー部分に設けられ、114×82cmの楕円形を呈する。深さは約39cmであり、ほぼ平坦な底面から立ち上がる壁はかなり急である。これを幅約50cm、高さ約5cmに削り出された突堤が周囲している。覆土は以下の8層である。全体にきめが細かく、しまり・粘性ともに優れている。

第15層 暗褐色土 しまり良いが、粘性弱く、ややバサつく。少量のローム粒・焼土粒を含む。

第16層 黒褐色土 きめ細かくしまり良い。概ね单一的であるが、ローム粒・焼土粒を多含する。

第17層 茶褐色土 微量の焼土粒・炭化物粒を含む他、ローム粒を多含する。

第18層 暗黄褐色土 きめ細かくしまりやや弱い。ロームブロック溶混多く斑文となる。

第19層 黄茶褐色土 粘性は良いがしまりやや弱い。ローム粒を多含し、他層との境界は明瞭。

第20層 暗茶褐色土 きめ細かく粘性・しまり良い。ローム粒・炭化物粒・焼土粒を含有する。

第21層 暗黄色土 ほとんどローム。壁の溶軟化層。

第22層 黄褐色土 粘性強く底面の溶軟化層と思われる。

遺物はP₂南東で床に口を伏せた状態の壺形土器1個体が、貯蔵穴の底面及び突堤上から重圓文を施した壺形土器が各々出土したほか、これもほぼ床面上より壺形土器が検出された。尚、口を伏せた壺形土器は底部を欠くが、そのレベルは削平面と一致している。

出土遺物（第135・136図）

1は頭部から胴部2/3程が接合し、同一個体と思われる底部を伴う。図上復元で現高27.0cm、胴最大径はやや上位にあり25.0cm、底径9.2cmを測る。文様帶は頭部から胴部に見られ、地文には不定方向の縄文L.Rが粗く施されている。頭部と肩部には角棒状工具による刺突列点文が巡るが、両部位には成形時の接合痕が良く残っている。この列点文の下には各々4単位の重圓文が平行して描かれており、圓間は一つおきに縄文を磨り消している。重圓文は上段が4重、下段が8～9重をなし、下段の中心部のみは渦巻状となっている。その施文はヘラ状工具により左上より逆時計回りに半円、時計回りに半円の順に行なわれ、上段は2～3回、下段は4～5回の中軸が認められる。胎土中にはやや粗い砂粒を含み、焼成は普通で灰黄褐色を呈する。

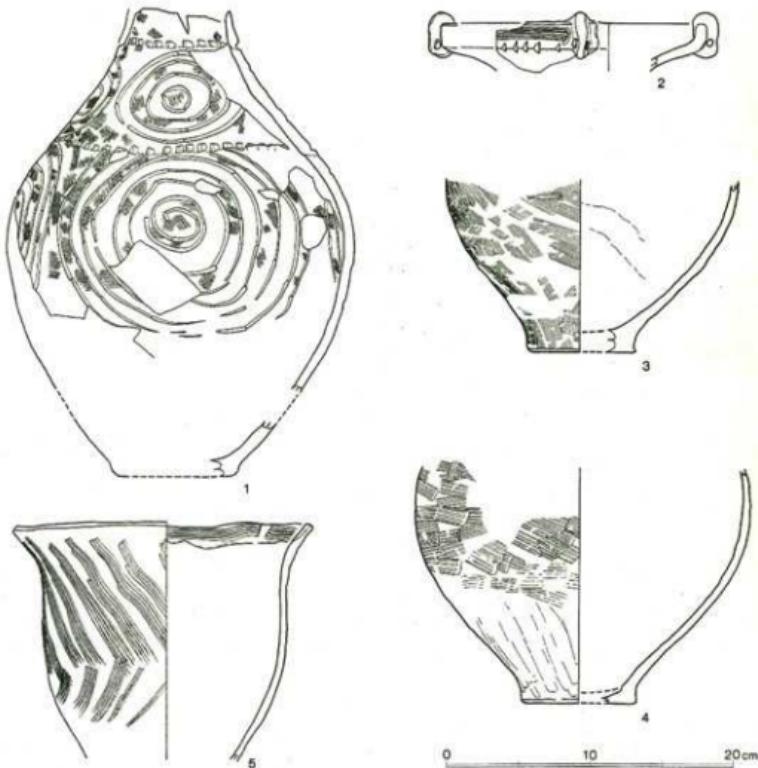
2は口縁部破片で、推定される口径は約19cmとなる。頭部よりラッパ状に大きく広がり、受口状を呈するものと思われる。直立した口縁部表面には擬流文水が残り、その間には耳朶状の突起が貼付される。さらに突起には棒状工具による穿孔がなされ、口縁部下端には刻み目が施される。

3は壺形土器の胴下半部である。現高12.2cm、底径7.7cmを測る。器表面は刷毛目で覆われ、裏面には粘土紐の巻き上げ痕が認められる。胎土中には砂粒を良く含み、にぶい黄橙色を呈する。焼

成は普通であるが、やや軟質な印象を受ける。

4も胴下半1/3程の復元で、現高17.3cm、胴最大径24.0cm、底径8.3cmを測る。器表面は櫛齒状の太い条線を残し、下位では縱方向に磨かれている。粗砂粒を含み、焼成は普通で赤褐色を呈する。

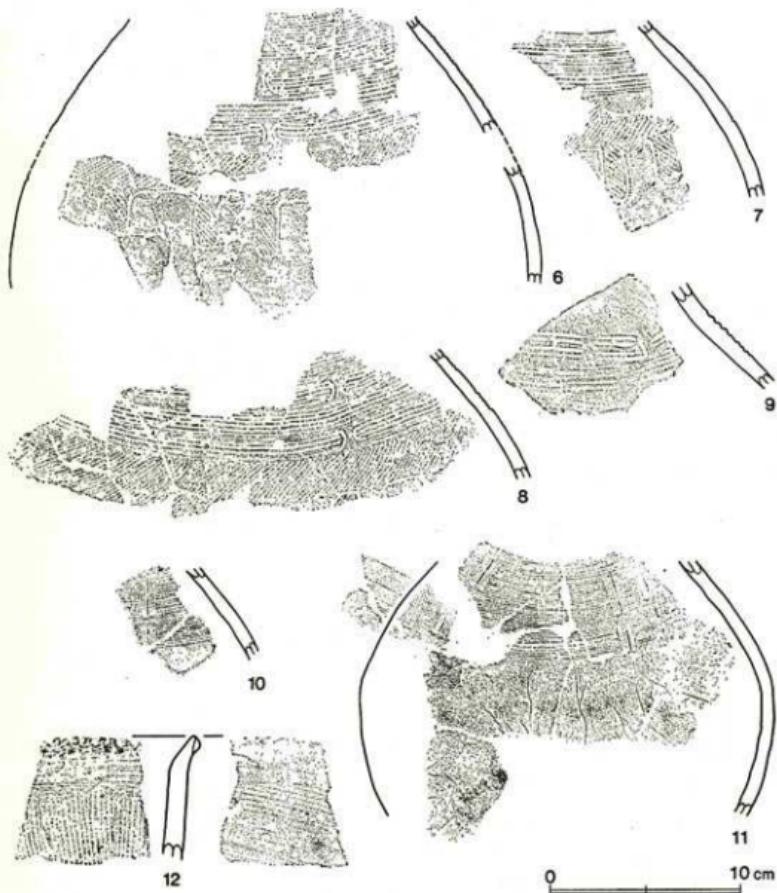
5は底部を欠くがほぼ原形を保った状態で出土しており、現高16.9cm、口径21.5cm、胴最大径17.2cmを測る。器壁は緩やかなS字を描き、口縁部裏面には幅2cm程の粘土帯が貼付される。ここに丸棒状工具（5本）の同時使用によると思われる併行S線文が引かれ、口縁部を8分割している。器表面にも同一工具による横位の羽状文が表出されるが、その施文は口縁部より下方へ刷き抜かれ、ついでその下端より底部へ向けて短く施される。上位の施文は丁寧であるが、下位はきちんと対応しておらず、羽状文としてはかなり不整然としている。胎土中には細砂粒を含み、焼成は良好で明赤褐色を呈する。



第135図 第7号住居跡出土遺物(1)

6～8は同一個体の破片である。文様帶は頭部から胴部に見られ、現存で6段の擬流水文が認められる。この下位には縄文LRが横位に2段、その下端からは縦位に4cm間隔で施される。この後、縄文帶は沈線で区画される。胎土中には細砂粒を多く含み、焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。

10・11は壺形土器の胴部破片である。図上復元で胴最大径は約22cmとなる。上半部には目の細かい櫛齒状工具（5本）による併行沈線文が器表面を覆い、同一工具で縦方向に2本1単位の断続する併行沈線が施文される。細砂粒を多く含み、焼成は悪く褐色を呈する。



第136図 第7号住居跡・出土遺物(2)

12はやや厚手の口縁部破片で、器表面には巻状文状の刷毛目が施される。口唇部は尖銳的となり、同一工具による深く細かい刻み目が加えられる。

第8号住居跡 (S I-8) (第137・138図)

H-15-4グリッドを中心位置する。削平のために東及び西側部分を完全に失っているため、形態や規模等は不明な点が多い。南北は3.6mでほぼ両壁間を測れるが、東西は現状では約2.6m、推定では約3.2m程である。面積も同じく推定に頼らざるをえないが、約11.5m²程を有すると思われ、平面は隅丸の長方形となろう。

覆土はわずかに以下の5層が認められる。

第1層 黒褐色土 踏み固められており、ブロック状になる部分がある。しまり・粘性ともに強い。

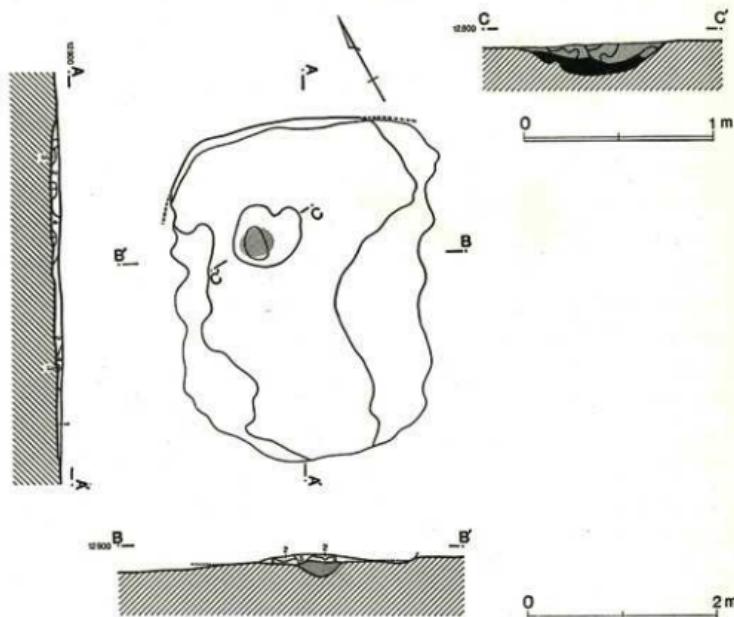
第2層 暗茶褐色土 暗茶褐色土によって構成されているが、全体的にロームの溶混が強い。

第3層 明茶褐色土 ロームで構成されている。しまり強いがややボロボロとなる。

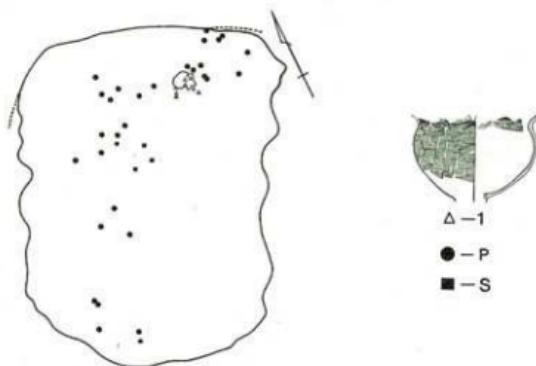
第4層 黒色土 茶褐色土がしみ状に若干広がる。しまり・粘性ともに弱い。

第5層 黒色土 第4層に準ずるが、やや色調は黄色味が強くなりしまりも強い。

床は直床式で良好踏みしめられており、かなり緻密な面となっている。第137図にはこの残存部分、及び削平を受けるが硬くしまっている部分を示した。また壁も北側でその一部が残るもの、



第137図 第8号住居跡 (S I-8)



第138図 第8号住居跡遺物分布状態

わずかに高さ約5cmを測るにすぎない。

炉は地床炉で住居跡北西寄りに営まれる。132×74cmの円形を呈し、深さは約16cmである。覆土上部は焼土及び黒色土で構成され、ややしまり弱くパサつく。下層は焼土ブロックからなり、少量の炭化物を含む。炉床は赤焼が顕著でバリバリとなる。

遺物は北辺より合付と思われる変形土器1個体、南壁際より刃器状の石器等が出土している。

出土遺物（第139図1・2、第140図4～6・8）

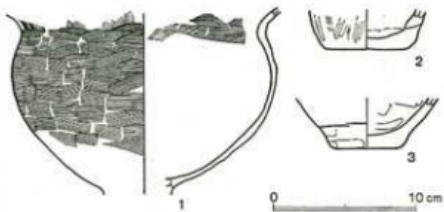
1は合付変形土器で、口縁部と合部を欠く。現高12.8cm、胴最大径19.1cmを測り、口縁部は強く外反する。器表面は刷毛目を残し、胎土中には細砂粒を含む。焼成は普通で赤褐色を呈する。

2は底部で現高2.8cm、底径5.7cmを測る。輪積み痕が見られ、器表面は細かく磨かれる。

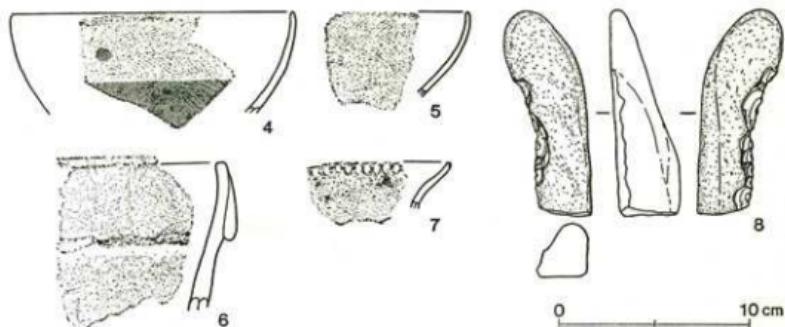
4・5は高坏形土器の口縁部破片で、同一個体と思われるが明確ではない。器壁は緩やかに内凹し、口唇部は尖銳的となる。器表面は結節を境に羽状繩文となり、これより下部及び裏面は赤色塗探される。砂粒はあまり含まれず、焼成は良好である。

6は断面涙滴状の粘土帯が貼付され、所謂二重口縁となる。やや受口状を呈し、口唇部は平坦に成形される。

8は自然縫の一側に刃部を有し、長さ11cm、幅2.7cm、厚さ2.8cm、重さ124gを測る。砂岩製。



第139図 第8・9号住居跡出土遺物(1)



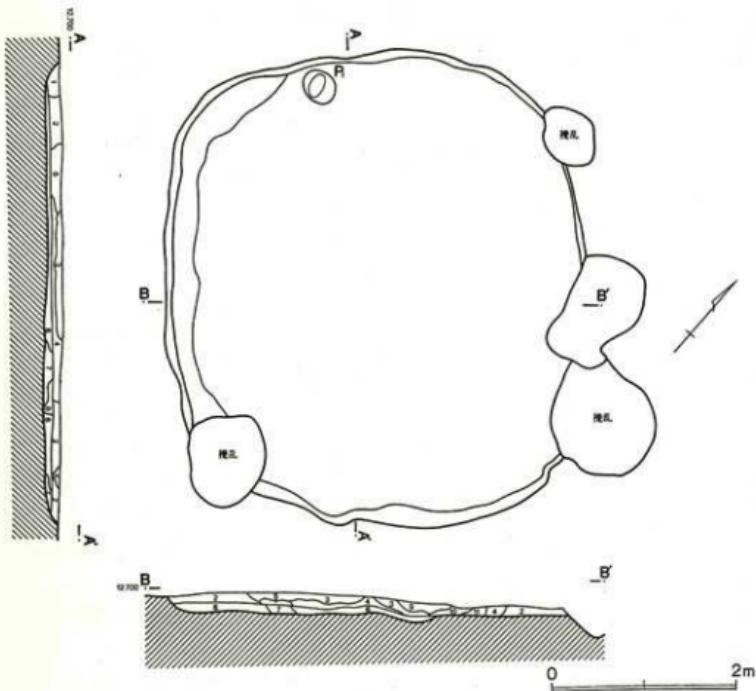
第140図 第8・9号住居跡出土遺物(2)

第9号住居跡 (S I-9) (第141図)

H-15-15グリッドを中心位置する。一部を近世土壤に切断されるが、 $5.0 \times 4.5\text{m}$ のやや四辺の張る両丸方形を呈する。面積約23m²、主軸方向はおよそ N-42°-W を指す。覆土は上下2層に大別でき、その境界は明瞭である。黒色土を主とするしまりの弱い上層に対し、下層はロームを多く含んでかなり硬く、貼床状となっている。但し下層は床面全体に及んではおらず、東側は掘り込み面に接続している。

- 第1層 黒褐色土 黒色土により構成されるが、ローム粒を多量に含むため色調は明るい。
- 第2層 明黒褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。非常にきめ細かく、粘性は強い。
- 第3層 暗茶褐色土 ローム粒を微量含有。非常にきめ細かくしまり・粘性ともに強い。
- 第4層 暗黄褐色土 ロームの含有量が多いので色調が明るく、粘性が強い。
- 第5層 暗茶褐色土 黒色土と茶褐色土からなり、きめ細かくしまりも強い。
- 第6層 暗黄色土 ロームにより構成されるが、黒色土粒も多く見られる。粘性は強い。
- 第7層 黄褐色土 ほとんどロームにより構成される層。
- 第8層 暗茶褐色土 ローム粒を多量に含み焼土粒も見られる。きめは細かくしまりも良い。
- 第9層 明茶褐色土 ロームブロック及びローム粒により構成される。非常にきめ粗くボソつく。
- 第10層 黄褐色土 ロームの影響が強く良くしまっている。
- 第11層 暗黄褐色土 非常にきめ細かい。ローム粒によって構成される。

先述のように下層の第6～8層は貼床(土を貼ったという意味で)としてもよさそうであるが、やや凹凸を描いて東側へ傾斜している。これに対して掘り込み面は平坦かつ緻密となり、いわば第2の床ともいべき状態である。このような事実からは住居の拡張や切り合い等が考えられようが、両面ともに炉跡が営まれないこと、及び貼床が居住面としてはかなり軟質なこと、などによりいずれも否定的である。翻って本跡を1軒の住居跡と考えた場合、床面の状態や炉跡を欠くことは他住居跡に比してやはり異質であり、本跡が「居住空間」としては特殊な形態のものであると言わざる



第141図 第9号住居跡 (S I-9)

をえない。

遺物も極めて少量（8点）かつ小片であり、図示できたものは2点にすぎない。

出土遺物（第139図3、第140図）

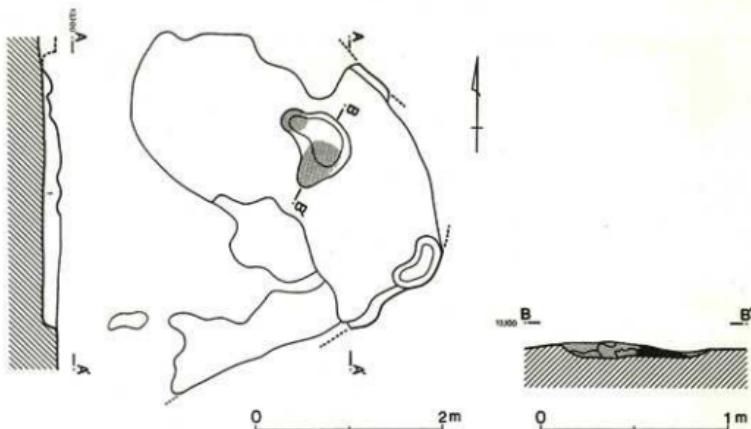
3は底部破片で現高3.5cm、底径4.7cmを測る。器面最下部は横方向に強くヘラ撫でされる。

7は口縁部破片である。器面はヘラ撫でされ、口唇部には同状工具による刻み目が入れられる。

第10号住居跡（S I-10）（第142・143図）

調査区東端の台地肩部、I-15-10グリッドを中心位置する。剖面はハードローム層にまで達しており、その形状は著しく損われている。現状では南北3.9m、東西3.6m程の遺存から隅丸方形プランが推定されるにすぎず、設営時の規模や主軸方向は不明である。

覆土は中央部においてわずかに一層が認められるが、木根が多く入るためにしまりは弱い。



第142図 第10号住居跡 (S I-10)

第1層 暗褐色土 ロームブロックが良く見られ、やや汚れた感じとなる。少量の焼土粒を含む。壁は東と西のごく一部に認められるものの、他はまったくと言ってよい程失われている。最も高く残る A-A' セクション部で約12cmが測れる。

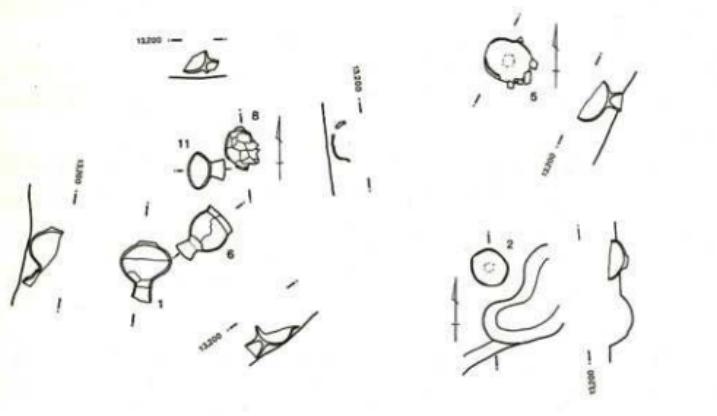
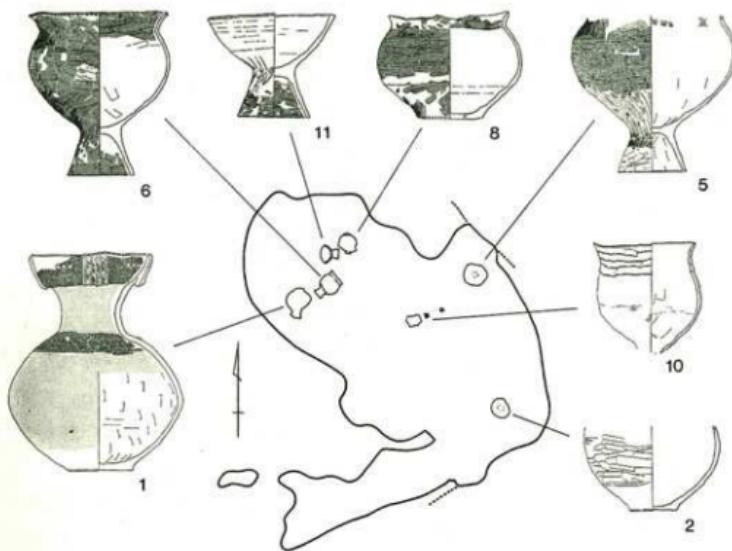
床はかなり硬く踏みしめられており、特に炉跡の周囲はこれが顕著である。第142図には残存部及び削平されてはいるが硬質な範囲を示した。

炉跡は東壁寄りに営まれる地床炉で、48×36cmを測る不整の梢円形を呈する。但し西と南は突出しており、それぞれに炉床が認められる。覆土は焼土粒・焼土ブロック・黒色土粒で構成され、炉床はパリパリである。

遺物は削平の激しさに反してかなり多くが出土し(第143図)、しかも大半は復元可能な個体である。その遺存状態は良好で、いずれも床にはば密着し、直立・横転乃至は埋設された状態にある。削平のためその上部は一様に欠損するが、ほぼ原形を止どめて検出されている。

出土遺物 (第144・145図)

1は全体の1/3程を失うが、器高33.5cm、口径13.9cm、頸最小径9.0cm、胴最大径27.2cm、底径10.3cmを測る。口縁部は幅5cm程を3段の輪積みにより二重口縁とし、内側して受口状となる。口唇部には繩文L型が巡り、口縁部にも同じく3~4段が施される。ここには5本4単位の棒突起、及び3粒4単位の赤色塗彩された円形粘土が交互に貼付される。肩部では同様の繩文帯上下をS字状結節文が区画し、3粒4単位で赤色塗彩の円形貼付文、さらに4cm間隔程に円形の赤色塗彩が各々加えられる。文様帯を除く頭部と胴部、及び口縁裏面も赤色に塗彩され、器表面はきれいに研磨されている。胎土中には砂粒が多く含み、焼成は良好で堅緻な印象を受ける。



0 1 m

第143図 第10号住居跡遺物出土状態

2は上半部を欠損。現高13.1cm、胴最大径20.7cm、底径7.3cmを測る。底部はやや上げ底状となり、胴部はほぼ球形を呈する。器表面は横方向にヘラ撫でられるが、裏面は剥落のために不明である。細砂粒を良く含み、焼成は普通でにぶい黄褐色を呈する。

3はやや下ぶくれの小形壺形土器で、底部と口縁部2/3程を欠く。現高12.8cm、口径約9.5cm、頭径6.2cm、胴最大径12.7cmを測る。頭部は「く」字状に強くくびれ、口縁部は大きく外反してラッパ状を呈する。器表面口縁部以外は丁寧に研磨され、頭部には1対2個の円形貼付文が見られる。粗砂粒が多く含み、焼成は良好でにぶい赤褐色を呈する。

4は鉢に転用されたと思われる壺形土器の胴下半部である。現高8.2cm、現口径21.4cm、底径9.0cmを測り、底部はヘラ削りされている。器表面下部は刷毛目で覆われるが、その上部は单斜方向に磨かれている。粗砂粒を良く含み、焼成は良好で明赤褐色を呈する。

5は口縁部及び胴部1/2程を欠損する台付壺形土器である。現高23.8cm、胴最大径25.5cm、臺部底径（くびれ部）6.7cm、台高6.0cm、台底径10.6cmを測る。台部は内堀きみに立ち上がり、やや丸味を帯びている。破損がないために接合方法は不明であるが、臺胴部下位に欠折部が認められ、台部と臺底部は一連の作業内で成形されたものと思われる。器表面は刷毛目で覆われるが、臺底部からは上部へ向けてヘラ撫で状に撫で抜かれ、台底部も横方向の撫でとなっている。細砂粒を含み、焼成は良好である。明赤褐色を基調とするが、胴部には煤の付着が著しい。

6は胴上部1/3程を欠くが、器高25.2cm、口径21.7cm、頭径18.4cm、胴最大径21.9cm、臺部底径（くびれ部）6.2cm、台高6.4cm、台底径10.7cmを測る。台部は直線的に広がり、わずかに外反している。これも破損がないために、臺部と台部の関係は不明である。頭部は強くくびれ、これより口縁部は大きく外反する。口唇部は斜めに成形され、刷毛状工具による細かい刻み目が施される。器表面と裏面口縁部、及び台底部は刷毛目で覆われている。細砂粒を含み、焼成は良好である。赤褐色を基調とするが、胴部と裏面底部は煤の付着が顕著である。

7は台部破片で、現高7.2cm、台底径10.3cmを測る。器壁は「ハ」字状を呈し、直線的に広がる。器面には刷毛目が良く残る。細砂粒を含み、焼成は良好でにぶい赤褐色を呈する。

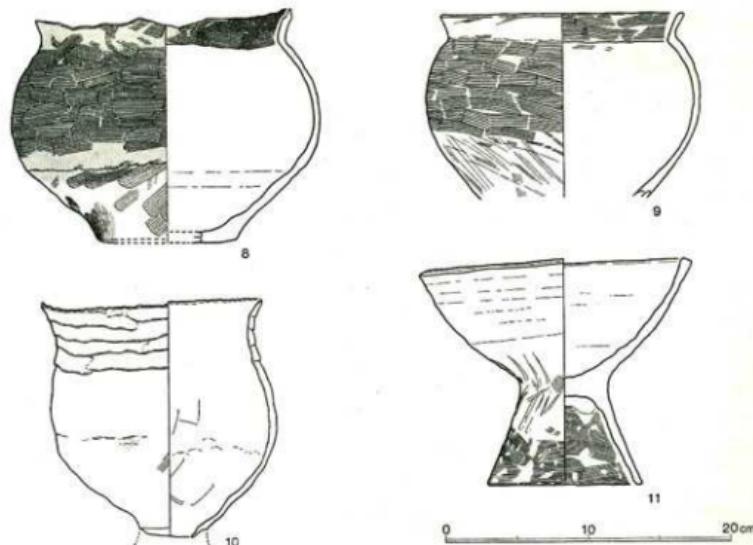
8は器表面を赤色塗彩された壺形土器である。全体の1/3程を欠くが、口縁欠折部には炭化物が見られる。現高16.7cm、現口径18.3cm、頭径17.5cm、胴最大径22.3cm、底径9.9cmを測り、胴部は強く内彌して潰れたような感じとなる。頭部は「く」字状にくびれ、口縁部はほぼ直線的に広がる。器表面胴部と裏面口縁部には刷毛目が良く残る。粗砂粒を良く含み、焼成は良好で堅緻な印象を受ける。にぶい橙色を基調とするが、裏面下部は煤の付着が見られる。

9は広口の壺形土器の破片である。図上復元で口径17.5cm、頭径16.2cm、胴最大径19.6cmを測る。器表面胴部と裏面口縁部には粗い刷毛目が残る。頭部は強くくびれており、口縁部は直線的に広がる。砂粒はあまり含まれず、焼成は良好で明赤褐色を呈する。

10は台部を欠くが、現高17.0cm、口径15.9cm、頭最小径14.2cm、胴最大径16.1cmを測る。器壁は緩やかなS字を描き、胴部はやや歪んだ球形となる。器表面は刷毛目が施された後にこれをきれいに撫で消しているが、頭部から口縁部では4本の輪積成形痕がそのまま表出されている。口唇部は丸味を帯びており、ここに指頭による細かい押捺が加えられる。また、胴部中位には接合痕が見ら



第144図 第10号住居跡出土遺物(1)



第145図 第10号住居跡出土遺物(2)

れ、裏面には指頭痕がよく残る。砂粒はほとんど含まれず、焼成は良好で明赤褐色を呈する。

11はほぼ完形の高環形土器である。器高16.2cm、口径19.6cm、環部底径（くびれ部）6.3cm、台高6.4cm、台底径11.2cmを測る。全体は輪積みであるが、環底部は台部と同時に成形されている。台部は「ハ」字状でわずかに外反しており、その底唇部は斜めとなっている。環部は緩やかに内擭して立ち上がり、口唇部はやはり斜めに成形されている。器面は刷毛目が施された後、環部は横方向に丁寧に撫でられている。砂粒を良く含み、焼成は良好でぶい黄褐色を呈する。

第8表 明花向遺跡B区弥生時代住居跡一覧表

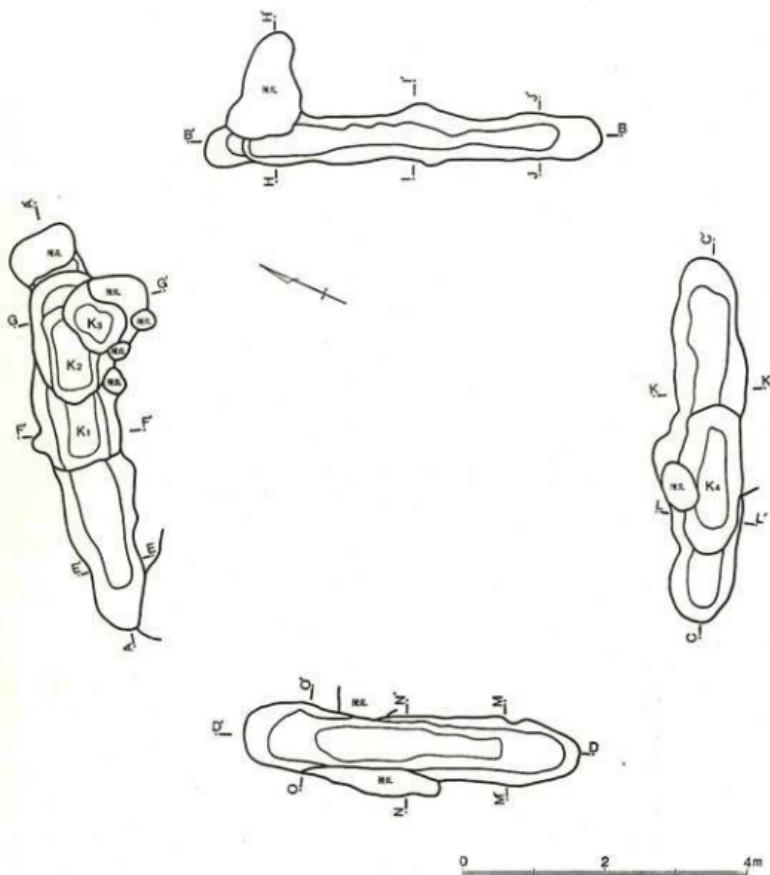
番号	グリッド	形態	規模(m)		面積 (m ²)	主軸	支柱 (本)	貯藏穴		床	備考
			長軸	短軸				突堤	外周溝		
2	I-13-3	隅丸長方形	6.5	4.7	26.9	N-37'-W	4	有	無	貼床式	
3	G-13-23	隅丸長方形	6.3	5.0	31.7	S-N	4	有	無	直床式	
4	H-13-22	隅丸長方形	4.9	3.7	16.8	N-8*-W	4	有	有	"	
5	H-13-10	隅丸長方形	6.9	6.2	37.9	N-23*-W	4	有	有	"	
6	H-14-8	隅丸長方形	5.7	4.4	21.4	N-38*-W	4	無	無	"	
7	G-14-24	隅丸長方形	6.9	5.7	36.6	N-37'-W	4	有	無	"	
8	H-15-4	隅丸長方形	3.6	(3.2)	(11.5)	?	?	?	?	"	
9	H-15-15	隅丸方形	5.0	4.5	23	N-42*-W	?	無	無	"	
10	I-15-10	隅丸方形(?)	3.9	3.6	14.0	?	?	?	?	"	

(2) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓 (S Z-1) (第146・147)

H-15-16グリッドを中心に位置する。4本の独立する溝が方形に配されるが、北溝がやや偏している。このため西隅部は鈍角、東隅部は鋭角にそれぞれなっている。溝幅を含めた中軸の長さは南北10.0m、東西9.6mを測り、主軸方向は N-22°-Wを指す。

周溝内の覆土は以下の27層である。このうち第15~20層 (K₁)、第21~22層 (K₂)、第24~25層



第146図 第1号方形周溝墓 (S Z-1) (1)

(K₄) はそれぞれ北溝の溝中土溝覆土である。

第1層 耕作土

第2層 暗茶褐色土 きめ細かいがしまり弱くバサつく。第1層の影響層である。

第3層 暗茶褐色土 しまり良いがきめやや粗い。ローム粒も少なくなる。

第4層 黒褐色土 きめ細かくしまりも良い。ローム粒を少量含む。

第5層 黒褐色土 きめやや粗く全体的にロームを含む。若干の焼土粒も含む。

第6層 黒褐色土 ロームを全体的に溶混し茶色味を帯びる。若干の焼土粒を含む。

第7層 暗褐色土 きめ細かくしまり・粘性に富む。ローム粒を多く含む。

第8層 暗褐色土 しまりは劣るが、きめ細かく粘性に富む。ローム粒を少量含む。

第9層 黄色土 しまり・粘性とも優れる。ほとんどローム。溝底の溶軟化層か。

第10層 暗黄褐色土 きめ細かいがしまり弱くバサつく。ローム溶混が多く黄色味が強い。

第11層 褐色土 きめ細かいがしまり弱くバサつく。ローム粒を多量に含む。

第12層 暗黄色土 きめ細かくしまり弱くバサつく。ほとんどロームで壁の溶軟化層。

第13層 褐色土 きめ細かくしまり・粘性とも優れる。ローム粒を多量に含み、黄色味が強い。

第14層 褐色土 ローム溶混がより全体的であり、ローム粒も大きい。

第15層 暗褐色土 きめ細かくしまり・粘性とも良い。ローム粒と黒色土ブロックを多量に含む。

第16層 暗黄茶褐色土 きめ細かくしまり・粘性とも良い。ローム粒を多量に含む。

第17層 茶褐色土 きめ細かくしまり・粘性とも良い。ローム粒を多含し、若干の焼土粒を含む。

第18層 暗茶褐色土 きめ細かくしまり・粘性とも良い。ローム粒を多含し、黒色土を溶混する。

第19層 褐色土 第20層に準ずるがしまり良い。ローム粒が多く見られる。

第20層 褐色土 きめ細かいがしまりやや弱い。ローム粒を少量含む他微量の焼土粒が見られる。

第21層 茶褐色土 第19層に極似するがロームブロックが見られる。

第22層 暗褐色土 しまり・粘性とも優れ、ローム粒・ブロックが見られる。他層との境界は明瞭。

第23層 黄褐色土 ローム溶混が多く黄色味強い。しまり弱い。ローム・黒色土が斑文となる。

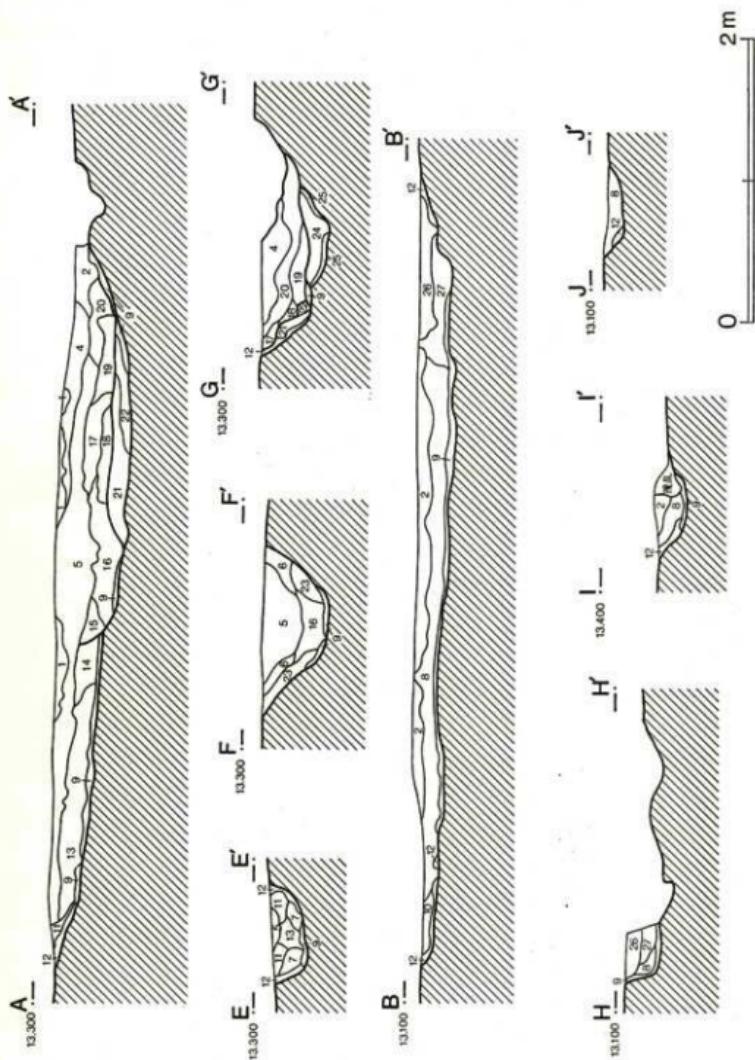
第24層 黄褐色土 ロームブロックが密につまる土層。その間に褐色土粒が多く入る。

第25層 茶褐色土 きめ細かいがしまり弱くバサつく。ローム粒を多量に含む。

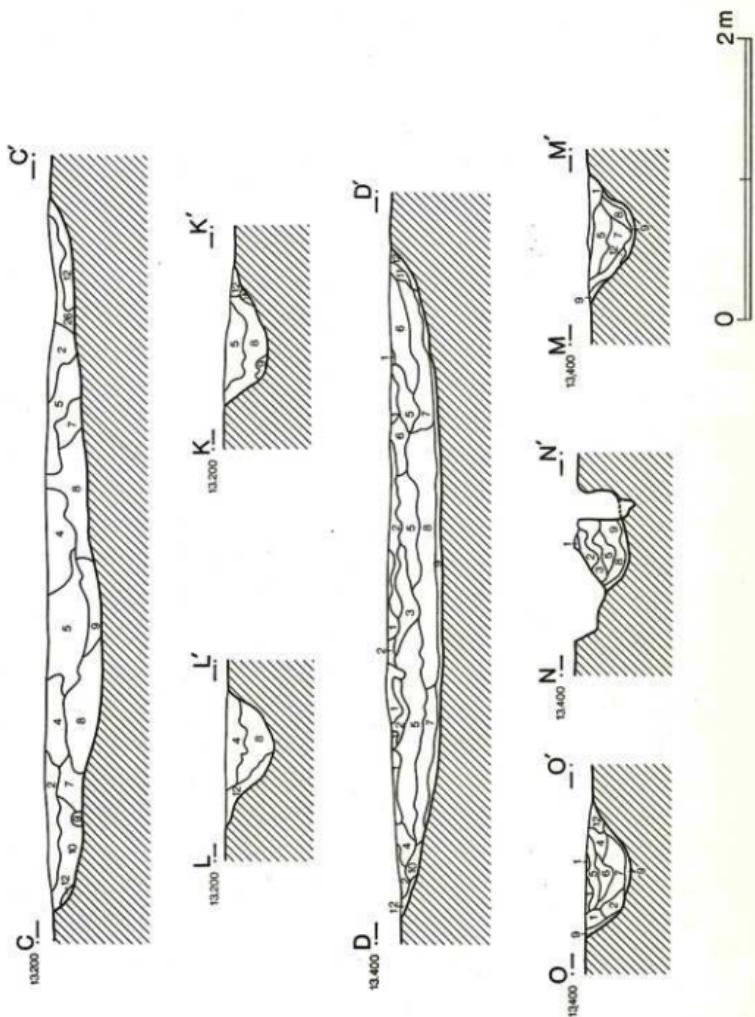
第26層 茶褐色土 きめ細かくしまりは良い。ローム粒を少量含むが、概ね単一的である。

第27層 茶褐色土 きめ細かいがしまり弱い。ローム粒を多含する。

北溝は東端を近世土壌により切断されるが、推定される長さ約5.6m、幅は約1.0mを測る。溝底は端部より緩やかに掘り込まれ、中央部へ向けて弓状弧を描く。深さは確認面より最も深い部分で約52cmとなる。横断面は立ち上がりの急な逆台形を呈し、平坦な溝底は南側へ傾斜している。この溝の中央から東端にかけては、3基の溝中土壌が見られる。3基の新旧関係はK₁(古)→K₁(新)である。K₁はK₂・K₃及び溝底の埋没後に設営されており、長径約2.6m(土層断面より)、短径約1.1mを測る。底面は溝底より約10cm低くほぼ平坦であるが、K₂と接する部分はやや凸凹を描く。また、横断面は溝のそれに比して緩やかな立ち上がりとなる。K₂はK₃の埋没後に掘り込まれ、長径1.9m、短径1.2mとなる。東側はわずかに段をなし、緩やかに立ち上がる。底面はほ



第147圖 第1号方形周溝墓 (S Z-1) (2)



第148図 第1号方形周溝墓 (S Z-1) (3)

明花向B

ほぼ平坦であり、K₁よりも10cm程深くなる。K₂はK₁及びK₃によって上部の形状が不明であるが、半分程が溝外へ突出して構築される。95×76cmの橢円形を呈し、K₂よりも約6cm深く掘り込まれる。底面は丸底状で硬くしまっている。

南溝はS I-1（縄文）を切断しており、長さ5.2m、幅約1.0mを測る。溝底は弓状弧を描くが、西側の立ち上がりがやや急となる。横断面は丸味が強く、北壁が急傾斜となる。西端から約1mに径2.1×0.9m、溝底より約12cmを測る掘り込みが見られる。他溝に比してやや土層堆積は不自然であり、全体にしまりの弱いものとなっている。また、掘り込みは溝との境界が不明瞭である。

東溝は他溝よりも細長いが、この部分での削平は一段と激しく、幅は現状より広かったものと思われる。長さ5.7m、幅約0.7mを測り、溝底は深さ17~28cmでかなり凹凸を有している。これに対して横断面ではほぼ平坦となり、立ち上がりは北で強く南で緩い傾斜となる。

西溝は長さ4.8m、幅約0.9mで一定しており、溝底はきれいな弓状弧を描く。このうち中央部は平坦となり、横断面の立ち上がりも急である。

遺物は大半が縄文式土器であるが、これに混じて宮ノ台式の変形土器片が1点出土している。

出土遺物（第149図1）

上述のようにわずか1点の小片にすぎず、それも覆土上層（第5層）からの出土である。口縁部は直線的に外反し、斜めに整形された口唇部へ続く。ここに一見すると指頭押捺のようであるが、実際は刷毛状工具による刻み目が押し引くように施される。

（8）グリッド出土の遺物（第149図2~17）

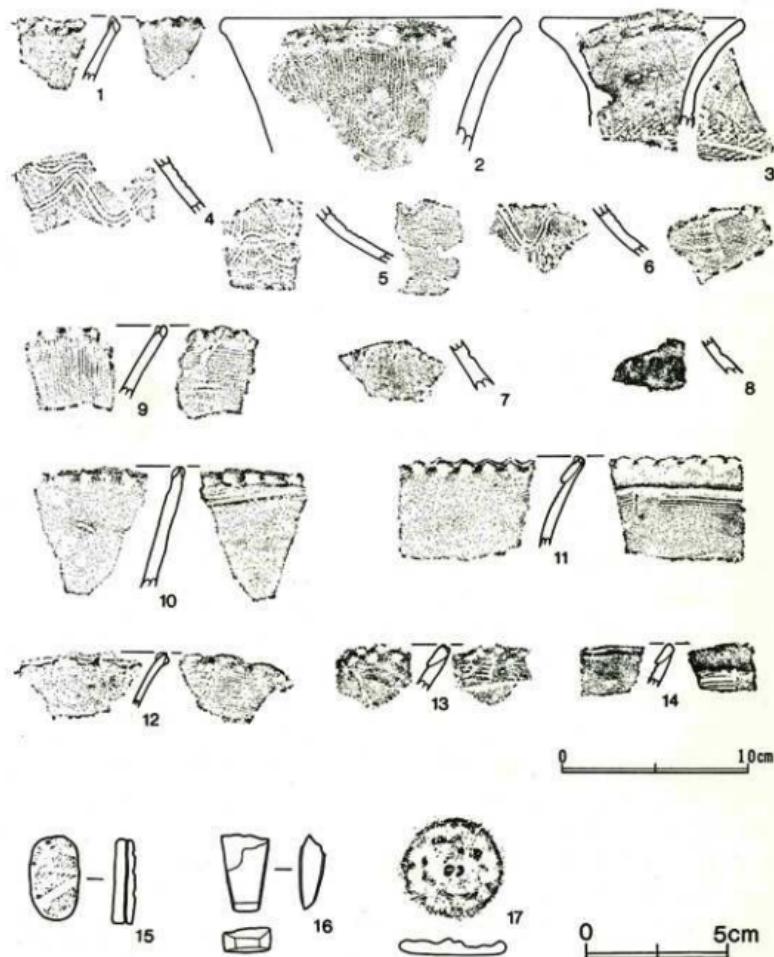
2~7は壺形土器の破片である。2は直線的に開く口縁部で、口唇部は丸棒状となる。推定口径16.4cm。3は頸部に縄文LRが施され、この上に縄状工具による2本の併行沈線文が認められる。推定口径約17cm。4~6は同一個体と思われ、縄状工具3本の同時使用による波状文が見られる。7・8はともに棒状工具による刺突列点文が施されている。9~14は壺形土器の口縁部破片である。口唇部は9・10が尖鋭的なほかは斜めに成形され、14以外は指頭押捺が見られる。また、11・13・14は裏面において二重の口縁となり、下部またはそこに各々櫛歯状工具で併行沈線が引かれる。器面は9・10に刷毛目が残るもの、他は擦でなっている。

15は楕円盤状の土製品で、縄文LRと沈線文が施された壺形土器の破片を使用している。長さ3.1cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重さ4.6gを測る。外周は面取りされ、中央に浅い溝を切る。

16は小形の整形石器である。基部を欠損するが、刃部をはじめ各面は丁寧に研磨されている。現状で長さ2.7cm、基部幅1.7cm、刃部幅0.9cm、厚さ約0.8cm、重さ5.3gを測る。全体は台形状を呈し、両面はわずかに脹らむ。

17はH-13-23グリッド（附図2参照）、標高13.778mの遺物包含層中より出土した小形の銅鏡である。第2号住居跡北西約2mの地点にあたり、縄文式・弥生式土器に混じて検出された。文様等の詳細な検討を行っていないため俄かには時期決定しがたいが、出土地点に落込み等が見られな

いことや伴出土器などから、一応本項で扱うこととした。直径約3.7cm、厚さ約0.4cm、重さ13.3gを測る。全体はやや歪んでいるが、鏡面は滑らかでわずかに凸面となっている。鉢は幅3.5mm程の帯状でその位置は円の中心をやや外れている。頂部は欠失するが、断面は半円形を呈すると思われる。縁の断面はわずかに三角形状となり、その一端には径2mm程の小孔が穿たれている。文様は鉢の周囲に瓢箪形をした4個の突起、縁部には7個の瘤状突起がそれぞれ鋳出されている。



第149図 第1号方形周溝墓・グリッド出土遺物

4. 中世の遺構と遺物

(1) 壓穴状遺構

第1号壓穴状遺構 (SB-1) (第150図)

G-12-24グリッドを中心に位置する。西側は調査区外へかかるために不明であるが、プランはSB-2と同様で、やや隅丸の長方形を呈するものと推定される。現状では南北2.35m、東西2.2m、深さ約50cmを測り、北東コーナー部は大きく張り出している。

覆土は以下の10層であるが、全体にややしまりが弱くバサバサしている。

- 第1層 黒褐色土 ローム粒をほぼ全面に含有する他、ロームブロックを若干混入する。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒及びロームブロックを全体に含む。炭化物粒の塊を認める。
- 第3層 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含み、非常にきめ細かいがしまりに欠ける。
- 第4層 暗黄褐色土 全体にローム粒を含有する。きめは粗くしまりも弱い。
- 第5層 暗黄褐色土 全体はローム及びロームブロックにより構成される。粘性は強い。
- 第6層 明茶褐色土 ローム粒を少量含有。ローム溶混。きめは粗くややボソつく。
- 第7層 明黄褐色土 ロームブロック及びローム溶混により構成される。粘性極めて強し。
- 第8層 明茶褐色土 茶褐色土に黒色土粒が若干混じった土層。きめは細かくしまりが悪い。
- 第9層 暗黄褐色土 第5層に類似するがロームブロックが小さく、粘性も劣る感じである。
- 第10層 暗茶褐色土 きめ細かいがしまり悪くバサバサ。ロームブロックを少量含む。

床面は概ね平坦で、西方へわずかに傾斜しており、踏み固められた様子は認められない。また、ピット状の掘り込みがいくつか検出されたが、いずれもごく浅い(5~10cm)ものであり、柱穴とは思われない。壁の立ち上がりはかなり急角度で、壁面は平滑となっている。

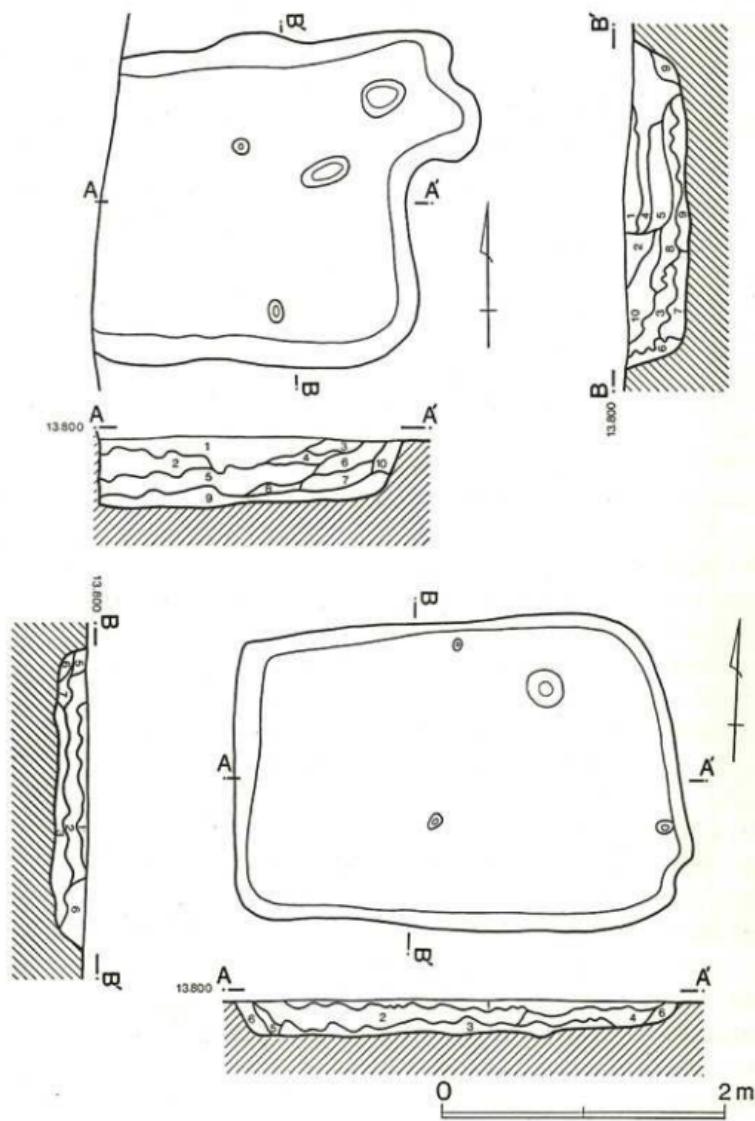
遺物はすべて縄文式土器であり、本跡の時期判断となるものは何ら出土していない。しかしながら、覆土が後述する墓壙群のそれに極似しており、縄文・弥生の各遺構とは異っている。故に本跡及びSB-2は中世墓壙群とはほぼ同時期の所産と考えられる。

第2号壓穴状遺構 (SB-2) (第150図)

H-12-4グリッドを中心に位置し、SB-1とは約6.7mを隔てて東南にあたる。南北2.3m、東西3.3mの長方形を呈するが、北辺に比して南辺がやや長い。主軸方向はSB-1とほぼ同一でおよそE-Wを指す。

覆土は以下の7層である。

- 第1層 暗褐色土 きめ粗くしまり・粘性に欠ける。細かなロームブロックを全体に混入する。
- 第2層 黒褐色土 きめ細かくしまり・粘性やや強い。ロームブロックを散在的に混入する。
- 第3層 黄茶褐色土 ロームブロックをわずかに混入し、きめ粗くしまり・粘性に欠ける。
- 第4層 黄茶褐色土 ロームブロックを少量含み、きめ粗くしまり・粘性に欠ける。
- 第5層 暗褐色土 きめ粗くバサバサする。ロームブロックを散在的に混入する。



第150図 第1・2号竖穴状遗構 (SB-1・2)

第6層 黄褐色土 ロームブロックをわずかに混入する。

第7層 暗黄褐色土 茶褐色土とロームブロックを少量含む。しまり・粘性弱く軟弱な層。

床面は深さ約24cmでローム層に掘り込まれ、緩やかな凹凸を有している。さほどしまってはおらず、むしろ軟質である。壁面は平滑であり、その立ち上がりはSB-1より傾斜が緩やかとなる。

遺物は縄文式土器が少量出土したのみである。

(2) 墓壙 (ST-1~19) (第151・152図)

調査区西方H-13グリッドを中心に位置し、19基が密集した状態で検出された。壙内に人骨等はいっさい認められなかったが、その分布状態や形態などからこれを墓壙として扱うこととした。いずれも円形乃至は梢円形を呈し、規模的にもほぼ同一となっている。また、部分的には切り合いが認められる。

覆土は概ね以下の3層で共通している。

第1層 黒色土 ローム粒を多含、微量の焼土粒を含む。きめ細かくしまり・粘性強い。

第2層 茶褐色土 ローム粒の他薄くブロック溶混し、汚れた斑文を呈する。きめ粗くボソつく。

第3層 暗黄褐色土 ローム粒の他ブロック溶混が多い。黄色味強く、粘性良いがしまりは弱い。

遺物はほとんど見られなかつたが、ST-7の確認面上より7枚の北宋錢が出土している。

第1号墓壙 (位置) H-13-24グリッド (形状) SI-2とST-4を切断して營まれ、ほぼ円形を呈するものと思われる。底面は西側へ傾斜しており、壁の立ち上がりは緩やかである。

(規模) 90×90×18cm。

第2号墓壙 (位置) I-13-4グリッド (形状) 梢円形。底面はわずかに東へ傾斜し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(規模) 135×106×28cm。

第3号墓壙 (位置) H-13-25グリッド (形状) 概ね梢円形を呈するが、西側に1段浅い張り出しが見られる。底面は平坦で、壁へは緩やかな屈曲をなして立ち上がる。

(規模) 114×100×12cm。

第4号墓壙 (位置) H-13-24グリッド (形状) ST-1及び5に切断される。大きな梢円形を呈し、底面は強く凹凸している。壁の立ち上がりはかなり緩く、西側は特にだらだらとなる。

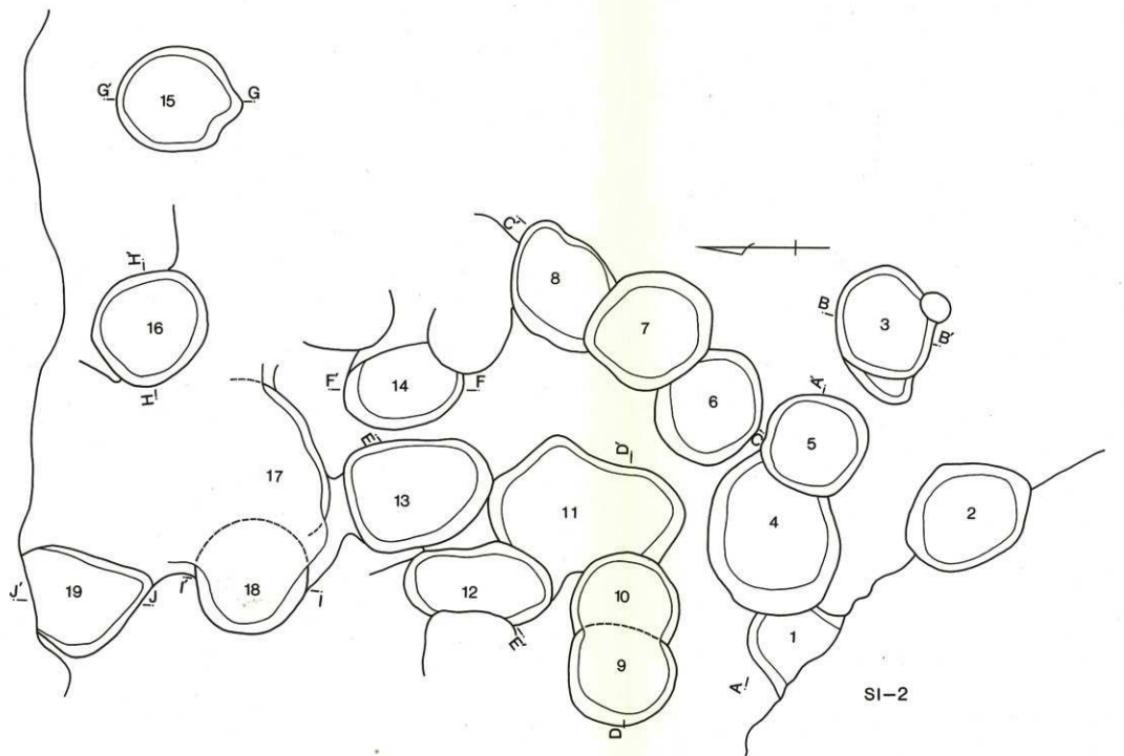
(規模) 170×132×32cm。

第5号墓壙 (位置) H-13-24グリッド (形状) きれいな円形のプランであり、ST-4を切断して營まれる。底面は概ね平坦となり、壁も急角度に立ち上がっている。

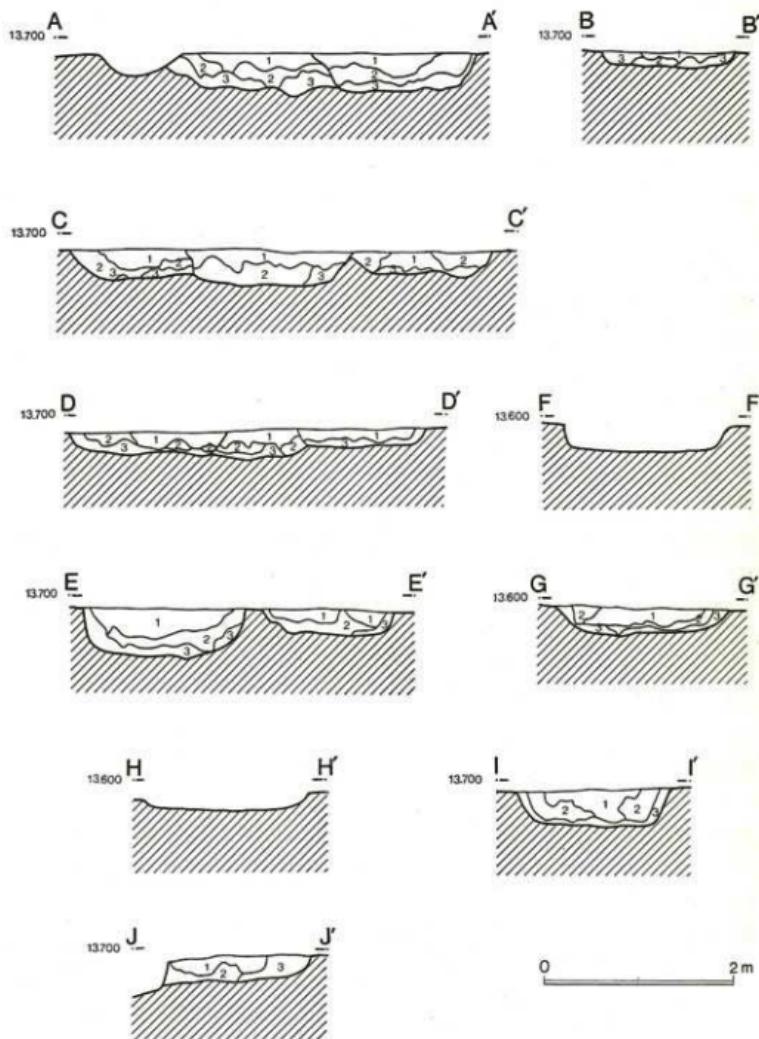
(規模) 105×100×29cm。

第6号墓壙 (位置) H-13-24グリッド (形状) ST-7に切断されるが、ほぼ円形を呈している。底面は平坦ながらも南へ傾斜し、壁の立ち上がりは緩やかとなっている。

(規模) 120×106×25cm。



第151図 中世墓地群(ST-1~19)(1)



第152図 墓塚群 (S T-1~19) (2)

明花向B

第7号墓壙（位置）H-13-25グリッド（形状）大きな円形を呈し、ST-6及び7を切断して営まれる。底面は中央部へわずかに傾斜し、壁の立ち上がりは急となっている。

（規模）132×118×28cm。

第8号墓壙（位置）H-13-25グリッド（形状）ほぼ梢円形を呈するものと思われるが、南側をST-7に切られている。底面はやや凹凸を有しており、壁の立ち上がりは急である。

（規模）138×101×22cm。

第9号墓壙（位置）H-13-24グリッド（形状）ST-10を切断する円形の墓壙である。底面はやや中央部が膨らみ、壁の立ち上がりは緩やかとなる。（規模）108×100×18cm。

第10号墓壙（位置）H-13-24グリッド（形状）西側をST-10に切られるが、きれいな円形を描くものと思われる。底面は中央部へ向けて傾斜しており、壁の立ち上がりは垂直に近い。

（規模）116×108×22cm。

第11号墓壙（位置）H-13-24グリッド（形状）他に比してかなり大きな梢円形であり、あるいは2基が切り合うものかもしれない。底面は平坦であるが、壁の立ち上がりはやや緩い。

（規模）198×122×18cm。

第12号墓壙（位置）H-13-19グリッド（形状）長い梢円形を呈し、平坦な底面は西側へ傾斜している。壁の立ち上がりは東側が急となるが、他は緩やかである。（規模）148×80×18cm。

第13号墓壙（位置）H-13-19グリッド（形状）全体は鶴卵状のプランであり、断面は舟底状を呈する。底面は概ね平坦となり、壁は急角度で立ち上がる。（規模）148×108×36cm。

第14号墓壙（位置）H-13-20グリッド（形状）梢円形を呈すると思われるが、東側を近世土壙に大きく切断されている。底面は平坦で壁の立ち上がりも急となる。（規模）125×80×21cm。

第15号墓壙（位置）H-13-20グリッド（形状）南側でやや凹凸を描く円形となる。底面はほぼ平坦であるが、壁の立ち上がりはかなり緩やかである。（規模）128×105×19cm。

第16号墓壙（位置）H-13-20グリッド（形状）概ね円形となり、底面は平坦である。壁はわずかに認められるにすぎないが、その立ち上がりは緩やかとなっている。

（規模）118×112×11cm。

第17号墓壙（位置）H-13-19グリッド（形状）北側を近世土壙に大きく切断されており、その形態や規模は不明である。但し、壁の立ち上がりは急となっている。

第18号墓壙（位置）H-13-19グリッド（形状）東側を大きく切られるために明確ではないが、おそらくは円形を呈するものと思われる。底面は平坦となり、壁の立ち上がりも急となる。

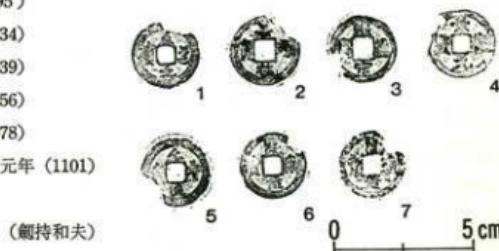
（規模）推定で115×110×28cmを測る。

第19号墓壙（位置）H-13-14グリッド（形状）近世の溝と土壙に大きく切られるが、ほぼ梢円形を呈するものと思われる。底面は北へ傾斜しており、やや凹凸を有している。壁の立ち上がりは急である。（規模）現状で148×108×21cmを測る。

(3) グリッド出土の遺物

第153図にはH-13-25グリッドより出土した北宋錢を示した。これらは一括して遺構確認時に検出され、その位置はほぼST-7部分にあたる。このため当墓壙に伴う遺物として良さそうであるが、やや明確さを欠くためにグリッド出土のものとして扱った。出土した7枚の初銘年は次のとおりである。

- | | |
|----------|--------------|
| 1 至道元宝 | 至道元年（995） |
| 2 景祐元宝 | 景祐元年（1034） |
| 3 皇宋通宝 | 宝元2年（1039） |
| 4 嘉祐元宝 | 嘉祐元年（1056） |
| 5 元豐通宝 | 元豐元年（1078） |
| 6・7 聖宋元宝 | 建中靖国元年（1101） |



第153図 グリッド出土遺物

第9表 明花向遺跡B区中世墓壙一覧表

番号	グリッド	形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	H-13-24	円形	90	90	18	4を切断
2	I-13-4	楕円形	135	106	28	1を切断
3	H-13-25	円形	114	100	12	
4	H-13-24	楕円形	170	132	32	
5	H-13-24	円形	105	100	29	4を切断
6	H-13-24	円形	120	106	25	
7	H-13-25	円形	132	118	28	6・8を切断
8	H-13-25	楕円形	138	101	22	
9	H-13-24	円形	108	100	18	10を切断
10	H-13-24	円形	116	108	22	
11	H-13-24	楕円形	198	122	18	10を切断
12	H-13-19	楕円形	148	80	18	
13	H-13-19	楕円形	148	108	36	
14	H-13-20	楕円形	125	80	21	
15	H-13-20	円形	128	105	19	
16	H-13-20	円形	118	112	11	
17	H-13-19				16	
18	H-13-19	円形？	115	(110)	28	
19	H-13-14	楕円形	(148)	108	21	

IV 明花向遺跡C区の調査

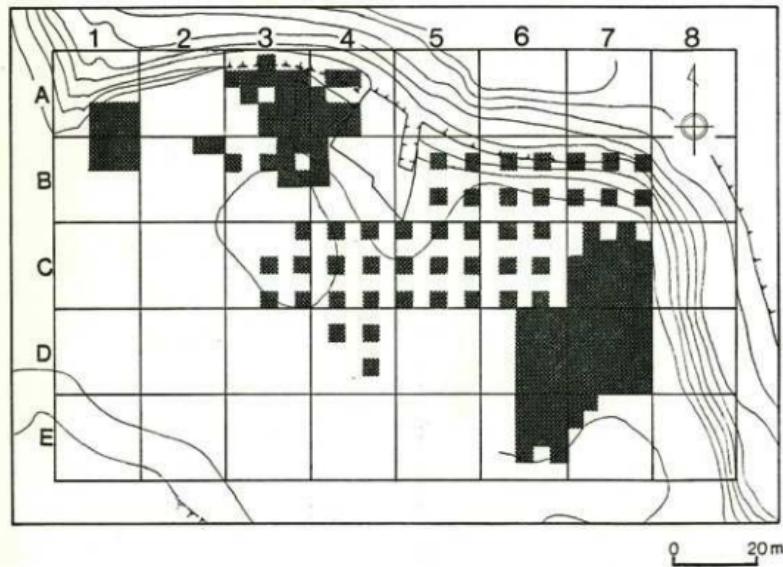
1. 地区の概観と調査経過

C区は明花向遺跡全体を乗せる台地の北側部分にあたり、北西部は馬背状に狭くくびれている。このため、北に続く台地とは一点で接したような形を呈している。一部で遺物包含層が認められるが、大半は表土一層でローム層まできれいに削平されている。さらに、畑地であったために縦横に畝が走っており、遺構は切り刻まれた感じのものが多い。この他、A・B区にも見られた近世の土壙や溝が台地縁辺部に集中している。但し、溝は台地縁に添って走り、溝底は数本の小溝が段をなしている。またこれに直行するものや四角に区画する溝があり、性格不明ながらもこの地区における該期の土地利用についての示唆を与えていている。

明花向遺跡C区C-3-13グリッド西壁の層序を、他の各地区や遺跡にも共通する基本層序とした（第20図）。しかし細部においては異なる点もある。以下に略述しよう。

第Ⅰ層 黒褐色土層。しまり悪く細かいローム粒を多く含む再堆積土層である。表土層（耕作土）に当り、下層との境界が削平面となる。

第Ⅱ層 茶褐色土層。第Ⅰ層と第Ⅱ層との間にレンズ状に検出される。縄文時代以降の遺物包



第154図 明花向遺跡C区先土器時代調査区

含層。しまり良く砂質。次の第Ⅲ層と
の境界は漸移的である。

第Ⅲ層 淡黄褐色土層。いわゆるソフトローム
に相当すると考えられる。若干のスコ
リア粒を含み、次の第Ⅳ層との境界で
は凹凸を描く。本層の下面から先土器
時代資料が出土し始める。

第Ⅳ層 褐色土層。スコリアや炭化物が多く認
められる。全体に多孔質である。本層
中心として先土器時代資料が検出され
ている。所謂ハードローム層である。

第Ⅴ層 暗褐色土層。先後する層と比較してや
や黒味を帯びる。スコリアや炭化物も
多い。所謂第Ⅰ黑色帶に相当するもの
と思われる。

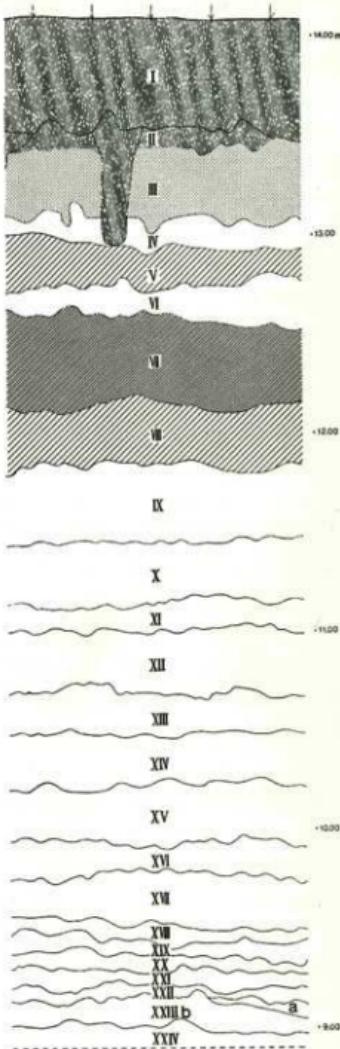
第Ⅵ層 褐色土層。部分的にはブロック状とな
っており、明確に一層として捕えられ
ない場所もある。

第Ⅶ層 黑褐色土層。第Ⅰ黑色帶の上部層に位
置すると思われるが、他遺跡と異なり
上部の本層の方が下部の第Ⅸ層よりも
黒味を帯びている。スコリアや炭化物
を含み、緻密で堅い。

第Ⅷ層 暗褐色土層。第Ⅶ層よりも黒味が薄
い。炭化物は殆ど認められなくなる。
第Ⅷ層よりもやや軟質であるが、緻密
で粘性がある。第Ⅰ黑色帶の下部に相
当するものと思われる。

第Ⅸ層 褐色土層。炭化物が殆ど認められなく
なる。粘性に富み、色調は第Ⅶ層より
もやや赤味を帯びる。

第Ⅹ層 暗褐色土層。先後する層に比較して粘
性はやや弱く、多孔質で黒味が強い。
本層のような現象は大宮台地のみなら
ず、下総や武藏野台地でも同位置に認
められるように思われる。黑色帶とし



第155図 明花向遺跡C区層序

て鍵層となる可能性もある。

- 第Ⅹ層 褐色土層。ややブロック状にちかい堆積を示している。
- 第Ⅺ層 褐色土層。第Ⅹ層よりもやや黒味が強く、粘性を持つ。スコリア粒が混じる。
- 第Ⅻ層 褐色土層。第Ⅺ層よりも明るい色調で粘性がある。全体に水気を帯びてくる。
- 第Ⅼ層 褐色土層。第Ⅻ層よりも色調が暗く、水気を帯びる。スコリア粒をあまり含まない。
- 第Ⅾ層 褐色土層。粘性があり、第Ⅼ層よりも色調が明るい。スコリア粒が増加する。
- 第Ⅿ層 褐色土層。第Ⅾ層よりも色調が明るい。粘性に富み、青色のスコリア状の粒が混じる。
- 第ⅰ層 暗褐色土層。粘性が強く、赤や青色のスコリア状の粒を多く含む。次層の影響のためか、下半に行くに従い砂状の混入物が多くなる。
- 第ⅳ層 黄褐色輕石層。レンズ状に軽石・砂が入る。所謂東京バミス層と思われる。
- 第ⅲ層 暗褐色土層。全体に粘性と水気に富み、鉄分の凝聚したものが斑状に入る。
- 第ⅴ層 灰褐色土層。色調がやや灰色味を帯びる。鉄分の粒はあまり混じらない。
- 第ⅶ層 暗灰褐色土層。第ⅲ層にちかいが、より砂質的である。
- 第ⅷ層 灰色粘土層。粘土分が多く、所謂粘土層と呼ぶべき性質を持っている。水気を多く含んでいる。
- 第ⅸ層 青灰色粘土層。a・bに二分される。aはレンズ状に堆積し鉄分の凝聚物を多く含むがbではより灰色味が強く、鉄分もあまり混じらない。
- 第ⅹ層 青灰色粘土層。第ⅸ層よりも灰色が均一に広がる。鉄分もあまり含まれない。本層の途中までしか掘り進めなかったが、さらにに数cm続くものと思われる。

検出された遺構は、先土器時代の遺物集中10箇所(石器集中6、礫集中4)、縄文時代前期の住居跡1軒、同じく早期の炉台地穴10基、土壙21基、小穴1000余基である。先土器時代の遺物集中は北緯部、B区とは深くえぐれた感じの谷を挟んで分布している。縄文時代の遺構もほぼ台地縁辺に添うように地区全体に分布している。

調査は埼玉県教育委員会が地区南西部より開始し、10月より遺構確認を実施する。直ちに炉穴・住居跡・土壙等を検出し、これらの調査に着く。2月末までに地区全体の1/4程の測量を終え、一部先土器時代の確認調査を行う。昭和55年4月に財團法人埼玉県埋蔵文化調査事業団が発足し、引き続きC区の調査に着く。6月までに炉穴・土壙等の調査を終え、遺跡の測量を7月1日まで実施する。これに先立ち、6月中旬には台地北東の近世溝中より先土器時代のナイフ形石器剝片等が数点出土した。さらに遺構写真撮影のための清掃中、ローム層中に黒曜石の剝片が顔を出していることを確認し、先土器時代のかなり良好な遺物分布が想定された。しかし、住宅・都市整備公団の事業計画により、C区の調査を一時中断せざるを得なくなり、7月3日に航空写真撮影を行い、西部の調査及び東端の先土器時代について気掛りのままA区の調査に移る。A区の調査をすべて終了し、再びC区へもどったのは11月26日であった。ただちに地区西部の遺構確認を開始し、12月1日には縄文時代早期の炉穴1基、12月23日には同じく土壙を検出する。台地縁辺には近世の溝が走り、他

にムロ穴も多く存在する。昭和56年1月20日までに遺跡測量を終了し、1月12日より地区東縁の先土器時代の調査に入る。早くも1月19日には疊群を検出し、さらに数多くの石器も出土し始める。順次地点測量・炭化物分布・土層図等を作成し、台地北端にも遺物集中箇所を検出す。これにより、先土器時代の遺物集中は小谷をめぐるように分布していることが把握できた。2月に入ると連日降霜が続き、検出遺物等に影響を及ぼすことが懸念された。しかし、作業員の方々の御好意で薬束を入手することができ、これを敷つめるなどで事無きを得たことは幸いであった。ほぼ遺物の取り上げが終了すると、台地東部へグリッドの拡張を行った。3月5日までに広く無遺物層を認め、また下位の文化層についてもその検出が見られなかったため、西部の先土器調時代確認査に着く。北側斜面部の第Ⅱ黒色帯より遺物を検出するが、近世土壌が密集しているためにその広がりは認められなかった。3月31日に明花向遺跡C区すべての調査を終了する。

(朝持和夫・田中英司)

2. 先土器時代の遺構と遺物

(1) 第Ⅳ層の遺構と遺物

遺物分布（第156図）

石器・礫・炭化物は第Ⅳ層を中心として出土した。台地全体に広く確認グリッドを設けたが、資料はほぼ東部地域に限定して検出された。

石器分布 石器は六つの集中として遺存するものが多いようである。

集中1（第156・157図） C-7-8・13グリッドに位置する。長辺2.5m余の大さを持っています。100点あまりの石器から成るが、製品よりも碎片を中心としている。

集中2（第156・158図） C-7-16・21グリッドに存在する。長辺2mほどの大きさである。30点あまりの石器から構成される。碎片は少ないが、製品の数も多くはない。

集中3（第156・159・160図） D-6-9・10、D-7-6グリッドに位置している。9m余の長辺を持っているが、集中の密度は弱い。70点弱の石器で構成されている。ナイフ形石器と折断剝片が多く含んでいる。

集中4（第156・161図） D-6-25、D-7-21、E-7-1グリッドにある。長辺3m余となる。ナイフ形石器を含む40点あまりの石器から成る。碎片も多く密度も濃い。

集中5（第156図） C-7-5グリッドに位置しているが、構成数10点にも満たない石器集中である。

集中6（第156図） D-7-9グリッドにある。3m足らずの長辺を持つが、集中5と同じく石器数は10点に満たない。

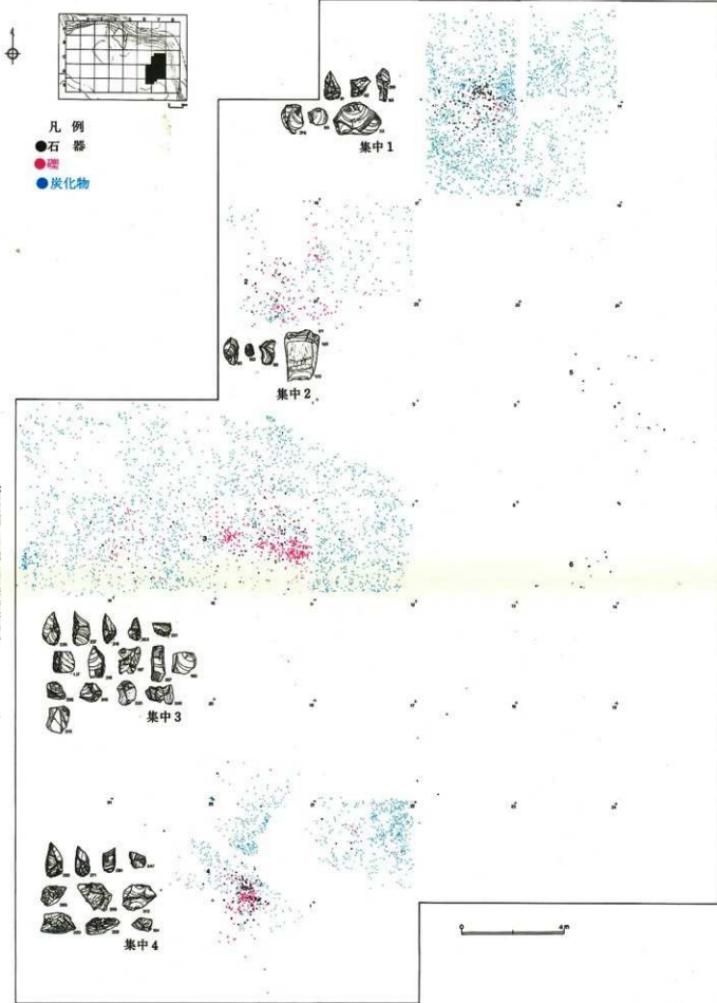
礫分布 細は石器集中部を中心として遺存し、同じく集中を成して礫群となる。明花向遺跡C区ではそうした礫群と思われるものが四ヵ所確認された。

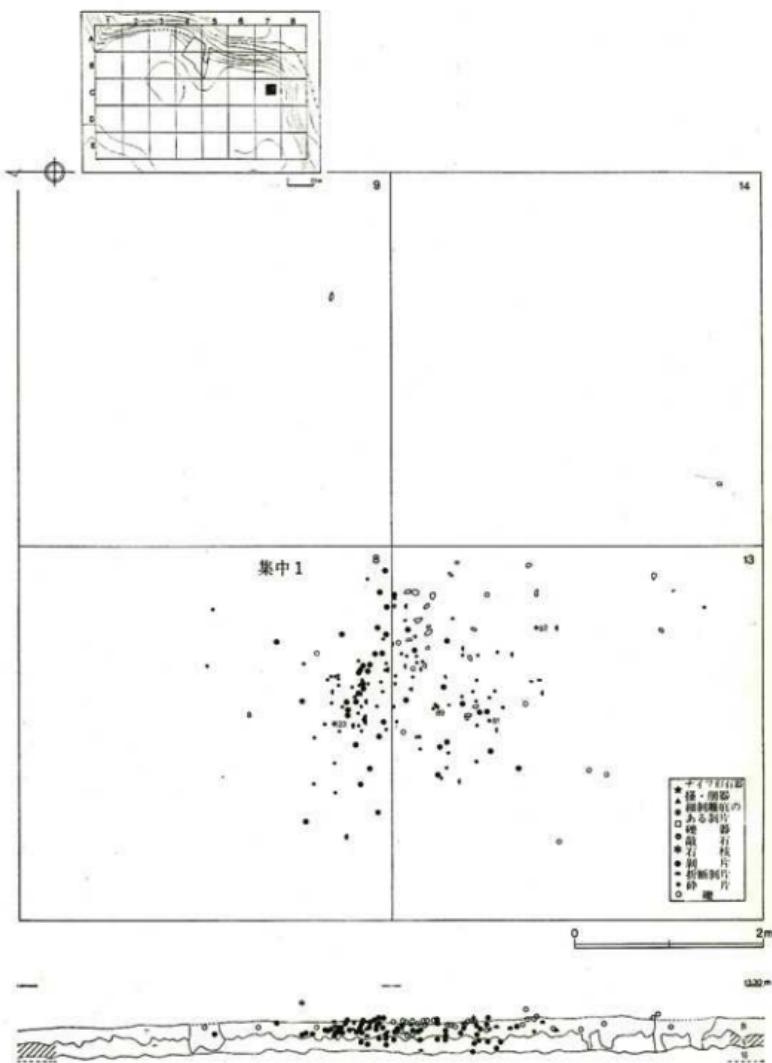
礫群1（第156・157図） 石器集中1と同じグリッドにある。主に北半部に石器が、南半部に礫が集中している。4m足らずの長辺を持ち、40個足らずの礫により構成される。石器ほど垂直分布での幅を持たない。

礫群2（第156・158図） 石器集中2と同グリッドに位置している。石器は礫群の西半部に重なって分布している。長辺5m余の大さを持ち、100個余りの礫構成である。東半部に拡大に近い大型礫が位置し、西半部では小形の破碎礫が多い。

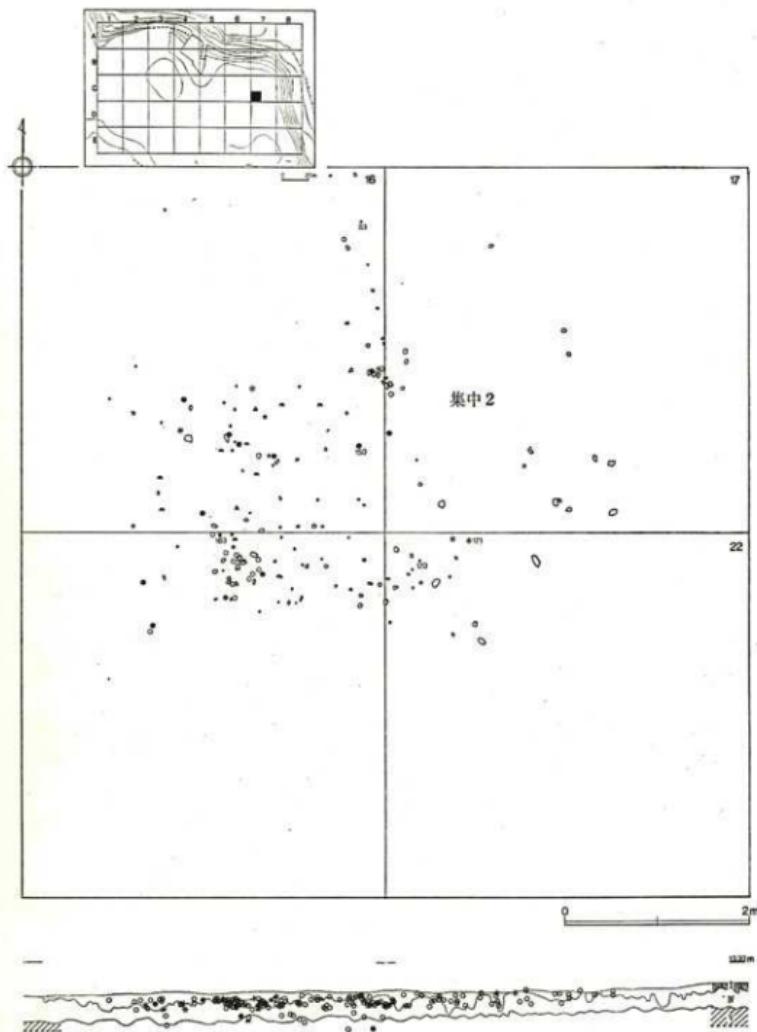
礫群3（第156・159・160図） 石器集中3と同グリッドに位置している。最も密度の濃い礫群である。平面分布では礫が最も集中する南端部とは逆に、北半部に石器が分布している。200個以上の礫によって構成され、密度の差はあるが長辺10mにおよぶ最大の礫群である。

礫群4（第156・161図） 石器集中4と同グリッドに位置している。長辺3m、60余個の礫から構成されて、小規模であるが密度が濃い。石器と礫とが北半とやや南半寄りに分かれて分布するような傾向がある。





第157図 先土器時代遺物分布(1)



第158図 先土器時代遺物分布(2)